
魔法日和

たび岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法日和

【Zコード】

Z5724M

【作者名】

たぴ岡

【あらすじ】

帝国の女王に生け捕りにされた魔術師のマウは、魔靈と呼ばれる異形たちが暮らす国で働くことを余儀なくされる。人類の天敵たる彼らとの共同生活を送るつゝに、やがて国際指名手配されたマウの転落人生に先はあるのか。

魔法使いがあ伽話の住人とされる世界を舞台に、社会から落伍した魔術師の日常を綴った冒險しないファンタジー。

現在の進行度… 帝国軍元帥が新規装備をお求め中…

第一話、將軍少女（前書き）

楽しんで頂けましたら幸いです。

第一話、將軍少女

四季の移り変わりが激しく、気まぐれな天候に年中悩まされる帝国領にも、降水確率0%の日へらいはある。

雲一つない青空を眺めて、さも満足げに頷いたのは、つら若き一人の少女であった。

年の頃は十五、六といったところか。波打つ金髪は肩に掛かる程度の長さで、毛先が軽く跳ねている。

黒で統一された軽装の皮鎧から覗く肌が、はっとするほど白い。伸びやかな四肢を覆い隠すように羽織っているマントはやはり黒一色で、肩口の留め具に刻まれている紋章は、紛うことなく帝国のそれである。

將軍。それが彼女の名であり、また課せられた義務でもあった。

ここ帝国では個人としての名称が意味をなさない。

唯一の例外を挙げるとすれば、帝国を統べる女王が遠征の帰りに拾つたという得体の知れない人物、魔術師くらいいだ。

彼に関してはのちに語るとしよう。

本日の將軍は、朝から上機嫌であった。

彼女の趣味は部下の黒騎士たちを鍛えることであり、中でも天候に恵まれた休日の特訓はとりわけ素晴らしいと常日頃から思っている。

昨夜など、興奮と期待のあまり、なかなか寝付けなかつた程だ。

その点に関してだけは、あの胡散くさい魔術師に感謝してもいいだ

る。い。

彼の天気予報はよく当たる。

そして現在、時刻は朝の六時。王宮の中庭に集合するよつ号令を掛けて、わずか五分で勢揃いした帝国名物の物言わぬ鎧たちは、一様にどんよりした雰囲気をまとっている。

休田返上だ。将軍の口元が自然と綻ぶ。

居並ぶは、王城の地下深くで培養された鋼の戦士たち。

君主に身命を賭し、御恩に報いる。機会は存分に。

それは、とても幸せなことだ。

たとえ、どれほどの屍を踏み越えようと。幾千、幾万の犠牲を払おうとも。

将軍は、そう信じて疑わない。

びくつく黒騎士たちに、さあ命令を下そうといふ一歩踏み出した、まさにそのとき。

「おお……」

奇怪な悲鳴を上げて落とし穴にはまつた将軍に、木陰で様子を窺っていた魔術師は感動すら覚えた。

奇縁により帝国で職を得た黒髪黒目の中年少年。

名を、マウといつ。

世にも珍しい「魔力」を使える人間だ。

第一王女の監修のもと、昨夜の内に仕込んでおいた将軍用の罠は、期待以上の働きをしてくれた。

ちなみに、将軍を陥れたことにさしたる理由はない。
といって言つなら暇だつたから。

しかし今ならはつきりと言える。

自分は、黒騎士たちの貴重な休日を守るために立ち上がったのだ…

私利私欲ではない…

第一話、帝国の魔術師

「……」

無言で落とし穴から這い上がつてくる将軍を、黒騎士に混ざつて見物していると、不意に顔を上げた彼女と目が合つた。

先程までの上機嫌が嘘のような無表情である。

日の光を浴びて輝く髪が砂まみれになつていて、マウは訳もなく残念に思つた。

そんな彼に、将軍はおもむろに背を向けて、マントを外す。取り外したマントを掌で叩くと、土ぼこりが舞つた。

作業を続けながら、彼女は言つ。

「言ひ訳があるなら聞く」

何の証拠もなく実行犯であると決め付けられて、マウは納得が行かなかつた。

たまたまこの場に居合わせただけといつ発想はないのだろうか。確かに自分が計画し実行に移したことは事実だが、それは結果論に過ぎない。

その旨を告げると、将軍は「そうか」と一つ頷き、

「では認めるのだな」

そう言われて初めて、マウは「」の不覚を悟つた。

「…誘導尋問といつ訳か」

さすがは帝国軍を率いる将だ。

マウは彼女に対する認識を改めた。そして同時に、思ったよりも自分は賢い人間ではないらしいことを、このわざかな遣り取りで自覚した。

この経験は無駄にはならないだろう。

しかし今、状況は自分にとって圧倒的に不利だ。

胸中で舌打ちした少年だったが、

(…こや)

この際、誰がやつたかなどどうでもいいのだと思い直す。

もっと重要なことだ。

これだけは言つておきたい。

「おれは完璧な仕事をした」

穴の深さ、角度は元より、日程の調整、カモフラージュの稚拙さに至るまで全てが綿密な計算に基づいたものであることを伝える。

將軍をこいつしてからかうために、自分が並々ならぬ情熱を以つて取り組んだこと、その熱意の前では如何なる障害も無力であったことを、技術的な見地を交えて長々と語つた。

「……」

それを、將軍は黙つて聞く。

振り返ると洪にマントを優雅に翻して羽織り、肩口の固定具で留め

たとき、既に彼女は剣の柄に手を掛けていた。

「…言い遺す」とはそれだけか？』

聴衆と化していた黒騎士たちが息を呑む。

彼らは、自分たちの指揮を執る少女がろくに剣を扱えないことを熟知していた。

彼女に求められるのは戦術指揮官としての能力であり、そこに個体としての戦力は含まれないからだ。

慣れない刃物など振り回して、怪我でもしたらどうするのか。

周辺の国々から悪鬼と恐れられる魔靈兵士たちが上官に向ける眼差しは、厳しくも生暖かい。

すると…黒騎士たちの動搖を敏感に察知した魔術師が、不敵に笑つた。

「無駄だ」

「何つ…」

将軍は我が目を疑つた。

今しがた「ぼくの落とし穴」を熱く語っていた少年の姿が、忽然と消失したのだ。

誰にも気取られることなく将軍の背後に回つた魔術師が、彼女の髪に掛かっている砂を指先でそつと払つ。

将軍は驚き飛び退くのがやつとだつた。

「魔術…か！」

実在すら定かでないとされる怪しきの技。

まさか、こんな下らないことで田口よりひとは夢にも思わなかつた。

しかし魔術師は「違ひ」と首を振る。

「魔力だよ。それと…僕を甘く見たね」

傲然と言い放ち、將軍の足元を指差す。

彼女の体重を支えた地面が、不吉な陥没を見せた。

マウは言つ。

「落とし穴は一つじゃない。二つだ」

本日、一度目の悲鳴が王宮に響いた。それはどこか間が抜けっていて哀れみを誘うものだったといつ。

自らの理論の正しさを証明したマウは、満足そうに幾度か頷くと、一転して脱兎の如く逃げ出した。

彼のあとを追い、怒りの形相で城内に駆け込んでいく將軍を、黒騎士たちはその場に佇み見送るのであつた。

第三話、人間一人

「それ禁止。それ禁止！」

？

苦労して行き止まりに追い込んで、次の瞬間には姿を消して、はつと振り返れば廊下の曲がり角からこちらを呆れ顔で眺めている…似たような事を三回ほど繰り返して、ようやく将軍は無駄な努力であることを認める気になつたらしい。

？

「瞬間移動は反則だろ、常識的に考えて！」

？

金切り声を上げて地団駄を踏む少女を、マウは半ば無視する形で、誰もいない城壁に話し掛けている。

？

「…うん、解散していいよ。彼女には僕から言つておく

？

その声が思いの外、温かみに満ちていて、より一層に将軍の疎外感が煽られるのだ。

？

「無視するな！」

？

柳眉を逆立てて怒鳴る少女に、魔術師は困ったように眉尻を下げる。絵本の中に出でてくる「悪い魔法使い」が身に付けているのは、ねじれた杖に黒いローブと相場が決まっているのだが、彼の場合はその限りではないようだった。

清潔感のあるカッターシャツは丈が合っていないのか、しきりに腕まくりをしている。いかにも少年らしい筋張った細腕が露わになっていて、思わず直視してしまった将軍は、自分が赤面していないか不安になつた。

散々走り回った所為で、呼吸も乱れている。いつたん冷静になってしまふと、部下の前で醜態を演じさせられた怒りを持続することは難しい。

？ 「…お前は、どうしてそう、いちいち、わたしに構う」

？ この魔術師が帝都に来てからというもの、將軍には心が休まる日がない。

？ 帝国は魔靈が住まう地だから、人間たちと敵対している。外部の人間という時点で警戒するべき対象なのに、怪しの技まで使うという。女王が連れて来たのだから信用してもいい筈なのに、將軍は同じ人間だから…人間同士が仲良くしている姿を、あまり周囲に見せたくないのだ。

？ 「……」

？ だが、黒騎士たちの考えは異なるようだつた。

廊下の曲がり角で、二人の遣り取りをおろおろと眺めていた黒騎士たちが、顔を見合わせる。

？ 将軍は知る由もないが、古く力ある者は太古より魔術師たちを重宝してきた。

？ 魔力を使える人間は、希少で便利なのだ。

？ この一人には、是非とも仲良くして頂きたい…

？ 結束した黒騎士たちが、少年魔術師の背を押し出す。

「ちよつ、何？」

？

振り返ったマウが目にしたのは、いつの間にか集まっていた黒騎士たちの、文字通り「鉄壁」であった。退路を断たれたマウは、内心で焦る。

？

物理的にどうにもならないものを、魔力でどうにかする「ひと」はできない。

？

先程の「影踏み」一つ取ってもそう。将軍は「瞬間移動」などと評したが、実際は違う。簡単に言えば、あれは幻術の一種に過ぎない。

？

「待て、お前ら。それはあんまりだろ。」

？

掴み掛かる魔術師の腕は細く、貧弱だ。たちまち黒騎士に取り押さえられる。

将軍の前に突き出されたとき、彼は罪人よろしく両腕を黒騎士によつて拘束されていた。

？

「くつ…お前らあとで覚えてろよ」

？

肩越しに呪詛を吐く少年を、黒騎士たちは意に介さない。

？

「あとで…か。そんな機会があればいいが」

？

今や立場は逆転した。腕を組んで立っている将軍が、愉悦に目を細める。

？

「…女の子が仁王立ちするのは、どうかと…」

？

「…」

せめてもの抵抗にと苦言を呈す少年に、将軍はにこりと微笑する。いつも撫然としている少女の、それはとても魅力的な笑顔だったといふ。

? 「連行しろ」

自分たちが望んだ結果とは違うが、將軍が嬉しそうなので別にいいかと…黒騎士たちは少年の小柄な身体を引きずる。

第四話、第一王女

「おやおやへ、そこにいるのはひょっとして将軍じゃないか！」

午前九時。足取りも軽やかに食堂に現れたのは、帝国の第一王位継承者たる姫君であった。

「」帝国には、宝口のように美しいと評判の、二人姉妹の王女がいる。

今、遅めの朝食を摂っていた將軍にわざとらしく声を掛けってきたのは、姉妹の姉の方で、「姉姫」と呼ばれることが多い。

女王譲りの長くきめ細やかな銀髪を、今日せよ頭の後ろで一括りにしていた。

將軍は口の中のものをむぐむぐと飲み下してから、詫めるような顔で第一王女を見る。

「姫様、またそのような格好で…」

純白のドレスは装飾過多と云ふこともなく、それでいて王族としての品位を損なわない清楚なものだ。

しかし随分と裾が足りていない。

すらりとした脚が露出しているだけでなく、彼女が歩くだけで下着が見えてしまつのではないかと將軍ははらはらする。

「いいじゃん。別に誰が見る訳でもないし」

何より一番の問題は、このヒメ君が自分の美しさを自覚していない、あるいは無頓着のことだった。

「駄目です！　この城には今、その…あの男がいるでしょ？？」

黒騎士たちに囲まれて育つた将軍だが、人間の男が女性に対して何かとんでもない野心を秘めているらしいことは一般教養として知っている。

「そ、そ、そんな破廉恥な…わたしは許しませんよ…」

何やら一人で盛り上がりしている将軍に、姉姫が向ける視線は冷ややかだ。

「…それを言つなら、お前さんだつて太もも丸出しじゃないのさ」
そう反撃すると、決まって将軍はしれつとした顔でひつひつと返すのである。

「わたしはいいんです。わたしは、女である以前に戦士ですから」

「馬鹿やうづー…？」

「何を唐突にキレてんですか！」

この二人は幼馴染みであるため、仲が良い。

第五話、第一王女

王城で寝泊まりしている者の中で、厳密に食事を必要とするのは、將軍と魔術師の二人だけだ。

黒騎士に至っては睡眠すら不要だし（ただし彼らは休暇を寝て過ごすことが多い）、特殊体質の王族はこの世から戦争がなくならない限りは、まず飢えることがない。

ましてや現在は戦乱の世…

畢竟、つい先日まで食堂の利用者は將軍のみであり、あとはごく稀に他国の大使がやって来て最後の晚餐をささやかに楽しむ程度であった。

そこに新たに女王直属の魔術師が加わるようになつたのは、割と最近の出来事である。

帝都で暮らす変わり種の人間一人。

彼らの食事を作るのは、城内の雑務がほとんど全てそういうふうに、黒騎士の仕事だ。

手入れの行き届いた厨房で、リズミカルに包丁を動かしていた黒騎士の手が、ふと止まる。

麗しい少女たちが囲つている食卓は賑やかで、そこだけがまるで別世界のような華やかさだ。

小鳥がさえずるような、と形容するにはこなれた姦しい食事風景を眺める黒騎士。

黒光りする鉄兜の奥で瞬く双眸が、一際鈍く輝いた……

これがのちに、とある少年を嬉し恥ずかしい悲劇へと誘うことにならうとは、まことにのときはまだ誰も知る由がなかつたのである……

それはもちろん、君主と仰ぐ女帝の長子にボディブローを叩き込んだ将軍とて例外ではない。

「ぐふうっ」

身体をくねに曲げた姉姫が、その場に崩れ落ちる。

帝国の正當たる継承者をノックアウトした将軍は、耳まで真っ赤にして息を荒げている。

「ハ、このセクハラ王女は……」

何かと過剰なスキンシップを図つてくれる姉姫は、将軍の幼馴染みである。

年齢が近く、また同性であることを理由に、折りを見ては将軍の発育具合を確かめようとしてくるのだ。

同年代の少女と比べて、やや細身なことを自覚している将軍は、その度に実力を以つて姉姫を諫めるのであった。

善き臣下とは、主を立てるばかりではない。時として過ちを正し導くものだ。

だが、主従揃つておかしい場合はどうすればいいのか。

呆れて眺めるより他あるまい。

結局この美しい幼馴染みに甘い将軍が、いつまでも死んだふりを続ける姉姫の頭を撫でていると、不意に第三者の視線を感じた。

「…何してんの、女同士で気持ち悪い」

冷たい光をたたえる翠玉の双眸が、姉姫と将軍を冷酷に見下ろしていた。

まだ幼い、十にも満たないであろう童女である。

戦場に身を置く者としては異例な程、将軍は周囲の気配に鈍感だ。それはひとえに、あらゆる困難から彼女を守護してきた黒騎士たちの優秀さを物語っている。

しかしそれを差し引いても、この幼い姫君の隠行は、

（只事ではない…）

となる。

言葉も忘れて見入る将軍に、件の童女は一層呆れて嘆息する。

「やうこうのいいから。あなた将軍でしょ。やうこう仕事じゃないのに、何で年々芸達者になつてくの…」

どこので育て方を間違えたかしら…と呟く彼女は、当然ながら将軍より年下である。

血を連想させる色鮮やかな真紅のドレスが、とてもよく似合つている。

氣を取り直した將軍が、先の遣り取りをなかつたことにじて臣下の礼を取る。

「これは姫様、本日もご壯健で何より」

片膝を折つて跪く將軍の立ち居振る舞いは、帝国軍将に相応しいものをとあつらえた竜皮の黒鎧にも決して見劣りしないだけの霸気が見て取れる。

「…本当にあなた、はつたりに命懸けてるわね」

いつそ清々しいまでに己の職務に忠実で、それ以外はてんで駄目な將軍を、帝国の重鎮たちは殊更に入っている。

こんな將軍、他にはいない。

いたら、普通はクビになるからだ。

妹姫とて、そんな將軍が嫌いではない。

大人びた苦笑を漏らす第一王女に、將軍は無念を禁じ得ない。

「殿下も昔は、姫様のように可愛らしかったのに…」

「その言い方だと、まるで今のわたしが可愛くないと言つていうように聞こえるから不思議だ」

復活した姉姫が、自分は庶民派なのだと主張した。

第六話、夢と現の狭間で

「ぐ、クラウザアアアツ！」

中庭に打ち捨てられていた魔術師が、血を吐くような絶叫と共に跳ね起きたのは、時刻も昼に差し掛かるつかといつ頃合であった。

別れを余儀なくされ、再会を誓つた戦友の悲壮な最期に、手の震えが止まらない。

何より残念に思えたのが、夢に見た脆くも美しい過去を自分がついぞ持ち合わせていなかことだった。

誰なの、クラウザー…

「ぐそ、一体どうなつてんだよ、おれの深層心理は…」

魔術師には変人が多い。

何故なら彼らは、通常と異なる視点で物事を捉えるよう訓練された人間だからだ。

これまで「魔術師にしてはマトモな方」と冷静に自己評価していたマウは、自分自身に裏切られたような気持ちで一杯だった。

「ショックだ…立ち直れないかも」

両手で顔を覆つて嘆く。

「…暑いし」

汗で張り付いた前髪をかき上げた頃には、しっかりと立ち直った。
彼にはそういう、刹那的な一面がある。

(エリは…中庭か?)

何故、自分がこんなところで寝ていたのかは…この際だ、きつぱりと忘れるごとにしても、マウはぼんやりと辺りを見渡した。

緑の調和が美しい、見事な庭園だ。

絶妙なバランスで保たれた動植物の連鎖は、完璧過ぎるが故に不自然で、特に如雨露を片手に水を撒いている黒騎士が自然界の仲間入りをしているのが奇妙に映える。

木々を分け入った先では、また別の黒騎士が、庭園を闊歩する人面樹と互いの信念を懸けて激突しているようだった。

「クラウザーとか…ないわ」

しゃがみ込んでこちらを眺めている姉姫に、貴様に僕の何が分かるのかと問い合わせたい。

「急に叫ぶな。びっくりしちだら」

そして将軍に怒られた。

責任の幾ばくかは貴様にあるんだとは言えない自分が愛しい。

「…日差しが眩しいな」

マウは抜けるような青空を仰ぎ見て、穴があいたら入りたいとはこ

「うこうことを指すのかと… 静かに納得した。

第七話、遠い彼

はつきり言つて、姫姉妹は仲が悪い。

女王の「力」をより色濃く受け継いだのが、年少の姫姉だったからだ。

建国から一貫して弱肉強食の理念を掲げている帝国。本来ならその時点で王位継承権の逆転が起こるのだが、実際にはそうなつていない。

しかし、将軍には何となく分かる気がした。

目に見える力だけが全てではないのだと。
より本質的なものを受け継いでいるのは、むしろ姫姉の方かもしれないと…

例えば、微妙なお年頃の妹の頬を無造作に摘んで引っ張るという…
血も涙もない残虐非道な振る舞いに、将軍は時として戦慄を覚える
のだ。

「…姉様、いい加減にしないと本氣で怒りますよ

年長者を立てる良識に恵まれた姫姉は、こんなときですら冷静だ。

しかし姫姉はこのとき、静肅に、そして真実、怒り狂っていたのである。

「妹よ、お前は最近…調子に乗っている

同時に彼女は、血を分けた実の妹の神をも恐れぬ行いに、深く嘆き、また苦しんでいた。

「何故、わたしと一緒にお風呂に入らない」

「馬鹿な……！」

二人の遣り取りを固唾を呑んで見守っていた將軍が、驚きのあまり椅子を蹴倒して立ち上がった。

彼女は信じられないといった顔で妹姫を見詰め、震える口元を片手で覆つた。

「嘘だと云つて下さい、殿下……そんなことがまさか……」

許されて良い筈がない……

姉姫の激昂も理解できよつといつものだ。

衝撃に慄く將軍を、妹姫は白けた顔で見る。

「そのコンビ芸を即刻やめろ」

その軽蔑しきつた眼差しに、將軍は素早く掌を返した。

「はあ……しかしあ一人だと、何かと大変でしょう?」

この姫姉妹は、一人とも髪が長い。幼な心に母親である女王の長髪を真似たものであらうことは想像に難くない。

かく言つ将軍も女王に憧れて髪を伸ばした口であるが、さすがに腰まで届く長さを維持しようとは思わない。

動きの邪魔になるし、手入れが大変そだからだ。

將軍は、撫然としている妹姫の艶やかな銀髪を眺める。

実際これだけ長いと、洗うのも一苦労ではないのか。

將軍の意見に賛同した姉姫が、小刻みに領いて実妹の華奢な肩に腕を回す。

「何だ？ お姉ちゃんと一緒にお風呂に入るのが恥ずかしいのか？ ん？」

その手を払い除けて、妹姫が端的に言つ。

「ちいぢ、うとうじこ」

彼女は、過保護に扱われるのが我慢ならないようだった。
ふと、会話にまったく加わってくる様子がない魔術師を不審に思い、
目線を振る。

二人揃うと悪さばかりする実姉と忠臣を叱つてもらおうと呼び出したのに、使えない男だという意味を込めての視線だった。

すると、どうだ。

つい先程まで別のテーブルでちびちびと水を飲んでいた少年が、自分たちに何の断りなく食堂を出て行こうとしているではないか。

そのあまりにも自然な所作に、妹姫は驚きを通り越してびびった。

「ちょっとー 勝手に元気に行くの」

自分でも驚くほど剣幕だったが、魔術師の反応は鈍かつた。

食堂から廊下へと続く扉に手を掛けた姿勢で一時停止し、何事か物思いに耽ることしばし。

「んー…まあいいか」と独りごち、結局そのまま退室するべく扉を閉めようとした拍子に、妹姫と田が合つて、そこでやつやく、

「え、おれ？」

と? 気に眩いた。

魔術で消えないだけましであると将軍は思ったが、妹姫はそう捉えなかつたよつである。

「どうしたお前! 無関心にも程があるだろ!」

腑抜けきつた対応に業を煮やし、ばんばんとテーブルを叩く。姉姫もそれに追随する。

「どうしたん、マウ?」

この姉妹の温度差は、やはり彼と接してきた時間の差から来るものなのだろう。

女王直属の帝国魔術師という大層な身分のマウだが、世間一般では魔術師の実在そのものが危ぶまれている昨今、具体的な仕事がこれと言つて特にない。

同じく暇を持て余している第一王女と行動を共にする機会が多くな

るのよ、『Jへ自然な』ことだつた。

しかしJのH女、随分と氣をへどある。

図らずも無視する形になつてしまつた」とを察して、マウは「めんごめん」Jと非礼を詫びた。

「ちゃんと謝りなさい。」

といつとう女児に叱られる始末である。

「まず座るー」と手近な椅子をぽんぽん叩く彼女に、マウはあえて逆ひつ懸を圖せなかつた。

しかし反省の色はない。

人の話をきかんと聞けといつのは、魔術師をやめないと図つ等しいからだ。

社会に溶け込めない彼らは、それ故に歴史の表舞台から姿を消したのである。

魔術師としては希有なほど常識的な觀點を併せ持つマウだからJが、上辺だけでも詫びることができたのだ。

「ホントJめんね。ほり、おれ、たまにその辺をさまよつてる変なのと交信してて一重音声状態だから」

そしてこれ、實に危ないひとの発言である。？

第八話、使い魔

そうだねえ、使い魔と話してることが多いかなあ…

きっかけは魔術師のそんな一言であつたと、将軍は記憶している。

使い魔。

その単語に姫姉妹が著しく興味を惹かれたのは、無理からぬことであつた。

彼女たち「王族」は、一定以上の学習能力を有する生物にひびく恐れられる。

体長が小さなもののほど、その反応は顕著で、特に哺乳類の子供などは目が合つただけで恐慌状態に陥り、我先にと逃げ出してしまつ。

しかし王族とて、子猫を見て可愛いと感じる感性がない訳ではないのだ。

あの毛こじらした毛玉みたいな生き物は、触つてみたらどんな手触りなのだろうか…

柔らかいのだろうか…
きっと温かいのだろう…

そんなことを夢想して過ごした一日が、必ずと言つていいほどある筈だ。

しかし、その夢が実現することはない。

何故なら彼女たちは王族で、小動物を愛する心の豊かさを持ついるけれど、それでも子猫は逃げるし、花は枯れる。

そんな彼女たち、「魔術師はこう言ったのだ。

「別に逃げやしないよ。野良猫じゃないんだから」

「……」

沈黙。

姉姫と妹姫は、無言で顔を見合わせた。

魔法使いの使い魔と言えば、黒猫である。しかもあと鳴く、魅惑の生き物だ。

使い魔とこうべらつだから、ひょっとしたら言葉を喋るのかもしない。

「ああ、でも」

とマウが思い出したかのように付け加える。

ぱっと顔を上げて傾聴する姉妹に少し気圧されながら、彼はちらりと将軍に一瞥をくれる。

「……いや、たぶん将軍には見えないだろうなと思つて」

その言い回しに、将軍は首を傾げる。

「わたし…には? 何でだ? わたしだけ仲間外れか」

寂しそうに田を伏せる彼女に、それが演技だと見抜けない魔術師は慌てる。

「あ、いや、そうじゃなくて。魔術師でもないのに見える方がおかしいの。君が普通」

説明すると長くなるので省いたが、マウが言つ使い魔といつのは、絵本に出てくるようなそれとはまったく異なる。

魔術師にとつての「使い魔」とは、自らの分身であり、魔力を補助する役割を与えられた仮想の人格である。

姿形は人によつて様々だが、独立して動けるように設定するため、イメージしやすいよう動物をモチーフにする魔術師がほとんどだ。制御が難しい高度な魔力を用いる際、魔術師は使い魔に負担の一部を預けることができる。

この世に完璧な人間などいないよに、己の魔力を完全に律することができる魔術師もいないから、もっと単純に…魔力を強化してくれる存在と言つても差し支えないだろう。

つまりこの想像の産物なので、マウの言つ通り、見える方がおかしいのだ。

正直、姫姉妹に…ところより王族には見えるところのも憶測で、断言はできない。

だが、王族が魔靈を生み出し支配する存在だというなら、可能性は高いと踏んでいた。

そこには、やつとマウなりの願いが込められていて、彼が魔術師の社会で生きることをやめた理由の一つが関わっている。

彼のそういう部分が、将軍からすると付け入る隙になるのだから、人生は難しい。

彼女は、マウにこう言ったのだ。

「やだ」

「やだじゃない」

マウは脱力して言い返したもの、「ええ、面倒くせえなあ……」とぼやくばかりで、無理だとは言わなかつた。

自分に見えるものが他人に見えない道理はない。それが魔力の基礎的な理屈だからだ。

彼は視線を宙にさまよわせたあと、全責任を彼女本人に押し付けることにした。

「最初に言つとくけど、返品は利かないぜ？」

「どんと来い」

将軍は安請け合ひした。

もちろん後日、後悔することになる。

このときはただ、無理難題を言つた手前、引っ込みがつかなかつたのだ。

マウもさうと説明すればいいのに、その労力を惜しむから、余計にあとで面倒くことになる。

「こじで妹姫が、マウの袖をくいと引つ張った。

大きな瞳が期待に輝いていた。

「何するの？」

思えば、彼女が魔力を見るのはこれが初めての経験である。

無邪気な目を向けられて良心の呵責が痛むのは、きっとマウが給料泥棒だからだ。

さしもの彼も、このときばかりは魔術師としての職分を果たそうとした。

小さな子供にも分かるよう言葉を選び、

「将軍だけ仲間外れで可哀想だから、何とかしてあげようね」

結果として無いも同然の説明で終わる。

彼は妹姫の頭を撫でながら、将軍の額に人差し指を当てる。

今、彼がやろうとしているのは、将軍の認識の壁を取り払い、彼女の世界に変革をもたらすという劇的リフォームであった。

そしてそれは、マウにとって、そして難しいことではない。

魔力の制御という点では、彼の右に出る者はそういない。

それは言い換えれば、彼の使い魔が極めて優秀である」との裏返しだった。

「そんなに難しい術じやないんだけど……丁度いい。おれの使い魔を紹介するよ」

姉姉妹が息を呑んだ。

年長者としての矜持がそつとせたのか、こほんと咳払いを一つして発言権を主張したのは姉姫である。

「あー……マウ? その使い魔とやらは…」

そもそもビジビジでもよさそうな態度を装っているが、落ち着きなく揺れる瞳は潤み、白磁のようにきめ細やかな肌は微かに紅潮している。

彼女は繰り返し手元でそわそわと指を組み直しながら、意を決して尋ねた。

「か、可愛いのか?」

愚問だ。マウは将軍の淡い瞳をひたと見据えたまま「もうひるん」と頷いた。

「当然さ。世界で最高の、僕の相棒だ」

そう断じた少年の声色には、普段の彼にはない絶対の自信が満ち満ちていた。

その声を起点とし、突如として姉姫の視界にノイズが走った。

それは、魔術師が自らの内面に住まわせている使い魔を発現させるときの前兆だ。

歪んだ空間に、小さな輪郭が浮かび上がる。

不思議な現象だった。

マウの肩の上に何かが乗っているといつ理解は、あとから遅れてやつて來たのだ。

少年がその名を囁いたのはいつだつたか、明確な記憶はなかつた。

「おいで、アプリカ」

第九話、アプリカ

でかい。

魔術師の肩に現れたものに対する、將軍の第一印象である。

小鳥くらいの大きさはある。

猫としてはむしろ小柄で、にも拘らず將軍が大きいと感じたのは、つまりそいつが猫ではなかつたからである。

哺乳類ですらない。

(これは…)

將軍は、魔術師自慢の使い魔を、改めてまじまじと観察した。

つぶらな目をしている。

体重を支える後脚は思いのほか逞しく、グリーンのボディが鮮やかだ。

触角の角度が気になるようで、しきりに前脚で調整している。

残る前脚と中脚で器用に抱えているバイオリンが特徴的だった。

(…これは、虫といつやつなのでは…)

図鑑で見たことがある。一部の地方に生息し、夏から秋にかけてぎっちょんぎつちょん鳴くという…キリギ里斯だ。

可愛いかと問われると、いたしか答えに窮するが…
ぴかぴかのバイオリンを大事そうに抱えている姿には、どこか愛嬌がある。

使い魔の正体が昆虫だと知つても、將軍は落胆しなかつた。

そもそも彼女は動物全般に対して特別な思い入れを持たないからである。

黒騎士たちの方がよほど可愛いと感じる。

こうして使い魔が見えているからには、どうやら魔術は成功したらしい。

なるほど、見える筈のないものが見えてるというのは奇妙な感覚だ。

將軍の視線の直線上には、壁に固定された燭台がある。

位置関係から、本来なら手前側のバッタ（スズメ大）に隠れている筈の燭台が、彼女にははつきりと見えていた。

それは使い魔が半透明だからという訳ではなく、どちらも見えているという結果だけが残っているのだ。

あまり深く考えると混乱しそうなので、將軍はそのままを受け入れることにした。

將軍の反応をつぶさに観察していたマウは、考へることを放棄してぼつりとしている彼女に一つ頷き、

「うん、成功したみたいだね」

と微笑む。

安堵の気持ちは特に湧かなかつた。

アプリカ：彼の使い魔の名前だ…が発現した状態での魔力は、まず失敗した試しがない。

仮に無茶な条件で挑んだとしても、事前にアプリカが魔力の破綻を

報せてくれるから安心だ。

我に返つた將軍が、感想を述べる。

「心なし世界が瑞々しく見えるような…」

「うん、それは氣の所為だね」

口からでまかせを言つ将軍は、マウス笑顔できつぱつと話した。

彼は肩にとまつてゐる使い魔に、簡単に事情を説明した。

「アフリカ、この子は將軍。僕の同僚だよ」

すると使い魔は、尾部をぴんと立てて、身体をやや前傾した。お辞儀しているように見えなくもない。

むつ…と將軍はうなつた。

最初はたかが虫と侮つたが、この知性溢れる仔まいはどうだ。得意げにこひらを見てゐる魔術師などより、よほど紳士的で賢そではないか。

將軍は自らの思い違いを語り、頭を下げる。

「貴君を侮つていたことを詫びさせて欲しい」

帝国には握手の習慣がない。

敵意がないことを示すために、彼女は腰元の剣を鞘ごと引き下げた。

「帝国軍元帥黒騎士団団長だ。他に名を持たぬ故、將軍とだけ」

将軍は魔術師を同僚とは認めていなかつたが、この場では彼を立てた。

「使い魔は喋らないよ

それなのに要らない茶々を入れてくるから、将軍はアプリカに一言「失礼」と断つて、彼の主人に閑節技を仕掛けねばならなかつた。

「お前は礼儀といつものを知らんのか」

「痛い、痛い」

引き倒されて腕ひしき十字固めを極められたマウが、切なく喘いだ。透き通つた翅を広げて舞い上がつたアプリカを、帝国の王女は言葉もなく見詰めていた……

「つ……姉様！」

その場でがくりと膝を付いた姉姫に、姉姫が寄り添う。

床に突つ伏した姉姫は、胸に去来する虚しさと戦つてゐるようだつた。

「もふもふ違う。それ、もふもふと違う……」

彼女は、ただ悔しかつたのだ。

巨大な昆虫を可愛いと言ひ張るマウの美的感覚が残念でならなかつ

たし、何よりそんな彼の言葉に胸をときめかせた自分が無様で… 彼女は嗚咽を漏らした。

「虫じやん…」

虫じやん。

その面白に秘められた思いの深さを知つて、今更ながら妹姫は愕然とした。

妹姫は、今年で七歳になる。

姉姫は將軍より一つ年下の十四歳だ。

実際に倍近い歳月を、姉は歩んできた計算になる。

自分の身に置き換えてみれば、これまで過ごしてきた月日とほぼ同じだけの期間を猫に焦がれて生きていくのだと想像し、妹姫はぞつとした。

とても耐えきれない。

夢も希望も打ち碎かれた姉姫の落胆や如何なるものか。

妹姫は、姉を刺激しないよう慎重に励ましの言葉を口にする。

「…ですが姉様、あれはあれで愛嬌があると妹は思います」

「おちび…」

妹の愛称を呴き、姉姫が顔を上げた。

妹姫が微笑み、手を差し伸べる。

「そ、姉様。お立ちになつて」

手と手を取り合つ姉妹。

王位継承権を巡つて骨肉の争いを繰り広げる一人が、今このときは静いを忘れた：

面白くないのはマウだ。

「何だか納得いかねえ…」

呼び出されておいて怒られるし、喚べと言つから騒んだのに、この扱いである。

同郷の魔術師たちにも甚だ不評だったから、今更どうひつて言われても気にならないが、それにしたつてあんまりだ。

「こ、こなに可愛いの？」

再びマウの肩に降り立つた使い魔が、手にした弓で弦を弾く。

優秀なアクリカ。

趣味は音楽鑑賞で、自分自身もバイオリンを弾く。

穏和で礼儀正しいこの使い魔は、マウのつけた白模だ。

第十話、分岐点

午後。騒動もひと段落し、四人はいったん解散することに。

とはいって、マウにはやることがない。

さてどうしたものかと思索していると、両手を突き出して伸びをした将軍が声を掛けてくる。

「わたしは城内の見回りに行くが、お前はどうする?」

マントを摘み上げて、身体を左右にひねりながら身だしなみをチエックする所作が、いかにも女の子らしくて微笑ましい。

だから、暗に「この只飯喰らいが…」「罵られているような気がしたのは、きっとマウの被害妄想に過ぎないのだな」。

それすらも、器用に片足立ちをして両足を整える将軍の白い太ももの前では霞んで見えるから現金なものだ。

女体の神秘に感じ入つて小刻みに頷いているマウの不埒な目線に気付いて、将軍がさつと赤面した。

「…やっぱり駄目だ。お前は部屋で大人しくして!」

それも退屈な話ではある。

そそくさとマントで四肢を覆い隠した彼女から視線を外して、マウは姫姉妹に目を向ける。

「二人はどうする？」

姉妹の午後の過^ハし方は実に対象的なものだった。

「わたしはお昼寝の時間だ」

「図書室で授業の続きを」

「…そう」と頷くマウニ、姉姫が聞いてもいないのに言い訳をした。
その気持ちが、マウニによく分かる。

「おちびはまだ幼いからね。わたしには授業なんて必要ないけど」

言い訳めいてはいたものの、それは事実の一端でもあつたから、将軍は口出ししない。

この姉妹が女王から受け継いだものは、力や容姿だけではない。
高い知能もその一つだった。

まだ幼い頃、妹姫が生まれてさえいなかつた時分の姉姫（当時は「姫」とだけ呼ばれていた）は、非常に勤勉で物静かな美少女であつた。

あの頃が懐かしい。

美しく成長した姫君の頭の中身が多少愉快なことになつていようと、
将軍の忠義を搖るがない。

それは、現在進行形で可愛らしい妹姫が、これから数年で前例を辿り悲しい進化を遂げたとしても同じことだ。

燃え立つ使命感を新たにする将軍の横では、マウが最近では癖になつてゐる腕まくりをしながら、

「…授業かあ。面白そだね」

「一緒に来る？」

妹姫は、この年上の少年に少なからぬ興味を抱いている。

魔術…正しくは魔力か…に対する知的好奇心もあつたし、何より尊敬する母がわざわざ連れてきた人間だ。

自分が生まれる前からずっと帝国に仕えてくれている将軍は別として、王族を恐れない人間というのは…ひどく珍しい。

将軍には軽んじられているようだが、公の場で実在を確認された魔術師の噂は、近隣の国々に多大なる影響を及ぼしつつある。

人は、未知のものを恐れるものだ。

そう遠くない未来、帝国魔術師として国際指名手配されるのは、まず動かない事実だろう。

彼の関心を買つておるのは、将来的に決してマイナスにはなるまい…

「先生は誰なの？」

「それは行つてみてのお楽しみね」

マウの問い掛けに、彼女は自分が主導権を握れるよう巧みに受け答

えする。

「わたしが魔力に詳しくないよつに、あなたは魔靈のことがあまり知らないみたいだから。きっと驚くわ」

「それは楽しみですね、姫」

妹姫の誘いに、ほいほことつこに行こうとするマウに、将軍が声を荒げた。

「駄目だ！ やっぱりお前は、わたしと一緒に来い。姫様と二人きりなど…天が許してもわたしが許せん」

そう言われては、妹姫も殊更には反論できない。

魔術師は確かに貴重な存在だが、女王より直々に黒騎士の指揮権を賜っている将軍は、この世で唯一の存在だからだ。

「ええ…」と見るからに乗り気でない様子のマウに、妹姫はいった
ん満足する」とした。

「城内の案内なら、図書室に立ち寄ることもあるでしょう。またあとでね、マウ」

第十一話、将軍とマウ

姉姫に手を引かれて食堂を退室していく妹姫を、将軍は「むむむ…」「うなつて見送る。

完全に見透かされている。

末恐ろしい姫君だ。

確かに…見回りといつのばは方便で、将軍はマウに城内を案内する腹積もりであった。

それは、わずかではあるが彼女なりの歩み寄りである。

彼女の心境を変化させたのは何か。
それは使い魔であった。

黒騎士を召喚し使役できる将軍は、心のどこかで魔術師を格下と見ていたのだろう。

生まれて間もなく女王に拾われ帝国で育てられた将軍は、戦士を尊び軟弱者を嫌う傾向が強い。

まことに、出で女王直属に躍り出た魔術師への嫉妬心も、なかつたと言えば嘘になる。

しかし一連の騒ぎを通して、彼女は考えを改めざるを得なかつた。

この世は、広い。

魔術：あれは自分がこれまで信じてきた強さとはまったく別種のものだ。

そしてそれを振るう人間たちの実在が証明された以上、自分は更にその先を考えねばならない。

そのためには、まずこの胡散くさい魔術師との信頼関係を築き上げることこそ急務であった。

うんうんと頷いた将軍は、きこちない笑顔でマウに振り返る。

「ときには、術士

「…何？」

田の奥がまつたく笑つていらない彼女に、マウは警戒心を露わにする。その態度にかちんと来ながら、将軍は空中でバイオリンの調律をしているアブリカを指差した。

「使い魔とは出しひ放しのままでも良いものなのか？」

何の前触れなく魔力に興味を示し始めた将軍に、マウは一層怪訝な顔をする。

しかし隠していても仕方のないことではあった。

「良くはないよ」

使い魔が発現した状態と、そうでない状態とでは、魔力の精度に大きな隔たりがある。

仮にデメリットがないなら、わざわざ普段、内面に落とし込んでい る意味がない。

確かに…使い魔は独立した意識を持つている。

が、その意識は魔術師本体の肉体を基盤としたものだ。

要は一人分の思考をマウの脳がぱらぱらに処理していくようなもので、これはなかなか疲れる。

脳に掛かる負担としては、ひたすら計算式を解いている状態と言え ば通りはいいだうか。

そうした事情を省いて、マウは端的に言へ。

「まあ、疲れる」

「や、そつか…」

一瞬で終わってしまった会話で、将軍は氣落ちする。

しかし…これで終わらないのが、マウという魔術師の特殊性だった。

「君は、もしかして魔術を使うのに魔力を消費すると思つてゐるよね

？」

その声が、先の遣り取りとはうつて変わって穏やかだ。

この少年は、驚くべきこと…それは本当に稀有なことである…空 気を読める魔術師なのだ。

ぱっと顔を上げた将軍が、調子を取り戻して泰然と頷いた。

「うん。…違うのか?」

「もちろん違う」

マウは、幼い頃に受けた講義を思い出して、詰んでじる。

「人間の身体のどこを探したって、魔力なんてものはないんだ」

「人間の身体のどこを探したって、魔力なんてものはないんだ」
ないものは作るしかない。おそらく最初の魔術師はそう考えたのだ
ろ?。

最初から存在しないものを頼つても、それは無いものねだりでしか
ない。

「魔術」の出発点は、まず「魔力」を否定したことから始まったの
だ。

「だから僕たちは、自分たちの力を魔術とは呼ばない。魔力を制御
するのは理論で、それは術と呼ばれるものだけど、魔力と理論は常
に二つで一つだからね」

魔術師でも何でもない将軍には、この男が何を言っているのかさつ
ぱり分からなかつたが、さしあたつて気まずい雰囲気が払拭された
のを喜んだ。

「やうか。魔術師というのは頭がおかしいのだな」

とりあえずこう語つておけば間違いないと思つたし、それは違えようもなく核心を突いていたから、マウの頬を引きつらせたものは、きっとこの世の真理というやつだった。

「」

將軍の言つ「ちよつと残念な人々」に分類されるマウは、否定の言葉を欲して己の分身に視線を走らせるも、

11

アプリカは気まずそうに田線を逸らし、そして何か急用を思い出し
たかのように慌てて姿を消した。

۱۰۵

自分に似て逃げ足が早い使い魔を、このときばかりはマウも責められかつたといふ。

そんな主従の心暖まるヒュンボルトを尻目に、將軍は浮き浮きとした様子で懐から羊皮紙を取り出す。

「では、今度はわたしの番だな」

そう言ってテーブルの上に広げたのは、城内の見取り図であった。仮に彼女がどこぞの英傑に倒されたときには、王城攻略の鍵ともなり得るこのアイテムが人間側に転がり込む寸法である。

…という訳ではもちろんなく、毎年お城の中で迷子になる黒騎士がいるため、常に持ち歩いていっているのだ。

傍らに立つて見取り図を覗き込むマウに、彼女は言った。

「よし、見たな。今から三十秒で頭に叩き込め」

「え、無理…」

「一秒無駄にしたぞ」

ファンタスティックな午後になりそうな予感がした。

第十一話、胸高鳴る城内案内

魔術師の学校には転入生が多い。

魔力に覚醒する年齢は、必ずしも平等ではないからだ。

ただし、ある一定の条件を満たした人間がある日突然、魔力に目覚めることがないとされている。

その「条件」とは、意外なところで「身長」である。

おそらく脳の発育が関わっているとされているが、定かではない。

必然的に魔術師の雛は子供であり、それを察知した人材開発担当の魔術師が可及的速やかに現地に飛び、保護する手筈となっている。

そこで面談を実施し、魔術師として生きるか、あるいは記憶と魔力を封印するかの一択を迫る訳だ。

知らないおじさんについて行つてはいけないという真っ当な教育を受けた子供は、たいてい後者を選ぶ。

そして何かしらの事情があつて前者を選択した子供は、法的に問題がありそうな手法で社会からのドロップアウトを果たし、「学校」に放り込まれる。

これまでの人生観が碎け散り、訳が分からぬものを見たり聞いたりした挙句に見知らぬ土地に連れて来られた転入生は、そのほとんどが不安に怯えている。

そこで優しい同級生が登場し、「学校を案内してあげる」と言葉巧みに近付き恩を売るのだ。

特にその転入生が将来有望なイケメンだった日には、年端も行かぬ魔女たちの苛烈な生存競争が幕を開けることになる。

自分には、とんと縁のないイベントだと他人事のように眺めていた幼き日のマウだつたが、よもや…

「遅い！ 駆け足！」

…よもや、これほどまでにハードなイベントだつたとは、夢にも思わなかつた。

將軍主催の城内探索ツアーは、序盤にして早くも佳境に差し掛かっている。

とにかくこの王城、廊下が長い。

長いだけでなく、幅が広い上に天井も高い。普通にボールを持ってきて遊べるレベルだ。

さもあるん。

おそらく巨大な魔靈が通れるよう設計されているのだから。

しかし、だからといって…

マウは息も絶え絶えに、

「なんで、いちいち、走つ…るんだ」

「甘つたれるなあ！」

「ええ…」

一蹴されて自分を奮い立たせることができるはず、マウス血を熱く滾らせていかつたし、将軍が吠えても可愛らしくてばかりで一向に危機感が煽られない。

「これしきで首を上げるなど、男として恥ずかしくないのか！…気持ちの問題だ。やればできる。がんばれがんばれ、諦めるな！」

バテるバテないよります先に、イケメンは滅ぶべきところマウスの信念がへし折れそうだった。

付け加えて言づなら、隣で熱心に精神論を提唱している彼女には、ドーピングの疑いがある。

同じだけの距離を走っているのに、いつもまで差が出るのはおかしい。

何かある。

そう、仮に自分なら…

マウスは、疑惑の視線を少女の慎ましい膨らみに向けた。

「その鎧…」

「あべつり」

「あべつりたー…あ、ここ、すっつけえ… 鎧に向か細工してあ

んな？」

「…さて、到着したぞ。ここが第一チェックポイントのスライムの間だ」

マウの弾劾をものとせざ、彼女はきりりとした表情で大きな扉の前に立つた。

もしも懲りずに走ろうとしたら脱がす。誰が何を言おうと、脱がす。そう決意しながら、マウも将軍のあとに続く。

見れば、扉の横にはこれまで大きな表札が掛かっていて、そこには幼い筆致で「すらいむ」とある。

大丈夫なのかこの国はと、他人事ながら心配になるマウだった。

第十二話、スライム

遠い遠い遙かな昔。

数千年、あるいはもっと以前から、人類と魔靈は互いの存亡を賭けて争ってきた。

魔靈。すなわち「女王の眷族」である彼らは、原則として一種一体のみの存在であり、とりわけ強力な個体ともなれば単独で一国を滅ぼし得るという。

この重厚な扉を開けた先で眠っているのは、そうした魔靈の中でも最古の存在だと言われている。

固睡を呑んで見守るマウの前で、不敵な笑みを浮かべた將軍が扉に両手を付き……

「…くぬつ」

「開かねえし」

テイクツー。体勢を変えて、もう一度。

「…おりやつ！」

でも駄目。

將軍のショートコントを見ていっても仕ないので、マウは扉をコンコンとノックする。

直後、ぎこと内側から扉が開き、中から黒騎士が不審そうに顔を出した。

「ふあつー。」

勢い余った将軍が、奇怪な悲鳴を上げてすりこんでうつりと室内に転がり込む。

（身体を張ってるなあ…）

と半ば感心しながら、マウも将軍のあとに続く。

「おおっ！」

そこまで叫んでいたものに、思わず彼は感嘆の声を上げた。

将軍が舞つた…！

顔から着地しそうなイメージがある彼女をさり気なく魔力で吊つてあげたところ、室内で待機していた黒騎士の神懸かり的な反応速度が奇跡を呼んだのだ。

まず、反射的に両腕を突き出した将軍の手が、黒騎士の肩に接触。主人の身を案じた黒騎士が、衝突を避けるべく急速に旋回。

しかるのち、魔力による浮遊が将軍に働きかけ、自身も転倒を避けようとしたのだろう、彼女の身体は黒騎士を支点に宙を舞い、空中で一転、二転し、魔力の補助を交えながら華麗に着地を決めたのである。

これぞ、まさしく三位一体の絶妙なコラボレーションであった。

自分の身に何が起こったのか理解していないのだろう。

将軍は涙目で硬直している。

主人の近年稀なアクロバットに、黒騎士たちも目から鱗である。互いの健闘を称え合い、興奮冷めやらぬ様子でがしがしと籠手をぶつけ合う。

まあ、それはともかくとして…とマウは室内を見渡す。

やはり広大な空間であった。

カーテンを閉め切った室内は薄暗く、廊下から差し込んでいる明かりを除けば、燭台に灯された鬼火だけが唯一の光源になっている。

燭台とやや距離を置いて壁面に所狭しと並べられた勲章には、部屋の主のさりやかな誇りと謙虚さ、あるいは実直さが見て取れた。

床一面は飾り気のない石畳で、部屋の中央に置かれた巨大な水槽が異様な雰囲気を醸し出している。

人が五、六人入っても、まだ余裕がありそうな特注品である。

その水槽の中できつしりと詰まつてくつろいでいるのが、この世で最古の魔靈であり、黒騎士が生まれる以前より王城の守護を担ってきた大御所である。

不死と言つても差し支えない生命力と再生力を備え持ち、あらゆるもの溶かしてしまった溶解液で構成されるその巨体は、いつたん攻

めに転じれば籠城崩しの名手と化すといつ…スライムだ。

魔靈の大半が发声器官を有さないよう、彼もまた音声による意思疎通の手段を持たない。

だから精神の再構築を果たした將軍は、張り切つて大御所の紹介に乗り出したのだが…

「術士。 いちらが何を隠そつ、」

「…ああ、その件はもう少し待ってくれますか？ 今日は別件でして。素材が集まり次第… いえ、それには及びません。 いちらの準備もあるので」

何やら会話しきものを交わしている魔術師に、度肝を抜かれたのである。

しかも知り合い同士のよつな… 何だそれ。

「まあ、遅くとも一週間以内には。 その節には… はい、ご面倒をお掛けします」

だんだん商談めいていく内容に、將軍は何か尋ねて良いものかと悩み、

「何だそれ」

結局そつ言つた。

すると、マウは切なそつに眉間に寄せた、こいつ言つた。

「だつておれ、別に今日かわいがる訳じゃないし」

それは…

將軍は、じりじり数田の出来事を思い返し、ぽんと手を打つ。

「…それは盲点だったな」

水槽の中でスライムが、ふるふると震えた。

第十四話、対話

そうなるよう訓練された人間だから、魔術師たちの世界へのアプローチの仕方は、常人とは異なる。

魔靈に意識があり、その方向が世界に向いているなら、彼らのメッセージを拾い上げるのは、そう難しくない。

それは見方を変えれば、人間が光を頼りに物を見て、音を頼りに物を聞くことと本質的に同じことだからだ。

「何でもありか」

と投げ遣りに吐き捨てた将軍は、もちろんそんな変態的な知覚力など持ち合わせていない。

魔靈の始祖たる女王ですら同じことだろう。

要はこちらの意図を理解できるだけの知能さえあれば作戦には事欠かないし、最悪筆記といつ手もある。

ちょひど、こんな具合に。

『元帥どの』

身体の一部を伸ばして、空中で無数に分裂した己が身で文字を再現していた。

『機嫌麗しゆう』

精緻なコントロールを要求される匠の技に、スライムの身体を張つた「手文字」が、ふるふると小刻みに震えていた。

「む、無理をしなくていいんだぞ……？」

死んでしまうのではないのかと将軍は心配になる。
確かに魔術師とばかり話していて面白くないと感じていたが、…しか
もあんな画数の多い文字を…

王族以外で、他に魔靈を指揮する権限を持つ者はいないから「将軍」と呼ばれているが、彼女の公式な位階は「元帥」である。

古い魔靈ほど人間を高く評価する傾向が強いから、この人間の少女は帝国の怪物たちにおおむね好意的に受け入れられている。

それは、宿命の好敵手が味方に回ったような心強さと…歴史と共に駆け抜けた数多の戦場で育まれた奇妙な愛着によるものだった。

「尊敬されてるんだな」

と、いたぐ感心した様子のマウニ、将軍の自尊心がくすぐられる。「いや…なに、長い付き合だからな」

そう言って彼女は謙遜するものの、ふんふんと鼻息を荒げて実に誇らしげである。

「たとえ言葉が通じなくとも、心と心でだなー」

対抗意識を剥き出したその言葉がなければ、もつと尊敬できた

のπ。

言葉といつものほど便利な反面、容易に心の在り方を映し出してしま
う。

だからおれたちは便利屋か何かと勘違いされるんだよなあ……といつ
のはマウの言である。

第十五話、戦い

長老に挨拶を済ませたら、次は…

頭の中で予定を組みながら、將軍はマウを連れて廊下を歩く。

スライムの間を出てから何があつたのか、鎧を脱いだ身軽な姿だ。いつも鎧の下に着込んでいる黒い肌着は飾り気に欠けるものだったが、十代の少女の纖細な身体のラインがはつきりと浮かび上がっていて、ガラス細工のような儂さがある。

その後ろに続くマウの頬には、色鮮やかな紅葉が咲いている。

彼には、一度決意したことを曲げない心の強さがあつたし、それを実行に移すだけの決断力が備わっていた。

しばらくそのまま無言で歩いていると、やがて一人は、なだらかな階段に行き当たった。

マウの記憶にある限りでは、城門から真っ直ぐ伸びる通路の先には階段があり、それを登りきると今度は謁見の間へと続く扉がある筈だ。

他国の城内部の構造をマウは知らないが、城門を突破して通路をひた走ったその先に謁見の間があるという造りは、女王の美意識によるものだろう。

謁見の間には玉座があり、帝国の元首たる女王が悠々と腰掛けている…という構図が、王城の日常的な光景である。

その女王が、しかし本田は留守なので、將軍は鬼の居ぬ間に案内してくれるつもりなのだろうか。

忠義心の篤い彼女のことだ、てっきり女王不在の間は謁見の間には何人たりとて立ち入らせないとが言い出すと思つていたので、意外ではあった。

まさか無計画のままここまで連れてこられたとは思にもよらないマウである。

戦闘を想定されて作られた階段は、急ではないとはいえ長大で、これからここを登るのかと憂鬱になる。

一段目に足を掛けた將軍が、「ん」と手を差し出してきた。

「転んだら危ないからな」

「…ありがとうございます」

マウは素直に礼を言い、彼女の手を握った。

「いや…」

將軍は少し思案したあと、マウを引き寄せて、彼の腕に身体を密着させる。

女性特有の柔らかな感触がした。

「この方が安全だ」

頬を赤らめた將軍が、そう言つてはにかむ。

マウも微笑みを返し、

「そうだね。でも、少し残念かな」

絡ませた腕とは別の方の手を、胸の高さまで引き上げて、その指を微かに蠢かせた。

「おれにその手のまやかしは通用しないぜ、女王の眷族

直後、「ちつ」と舌打ちして飛び退いた「將軍」を、不可視の力が拘束した。魔力だ。

「本物の彼女をどうした」

両腕を軋ませて束縛に抗おうとする女に、双眸に冷たい光を宿したマウがにじり寄る。

女は、がらりと口調を変えてせせら笑つた。

「へえ…本当に魔術師なんだ」

マウは答えず、更に拘束を強めた。

「言え」

肉が食い込むほどの中身にも、女は顔色一つ変えない。

「ぬるいね、人間。この程度であたしを呪縛したつもり?」

「そうか。なら…」

マウは、掲げた腕をゆっくりと前方に突き出す。

「アプリカ

空間を裂いて発現した使い魔が、マウの肩にとまる。

マウ自身は決して天才的な魔術師ではなかつたが、極めて優秀な使い魔を連れていることで、彼は有名だった。

魔靈に使い魔を感知する術はない。

しかし魔術師を知る者なら、使い魔の存在を知つていてもおかしくはなかつた。

事実、女はマウが発した言葉の意味を正確に理解していた。

「それがあんたの使い魔の名前？」

「そうだ。知つているなら話は早いな。最後通牒だ…将軍をどこへやつた！」

激昂するマウに、將軍の姿をした怪物が哄笑を上げた。

使い魔の存在を知つていて、なお笑うことのできる存在に、魔術師は絶対に勝てない。

何故なら、魔術師にとつての最後の切り札が使い魔だからだ。

魔靈は人間ではないから、優に人間の限界を越える。

魔術師は…魔力は…

「知ってるよ。もちろん知ってる。物理的に不可能なことは魔力で再現できない。あたしクラスの魔靈に、人間はどうやっても勝てない！」

「…エメスか！」

女の正体に辿り着いたマウが、最悪の事態に歯噛みした。

「 もーーっ！」

マウの後ろで猿轡を噛ませて転がされていた将軍が、悲壮な声で叫んだ。

その声に振り返ったマウが、爽やかに微笑んだ。

「ああ、何だ。そんなこと言っていたの、將軍。気付かなかつたなあ

…

「これからいこいこりだつたのに…」

エメスは残念そうである。

つまり、そこそこいじだった。

第十六話、エメス

「人間如きが、このわたしにどうして勝てるものか！」

呪縛が…破られようとしている！

マウは目を見張った。

魔力の呪縛とは、実は物理的な拘束力によるものではない。心身の正常な運動を妨げ、手足を萎えさせる秘術だ。それを打ち破りつつあるということは、彼女の脅力が人間のそれを逸脱したものであることを意味していた。

しかし、それでもだ。それでも人間は…今ある手持ちの札で戦つていくしかない。

たとえ配られたカードに絶望的な格差があろうと、挑むことをやめたなら、もう一度と立ち上がりたいと知っているからだ。

それは、神秘を使うとされる魔術師にとつても変わらない。彼らもまた、どうしようもなく人間で、「諦めない」という特権は彼ら人間のためにあるようなものだと気付いていたから、それを手放すほど賢くもなれない。

生きるということは、そういうことだ。

他から見れば泥臭い生き様だつと、譲れないものがあるのなら。

「アプリカ！」

使い魔を発現したマウが、人差し指と中指を立てた刀印をエメスに叩き付ける。

これまでとは比較にならないほどの魔力が放たれ、エメスの四肢が砕け散った。

極めて強力な暗示は、現実に迫ることができる。

アプリカという非凡な使い魔には、それが可能だった。

それでも現実は常に残酷で、いつだって人間は試されている。

半ばからへし折れたエメスの手足から、さらさらと砂が零れ落ちていた。

「弱いなあ、人間は。どうしてそんなに……」

弱いの、という言葉は崩れて消えた。

エメスの全身が頭から順に風化し、足元に降り積もった砂が体積を増すごとに、彼女は本来の姿を取り戻しつつあった。

いつしか視界を埋め尽くしていた砂塵が、やがて巨人の輪郭を描ききったとき、彼女は魔神の咆哮を上げた。

「……馬鹿な……」

天井すれすれまで届く巨大な体躯を見上げて、マウが呆然と呟く。

彼の四方を固める黒騎士が、緊張に震える腕で一斉に抜剣した。

「馬鹿はお前だ！」

もちろん将軍に怒られたのは言つまでもない。

「何事もなかつたように続行するな！　お前らまで一緒になつて何だ！」

マウの頭をぽかりとやつた彼女は、続けて友情出演の黒騎士たちをガニガニと叱る。

叱られつつも、ゼニが満足げな彼らの言い分を、マウが通訳する。「楽しそうだったから、っこ…と」

「むむ…」

将軍がうなる。

彼女は、忠実な兵士であり、最若年の魔靈でもある黒騎士に対しても甘さを捨てきれない部分がある。

屈強な魔靈たちに囲まれて育つた弊害か、他者に厳しく自分に甘い将軍は、自らの半身とも言える黒騎士たちに強く出れないのだ。

だから彼女は、矛先を別に向けることにした。

「エメス！　エメス！」

声を張り上げて呼ばわると、砂の魔神エメスはどうと呆気なく崩壊し、舞い上がった砂埃の中から性懲りもなく将軍の姿で現れた。

「ちーっす」

氣だるそうに片手を上げる「自分」に、将軍が掴み掛かる。

「いらっしゃり自分に甘いといつても、こればかりは別らし！」

「エメス！ またお前はそりやつて勝手に人の姿を……」

胸ぐらを掴まれてがくがくと揺すられながらも、エメスは堪えた様子もなく、へらへらしている。

彼女は将軍の頬に片手を添えると、吐息の掛かる距離でこいつ囁いた。

「だつて、あんた人間にしちゃ綺麗だもの」

エメスは砂を司どる魔靈だ。

その本性は女王が作り上げた泥人形であり、美しいものを好む。

魔靈の中でも一、二を争う変身能力を有する彼女は、言葉を話せる数少ない魔靈の一人だった。

真正面から綺麗だと言われても、将軍は動じなかつた。

この世のものは思えないほど容姿端麗な王族を間近に見て育つた将軍であるが、世間一般の基準で自身の容貌が美少女に相当するところくらいは自覚していたからだ。

「だからと言つてお前、あんな、むむ、胸を……！」

そんな彼女にも、コンプレックスといつものはある。

耳まで赤く染めて詰め寄つてくる将軍に、さすがのエメスも悪ふざけが過ぎたと思つたらしく、神妙な声で詫びを入れる。

「あー……」めん。隣にあんだが転がつてゐるのに、普通に乗つてきた

もんだから、つい

床に座り込んで黒騎士たちとフォーメーションの確認をしていたマウが、ぎょっとして振り返る。

「おい、人の所為にするなよ。おれの目の前で堂々と彼女を縛つておいて、それはないだろ」

結論から言つと、二人とも悪い。

とりあえず説教を後回しにして、将軍は馬鹿一人に尋ねる。

「知り合いか？ 隨分と仲がいいんだな」

皮肉を交えて言つと、意外やエメスが「冗談！」と憤慨した様子でマウを睨み付けた。

「そりゃあ知り合いだけどさ。あたしは気に喰わないね。こいつの女王様への態度ときたら！」

「それは…」

将軍は、掛けた言葉を失つて黙り込む。

ちらつとマウを一瞥すると、彼は拗ねた表情で顔を背けた。

いつも飄々としているような印象を受ける少年だが、そんな彼でも感情を剥き出しにする瞬間がある。

それは、女王と相対しているときに見受けられることが多い…

どうも彼は、女王を嫌つてゐるらしかった。

第十七話、縁

この挨拶回りには意味がないのではないかと、將軍が疑念を抱き始めたのは至極当然のことと言えた。

今にも噛み付かんばかりの剣幕でマウを睨んでいたエメスが、こりと態度を変えてこんなことを言い出したのである。

「ところで、例のものは？」

エメスの激情をどこ吹く風と受け流していたマウが、片眉を吊り上げて彼女を見る。

「… サボテンなんて手に入れて一体どうするんだ？」

「決まつてるだろ」

そんなことも分らないのかと、エメスは大仰な仕草でマウの鼻先に指を突き付けた。

「もちろん植えるんだよ、あたし自身になつ

「そんなもちろんはないんだよ」

マウは嘆息した。空中でぐるぐる回つて居るアプリカに片手を差し出すと、賢い使い魔は主人の腕に器用にとまつた。
アプリカを腕」と引き寄せて、マウが言つ。

「今、種から育てる。アプリカに協力してもらつてね

真つ当な植物の栽培に、使い魔の入り込む余地はない筈だった。エメスの疑惑はもつともだらう。

「…それ本当にサボテンか?」

よしよしとアブリカを撫でていたマウが、使い魔の仕事にけちをつけられて「ハツ」と鼻で笑った。

「本物が手に入るなら苦労しねえんだよ」

ときどき妙にガラが悪くなる少年だったが、そういう時の彼には、逆さま心に余裕があるように見えるから不思議だ。

エメスも同じ印象を抱いたりじへ、腹を立てることなく肩を竦めた。

「ま、ぱっと見、サボテンなら文句はないよ」

しかし、これにはマウが黙つていなかつた。

彼はアブリカを定位位置の肩に戻すと、エメスに詰め寄つた。

「お前…そんなふわふわした気持ちで、おれたちのサボテンを枯らしてもしてみる、ぶつ飛ばすぞ。」ちと、もうばっかり情が移つてるんだからな

「え、サボテンて枯れるの?」

「こ…こ…こ…や、駄目だ。やつぱりお前に、あいつは任せられねえ。おれが責任持つて育てる」

咲かせるよ、大輪の花を…と盛り笑うマウ。約束が違つてエメスが食つて掛かる。

「何だお前！　あたしのサボテンだぞ！」

「いいや、おれたちのサボテンだね。あんたがあの子に何をしてやれたよ？」

自分と同じ顔をした女がサボテンの親権を巡つて言い争つのを、将軍は見ていらぬなかつた。

「やめろ。やめてくれ、頼むから…。そんなにサボテンが欲しいなら、次の遠征で持つてきてやる…」

そつ言つて二人の間に割り込むと、エメスが「あら、そつ~」と途端に機嫌を良くした。

黒騎士団の采配は将軍に一任されている。

まさかサボテンのために戦うことになるとは思わなかつたが、帝国はいつの時代も孤立無援だつたから、今更どこの国を攻めても同じことだつた。

人間側の足並みが揃つていれば、また話は別なのだが…実際にそうなつていないので無意味な仮定だ。

「将軍はいい子だなあ…」

エメスはそつ言つて見せ付けるように笑うと、将軍の肩越しにひょいとマウを覗き込み、あらうとか「べーっだ！」と口を出した。

「子供が」と呆れる将軍だが、悔しそうに表情を歪めたマウもざつこじでこの精神年齢であるらしかった。

「ばーか！ ばーか！」

と捨て台詞を吐いて駆け去っていくHメスに、将軍は本気でこの国の行く末が心配になつた。

言い返す彼も彼だ。

「馬鹿つて言つ方が馬鹿なんだぞー。 ばーか！」

どうやら自分も馬鹿であることを自覚しているマウが、「あ、そうだ」と思い付いたようになつた。

「Hメス！ カーテンな、あれどりするー。」

「あとでーー。」

遠ざかっていくHメスが、大きく腕を振つた。

彼女を見送り、ふむ…と思案している様子のマウ。 将軍が声を掛ける。

「他にも何か頼まれているのか？」

「ああ、こや…」

いつたんは口を噤んだマウだったが、すぐに思ひ直してこいつを呟つた。

「…魔靈は、おれたち魔術師と縁が深いからな。断りきれかっただ…」

つまりそれは、手の内がばれているといつことだ。やり難くて敵わない。

如何にも無念そつに顔をしかめるマウに、さして魔力に詳しくない將軍でさえ、とうとう氣付いた。

もしかして…と。

「…もしかしてお前…実は便利なやつなのか?」

マウは…マウは認めざるを得なかつたのだ。

「…ええ、自分で言つのも何ですが、かなり便利なやつです」

だから、魔術師が帝国にやつて來たと聞いた魔靈は、大抵がいづ考
える。

便利なやつが來たぞ、と。
どれ、少し顔を見に行つてやるか…と如何にも恩着せがましく、マ
ウの部屋のドアを叩くのだ。

第十八話、將軍の懷中時計

「村の魔法使い」という童話がある。

題名の通り、とある長閑な村に住んでいた一人の魔法使いのお話だ。あらすじは、それまで村人たちに疎まれていた魔法使いが、村を襲つた災厄を退けたことで力を使い果たして亡くなつてしまつという陳腐なもの。

魔法使いの死に際は、村人たちに見守られながら徐々に身体が透けていくという表記がされており、これは一説には魔法使いたちが人々の前から姿を消した理由を描いたのだとされている。

だが、魔術師たちが社会と隔絶して生きるようになった理由は、実のところもつと切実で、災厄に追われてあたふたする村人を見て、「萌え」とか言い出す人間性にあった。

そんな中、この度めでたく帝国に就職したマウは、魔術師の社会で長らく変人扱いされてきた少年で、頼まれたら嫌とは言えない性格をしている。

だから、例えば見目麗しい少女に家具の修繕という畠違いの依頼をされても、嫌々ながら引き受けてしまつたりする。

「…まあ、他にやる事もないしね」

と結んだ少年に、将軍は大いに機嫌を損ねてしまつたようだ、

「むふー…」

と頬を膨らませた。

栗鼠みたいだと、マウは否気に思つた。

将軍は、彼をじろじろと睨め付けたまま腕を組み、怒りを押し殺した声で叫ぶ。

「…つまりお前は、人に案内を頼んでおきながら、実はそんなもの必要ありませんでしたと言つんだな」

包み隠さず言えば、彼女はこの人を食つたような魔術師より優位に立ちたかった。

だから、魔靈たちを紹介する傍ら、そんな彼らに傳かれる自分の凄さをアピールしたかったのである。

それなのに。

「わたしの善意を踏み躊躇つておいて、よくもそんな…」

マウからしてみれば案内を頼んだ覚えはないのだが、それをここで口に出せるようなら、彼の半生はもう少ししななものになつただろう。

う。

「こや、『めんね。何だか言つ出しちゃへんか、いひ、あるあると

…』

すると将軍は、腰に片手を当てて嘆息し、

「反省しているならいい。これは貸しにしておく」

ありもしない恩を売つた。

まるでマフィアの遣り口である。

「ああ、はい。それはどうも…」

さすがに嵌められたことに気付いたマウだが、ここで強いて取り沙汰にしなかつたのは、同郷の魔女たちに口應えしてもろくなことにならなかつたという経験によるものだ。

今なら、それが彼女たちなりの優しさだつたのだと分かる。

(六年か…)

苦い思い出が美化されるのに、それだけの年月を要するといつながら、同じように六年後、將軍の優しさに気付ける日がやって来るのだろうか。

「よろしい」

と頷く彼女は得意げで、華やかな容姿がそいつをせるのだろう、無骨な所作にも彩りがあり、軽やかだ。

耳に掛けた金髪を指先で払つた將軍が、ふと剣帯に手を差し込む。

彼女の肌着は、側面に切れ込みが入つたワンピースなので、ポケットがない。

その分、剣と鞘を固定する革製の剣帯に必要なものを入れることだが

できるよう工夫されていた。

それが軍人のスタンダードなのがどうかは、マウには判断が付かない。

將軍は剣帯から取り出した懐中時計らしき物体を眺めて、「ん…」と一、三回揺する。

(え、何それ…)

と内心で驚くマウをよそに、彼女は「こ、ひ、急けるな」と懐中時計を叱った。

さり気なく彼女の手元を覗き込んだマウが目にしたものは、懐中時計の中で惰眠を貪る小人であった。

小指ほどの大きさで、これまた將軍と同じ姿をしている。

ただし、こちらはエメスのような精巧な模倣ではなく、等身を縮めたデフォルメバージョンだ。

寝床を將軍に小突かれて、びくつと目を覚ました小人が、慌てふためき何やらジエスチャーを開始する。

それに將軍が頷き、

「ふむ…いい時刻だな。他に伝言はないな?」

と問い合わせると、小人はこくこくと首肯を繰り返し、そこで不意にマウと目が合つた。

『…あなた、もしかして魔力屋さん?』

その声は、まつりとマウの耳に届いた。

「魔力屋」といふのは、魔術師の古い呼び名だ。

マウは動搖した。

魔靈との「余話」は、本来もつと曖昧で、断片的なものだからだ。

何の調整もなく、これほどクリアな意思を伝えてくる存在は珍しい。

(…音。音の魔靈か？)

思ひ至ったマウが、古い形式に則り折り畳んだ指を胸に当てる。

「僕はマウ。マウ…ゴーティ。あなたは？」

『あら、ギター響ひびく』

小人は、その場でちよこんとお辞儀をすると、同様に折り畳んだ指を胸に当てる。

『わたしはサイレン。昔の魔力屋さんから魔靈と呼ばれてたわ』

将軍にはサイレンの声が聞こえなかつたが、マウの言葉から挨拶を交わしている…程度の憶測はできた。

「ゴーティ？ それはお前の家名か？」

「気にしないで。作法みたいなものだから」

マウは巧妙に誤魔化した。

古の作法では、名乗る際に真名を告げねばならない。

マウは家名を捨てており、また天涯孤独の身の上であつたから、そこまで名乗る必要はなかつたが、「コーティ」という名称はこれをか事情が異なる。

本当なら口にするのも避けたかつたが、それでは失礼に当たるので仕方なく名乗つたのだ。

それに、どの道…女王は自分を「コーティ」と呼ぶ。どうせ、いすれは露見するのだから、同じことだ。

別に偽名を使つてゐる訳でもないのに、何でこんなに気を揉まなくちやならないんだろうかと…マウは悶めしく思つ。

第十九話、サイレン

将軍の仕草で判断したに過ぎないマウだが、「懷中時計」という表現は奇しくも正鵠を射ていた。

サイレンの住処は、よくよく見るとフラスコに近い外觀をしており、上部の円筒に当たる部分がない代わりに落下防止の鎖が取り付けられている。

肝心の球は厚いガラスで作られており、指先で叩くと「ン」
ツと小気味いい感触が返る。

大きさは掌にすっぽりと収まる程度で、少々窮屈そうではあった。

小さな小さなお家の内で、彼女は妖精のようこぐらつと回ると、両手をお腹に当てて上品にお辞儀した。

空色の大きな瞳が、ぱちくりと瞬いてマウを見上げてくる。

『初めまして、懐かしい友達の人。女王様からお話は伺っています。
あなたのこと、わたしもコーティと呼んでも~』

彼女たちの生みの親である女王は、マウをコーティと呼ぶ。

可愛らしい仕草に絆され「喜んで」と頷き掛けたマウが直前で踏み止まれたのは、奇跡に近かつた。

「…ありがとうございます、懐かしい友達の人。でも、僕のことばマウと呼んで欲しいな。どちらかと言うとそっちが僕の魂の名前で、…ご存知でしたか？　あなたたちの女王は、ちょっと意地悪なんです」

愛くるしい小人の手前、マウはこの上なく盛大にソフトな表現を心掛けた。

「魂の名前？」

と、しつこくシッコミを入れてくる将軍に、マウはこいやかに指をわざと振つてお口チャックの秘術を施した。

「む～っ、む～っ」

苦しそうにうめく彼女の耳元に口を寄せて、そっと囁く。

「…忘れるんだ、いいね？　いい子だから…あまり僕を困らせないで」

妙に艶のある声だった。

濡れた低音が脳髄を痺れさせるかのよう。

將軍は背筋をぞくりと震わせて、されど一方的な要求に屈しはしなかつた。

「むーっ..」

とマウの頬に手をやつて、ぐいぐいと抓る。

思わず反撃に、マウが鼻白んだ。

「痛え！くそ、こいつどんでもねえ精神力してやがんな…」

まさか遣り返す訳にも行かず、これでも男の子、甘んじて受け入れ

る。？

頬を引っ張られつつも、構わずサイレンとの会話を続行する気概は天晴れの一言に匂きるだろ。」

「とにかく、そういう訳だから。その名前は僕にとって、あまり好みいものじゃ……って、まじ痛い！」

しかし物事には限度があるので。

これ幸いと人肌の伸縮性の限界に挑み始めた将軍に向き直ると、興奮のあまり密着してきた彼女の荒い鼻息が喉をくすぐった。たまらず悲鳴を上げるマウ。

「ふーっ、ふーっ！」

「近い近ーい！ あなた女の子でしょーーー もうひょっと慎みつてもんを持ちなさいよー！」

これでは埒が明かないと、彼女を力尽くで引き剥がして、魔力を解く。

発言の自由を取り戻した将軍が、肩で息をしながら不敵に笑った。

「勝つたー！」

「……そういう問題じゃないでしょ。まったくもつ……」

脱力したマウが、赤くなつた顔を逸らしてぼやいた。

一人の遣り取りを眺めて、くすくすと笑つてゐるサイレンに、何か文句を言つてやううと振り返り、彼はぎょっとした。

つい先程まで屈託なく笑つていた小人が、くつくつと笑動を噛み殺していた。

それだけなら、まだいい。

ちょっとした心境の変化だと自分を納得させることもできただろう。

しかし事態はより深刻だった。

サイレンの容貌が様変わりしていたのだ。

彫りの浅い顔立ちは幼げで、人を食つたような表情が不釣り合いな印象を与える。

白いカツターシャツの襟元から覗く鎖骨が今にもぽきりと折れそうで、訳もなく悲しくなる。

体格そのものは大きく変わっていないのに、薄い胸板と華奢な肩、細い手足がひどく頼りなく見えるのは何故なのか。

マウは、深く嘆いた。この世の終わりでも見たかのようだった。

「か、可愛くねえ…！」

すっかり変わり果てたサイレンが、口調まで一変させて語り掛けてくる。

『君の負けだね、マウ。どうだい、僕らの元帥はちょっとしたもん

だろう?』

マウは、答える気力も湧かなかつた。

ただ、どうしたら以前のような愛らしい小人さんに戻ってくれるのか、そればかりを考えていた。

一方、將軍は未知の感覚に戸惑つてゐるようだつた。

「これは……伯爵とエメスの気持ちが少し分かるような……こ、この優
越感は一体……」

第一十話、笑顔

帝国の魔術師は考える。

外見で人を判断するのは愚かなことだ。

大切なのは心の在り方と実績であり、何を思い、何を成したかで人の価値は決まる。

心が清らかでも臆病では意味がない。

如何なる功績も、歪んだを行いを正当化することはできない。

容姿の美醜など、論ずる価値すらない些末なことだ。

己の信念と語り合い、確かな手応えを感じたマウは、澄んだ瞳で現実と再び向き合つ。

「だが、てめえは駄目だ」

人間は誰しも自分が可愛いとよく言つが、そんなものは嘘つぱちだとマウは思つ。

『そう熱心に見詰めてくれるなよ。照れるじゃあないか』

この可愛げのない言い草ときたりどうだ。

皮肉げに口元をひん曲げた表情の憎らしげこと。屈折した内面が滲み出ているとしか思えない。

第一、目付きが気に入らない。

天使のようだったサイレンの変貌に、たまらずマウは将軍の手に縋り付いた。

「何でだよー、何でこんな…畜生…」

絶叫するマウ、そこには、將軍は頬を引きつらせる。

「や、そこまで嘆くことか?」

人間の姿に化けることができるタイプの魔靈に、しばしば真似られる彼女だが、仕方のないことと割り切っている部分もある。

やむを得ない事情でもない限り、女王の姿を借りるなど言語道断だし、姫姉妹が女王の生き写しである以上、必然的に選択肢が狭まるからだ。

マウの姿を写し取ったサイレンは、小憎らしさこそそのままだが、等身が縮んだこともあり、一つ一つのアクションが大振りで健気に見える。

だが、マウ自身はどうてい許容できなかつた。

魔術師として鍛え上げた魔眼も、初対面の者には効力を發揮しない。本性すら定かでないのに、その正体を幻視することは叶わなかつた。むしろ真実と呼ばれるものがこの世にあるのなら、それは魔力と正反対の概念と言つてもいいだろう。

意思の疎通を助けることはできても、本当の意味で心を通じ合わせることはできない。

だから、さつとマウが戦つてゐるのは、いつだつて「それ」だった。

幾度となく挫折し、それでも諦めきれない。

後悔することに慣れ過ぎて、後戻りすることもできない。

魔力が嫌いだつた。

運命を呪つた。

世界は醜くて、息をするのも苦しくて、

…でも守りたいものもある。

「アプリカ！」

将軍の肩に隠れてサイレンをそつと盗み見ていた使い魔が、主人の求めに風を切つて飛翔した。

差し伸べられた片手の甲にとまつたアプリカが、力強く後脚を踏み出す。

マウの視線に緊張が走る。

「…賭けになるな。やれるか？」

震える声に、アプリカはバイオリンと『』を構えて応じる。
それだけで十分だった。

奏でられた旋律と、魔力が螺旋を描いて調和する。

「…何をやつとるんだ、お前らは」

と呆れる将軍の掌の上で、サイレンの姿が再び変化する。
蛹が羽化するよつこ、髪は金糸の輝きを取り戻し、瞳は田も覚める
ような碧眼に。

声は天女のソプラノを彷彿とさせた。

『あら、こんなのは初めてだわ。しばらく見ない間に魔力の使い方も進歩したのね』

彼女は音の魔靈である。

おもに音声を蓄えて、それにより身体を構成する。

共振という現象を通じて、遠く離れた分身と連絡を取り合ふことも可能だ。

伝達と攬乱を得意とする、情報戦のエキスパート。

それが「海の魔女」と恐怖を以つて囁かれる言靈サイレンである。

『家にいるわたしから「呪」を拾い上げるなんて、凄いわ、魔力屋さん』

しきりに感心するサイレンに、マウは笑顔を向ける余裕がなかつた。

「へつ……」

その場でがくじと正襟を付き、畳み込んだマウを、将軍が慌てて介抱する。

「ど、どうした?」

彼の手にとまつていたアプリカの姿が、掠れて消えた。
使い魔を維持できなくなるほど、マウは消耗していた。

「あ……」

「ま?」

顔色が真っ青だ。将軍の心配が募る。

「魔力を、使い過ぎた…」

苦しむうめいた少年に、将軍は同情した。

思えば、彼は今日一日で立て続けに魔力を連発していた。

そのほとんどが自業自得であり、同情の余地すらなかつたことが、殊更に将軍の涙腺を刺激したのだ。

「お前は、どこまで馬鹿なんだ…」

特に、潜在能力を極限まで引き出す使い魔の行使は、マウの体力を著しく奪つてしまつ。

意識を失つ直前、彼は倒れ込みながら傍らの少女を見て、ふつと年相応の笑顔を覗かせた。

氣絶したマウを抱きかかえた将軍が、悲痛な叫び声で彼を呼ぶ。

「術士!　?術士ーつ!」

窓から射し込んだ日の光が、満足そうに微笑む彼の横顔を優しく照らしていた…

第一十一話、希望

帝国の魔軍将は考える。

美しさに勝るものはない。

人間たちは、やれ心だの徳だのを貴び崇めるが、そんなものは綺麗ごとに過ぎない。

覬智を究めた古代の賢者たちが、『氣高き精神を如何に贊美しようとも、実際に美の化身を田の前にしてどれほどの説得力を保てるかは甚だ疑問だった。』

「あなたたち、本当にぐだぐだね……」

「面田ない」

畏る將軍に、妹姫は呆れて溜息を吐いた。

待てど暮らせど姿を現さない一人に憐れを切らして、迎えに来たのである。

サイレンに確認してみると、將軍は何故か自室の付近をうろついていた。

部屋と廊下で往復を繰り返す將軍は拳動不審で、思わず声を掛けると、彼女の傍らには無惨に打ち捨てられたマウの姿が。

立ち尽くしている妹姫に気付き、はっとした將軍が真っ先にしたことは、我が身の潔白を訴えることであった。

実際に犯罪くさい光景だった……と妹姫は述懐している。

将軍の証言によると、マウは魔力を使い過ぎて倒れたらしく。
そこで布団のあるところに連れて行こうとしたが、異性の部屋に無
断で入ることは躊躇われたため自分の寝室に連れてきたものの、何
だか……普通に拷問器具が置いてあつたりするので、これはどうかと
思い右往左往していたのだという。

それならそうと最初から言えばいいのに、「わたしじゃない」だの
「信じじ」だと白々しい台詞を連呼するから、妹姫は本気で身内
の犯行を心配するところだった。

か細い吐息を漏らす妹姫に、将軍はどきりとした。
記憶にある幼い日の姉姫と重なつて見えたからだ。

……今度、妹が生まれるの……

憂いを帯びた眼差しを、微かに震える長い睫毛が縁取っていた。
桜色の小さな唇から紡がれる声が、不安に揺れていた。

……ねえ、将軍。あなたは……

(やめて。その先は……)

聞きたくなかった。

だから将軍が目の前にいる姫君の肩に手を置いたのは、きっと自分
の居場所を失わいためだった。

「姫様！」

「な、何よ突然…」

彼女の戸惑った様子に、将軍は安堵した。

幼い頃の姉姫は、酷薄に笑う無機質な少女だった。

妹姫は当時の姉姫と似ているが、やはり違う面も多い。

将軍は万感の思いを込めて、彼女に言葉を贈る。

あなたは祝福されて生まれてきたのだと、どうにかして伝えてあげたかった。

「もつと罵つて下さー」

「何か言って出した！」

仰天した姉姫が、「この変態！」と律儀に将軍の要望を叶えて後ずさる。

その秀麗なかんばせに色付く多彩な表情は、かつての姉姫が持ち得なかつたものだ。

「もうつー！ どうしてこの国には変人しかいないのー… これって絶対にあなたたちの所為だと思つんだけどー！」

恨めしげに見上げてくる幼い姫君に、将軍は胸をときめかせた。

姉姫の気持ちが、将軍にはよく分かるのだ。

妹姫を困らせるのは、とても楽しい。

この場に相方の彼女が居てくれれば、もっと高度な、それこそ阿吽の呼吸で以つて、息吐く暇もない怒涛のショートコントを披露できたのに。

それだけが残念でならなかつた…

第一十一話、疾風の如く

母は、定期的に城を空ける。

もつこちらでの生活がだいぶ長いと聞くが、元々母はこいとは別の、魔靈しかいない世界の出身で、ときどき里帰りするのだった。足手まといになるからと、娘一人を置いて。

今頃は故郷でゆっくりと羽を伸ばしていることだらう。
最強の魔靈が同行しているので、警護は万全だ。

將軍が珍しく暇そうにしているのは、女王の留守を任せられて、城から動けないからである。

人間たちと違つて本来的に衣食住を必要としない魔靈の国であるから、とくべつ内政に手を付けることもない。

城を出発する前日に、遠征から戻った女王が土産に連れてきたという絶滅危惧種の魔術師は、よい暇つぶしのネタではあった。

「寝てる…」

廊下にうつ伏せで倒れているマウの傍らで、しゃがみ込んだ姉姫が、ぼつりと呟いた。

「姫様、御髪が…」

マウ個人にさして興味がない将軍は、気絶したままぴくりともしない少年よりも、姉姫の長い銀髪が床に広がり汚れるのが心配だった。

姉姫もしそうだが、帝国の至宝たる美姫らは純粋であるが故に無防備

で、見ていてはらはらする。

綿製の長手袋に包まれた、たおやかな指先がマウの頬にそつと触れるのを見て、将軍は密かに完全犯罪の構想を練り始める。

遺体の処理をどうするかで悩んでいると、ふと妹姫が口を開いた。

「先生が」

「は…」

将軍は居住まいを正した。

妹姫の言つ「先生」とは、姫妹妹の教育係を務める魔靈のことだ。文武に優れ、将軍にとつては師に当たる老騎士に、彼女は頭が上がらない。

妹姫は続けた。

「…先生が、彼のことを変わった魔術師だって。あなたはどう思つと?」

「は…いえ、わたしは彼以外の魔術師を知りません。師は、他に何と?」

「そうね…もしも本気で魔術師が逃げを打つたら、捕まえるのはまず無理だつて言つてたわ。母様は…大層喜んでいらしたそうよ」

将軍は内心で舌打ちした。女王の喜びは、彼女にとつて何より優先される。

それによりによつてこの自分が奪う訳には行かなかつた。

命拾いしたな……と胸中でマウに語り掛ける。

「陛下は、この男をどうなされるおつもりなのでしょうか？」

おそらく女王は、魔術師が魔靈との交信を可能としていることを知つてゐる。

だから将軍は、許されるならば彼を自分の副官に置きたかった。

それを察してか、妹姫が振り返り艶やかに微笑んだ。

「あら、将軍。あなた、彼に何かを期待してるので？」

将軍は正直に告白した。

「姫様、この男は危険です。面妖な技を使い、周囲を煙に巻く……。
ですが、わたしなら」

「あなたなら？」

妹姫に促されて、将軍は不敵に笑つた。

「一息で仕留められます。藁のよづいた。

彼女はマウと行動を共にする中で、魔力の致命的な弱点を看破して
いた。

「魔術師に共通する特徴かどうかは分かりかねますが、彼の魔力は
速い。……が、わたしはもっと速い」

「……あなたの内で、あなた自身がどんなだけ俊敏に動けてるのかは知

らないけど……」

妹姫は、憐れみの目で将軍を見ていた。

「それ、勘違いだから。あなた、剣もろくに扱えないでしょ……」

「え……？」

「きよとんとするな

剛腕で以って知られる黒騎士たちを手足のように運用する将軍は、自分のことと天才剣士か何かと勘違いすることがまわった。黒騎士にできて自分にできないこともないだろうとこう彼女の理屈が、妹姫にはよく分からぬ。

「……」

将軍はしばし沈思してから、ぽんと手を打つ。

「姫様はご存知ないかもしぬせんが、わたしの「一つ名は疾風」と言つてですね」

「それ今考えただろ！ ないから！ 田を覚ませー！」

黒騎士たちの苦労が偲ばれて、涙が出てきた。

第一二三話、似て非なるもの

今年で七歳になる姉妹だが、人間の赤子と異なり、必要最低限の体力と知識を得てから生まれてくるため、実質的には十歳児に相当する。

三年。それが新しい王族の誕生に要する時間である。

その後、王族は長じるにつれて成長が緩やかになり、やがては完全に老化が止まる。

年下であるにも拘らず、姉妹が将軍に対して事あるごとにお姉さんぶるのは、そのためだ。

だから将軍は、生まれて初めてできた妹のような存在…つまり第一王女の姉妹にめろめろだった。

とくに怒ったときの顔ときたら、これはもう、

(たまらぬ)

と、ある種の興奮すら覚える。

まなじりを吊り上げて、形の良い眉をしかめた姉妹には、いつも無意味に元気な姉妹や、冷淡な女王とはまた違った魅力がある。

廊下に正座してお説教されている将軍が神妙な顔をして、まさかそんなことを真剣に考えているとは、想像だにしない姉妹である。

…いや、そうではなかつた。

妹姫は、この年若くして元帥の位に登り詰めた少女が、如何にも常識人ぶつた顔をした変人であることをとうに承知していた。

「ちゃんと聞いてるの？　このへっぽこ聖騎士！」

「御意」

それでも潔く頭を垂れる将軍は凜としており、武人としての矜持に満ち溢れて見えるから厄介だ。

本来なら騎士が剣術を修めるだろう期間を、彼女は堂々たるはつたりと口上の齟齬に当て、残つた時間で優雅にティーブレイクなど平氣でやらかしていたのである。

妹姫の追及も自然と厳しくなる。

「…ホントに？」

「は…御心のままに」

もちろん将軍は聞いていなかつた。

今はただ、この可愛らしい姫君を誰かに自慢したくて仕方なかつた。

人間たちは帝国の王族を悪鬼羅刹のように語るし、別段それを否定するつもりはなかつたが、今この城には自分と似たような立場の同族がいる。

どのような経緯で帝都に連れてこられたのかは知らないが、せつと分かち合えるという確信があった。

あることは彼ならば……とすら将軍は思つ。

さほど多くへの言葉を交わした訳ではないものの、どこか自分と似通つたものを感じていた。

直感的に……だ。

やはり同じ人間といふことなのか。

(そり。似てゐる)

自覚していなかつた……否、認めるのが怖かつた。
今なら、はつきりと言える。

(……マウ。あなたは……)

何といつ運命の悪戯だつ。

彼は……

……自分で、

芸風がかぶつている……

将軍は、雷打たれたよつてマウを見た。

「…」

ぱっと田を覚ました彼と田が合つたのは、とても偶然の一言で言ことのとおりを表せるものではなかつた。

このとき将軍は確信したのである。

彼女はマウに駆け寄り、彼の手を取つた。

テンション高いなあ……とマウは思つたが、それもさて置き。

将軍は、きらきらと輝く瞳で彼に告げた。

「術士！ わたしと一緒に天下を取るつ！」

「え、意味わかんない……」

まず氣絶した人間を廊下に打ち捨てる神経が理解できなかつた。

同年代の異性に手を握られて何も感じないほど朴念仁ではなかつたから、彼は照れ隠しにおどけて言つた。

「何？ 天下つて、笑いの？ 番はヤンソスあるよね

「そうだともー！」

「あれ、肯定しちゃつたよ、この子……」

マウは「寝起きから何なの、モー……と、ひとしきつ嘆いてから、将軍の手を優しく振り解いた。

「…残念だけど、君とは組めないな

「な、何故だ？」

「だつて僕は……」

うろたえる将軍に、マウはにやりと笑った。
おもむろに立ち上がった彼は、一人遠い目をしている妹姫の傍らに
寄り添う。

「？」と見上げてくる彼女の頭を撫でて、マウは将軍に告げた。

「だつておれは、妹姫の味方だからね」

「！ 貴様、裏切るのか？」

将軍の弾劾は、まったく筋が通つていなかつたが、マウの返答もまた同じくくらい脈絡がなかつた。

「決着を付けよつぜ、將軍。おれとあんた、正しいのはどちらか

…

睨み合づ両者。

かくして、運命の戦いの火蓋が切つて落とされたのである…！

「…あんたたち、ちよつとそこそこ正座なさい」

そして直後に鎮火された。

帝国の未来は明るいのかもしない。

第一十四話、覆水

「あなたたち、一人していい歳でしょ。七歳の女の子に叱られて、何かおかしいなって思わないの？」

妹姫の説教はとじまると「うを知らないうかのよつだつた。

「……」

無言で頃垂れる一人は、片や帝国軍を指揮する元帥であり、片や女王直属の帝国魔術師である。

憮然として腕を組んだ妹姫が、苛立たしげに革の靴底で「シシシ」と音を立てる。

「返事！」

「はい、正直どうかと思います」

いちいち将軍にボケさせっていてはきりがないこと、ここは代わってマウが答えた。

いくら目覚めたとはいえ、体力が全快した訳ではないのだ。
わざと部屋に戻つて寝たかった。ていうか足が痺れて辛い。

「…そつ。そつね。あなたは、まだ城に来て日が浅いものね

鷹揚に頷いた妹姫に、マウは内心ほくそ笑むが…

「姫様、騙されてはなりません。この男はハイハイ言つてればそれで終わると思つているのです」

「マウは戦慄した。

ここに来て、将軍はまさかの泥試合を演じようとしていた。つまり、足の引っ張り合いでだ。

「貴様、正氣か…！」

と声を潜めて覚悟を聞つマウに、将軍はきっぱりと叫びた。

「是非もない」

彼女には自信があった。

長期戦になれば、確実に勝てるところの自信が。自慢ではないが、正座は得意だ。妹姫のおしおきを、誰より数多くこなしてきたところの自負がある。

「白旗を上げるなら今の内だぞ。帝国は捕虜を取らないが、骨を拾つて再利用してやる程度の慈悲はある」

「…魔術師の辞書には、こんな言葉がある」

しかしマウも負けではいなかつた。

ずっと変人扱いされてきたといつことば、それでも信じた道を歩んできたということでもある。

譲らないと決めた一線に対し、彼はこととん頑固だ。

「鬼、邪に通じ魔に易し。口で立派なことを言つやつぱり、足下を掬われやすいつて意味だよ」

二人は顔を見合させて、どちらからともなく笑つた。

「ふふふ…」

「ははは…」

立場も忘れて火花を散らせる一人に、姉姫は呆れて言葉も出ない。そう言えば將軍の部屋には拷問器具が置いてあるのだと、ふと思いつ出した、まさにそのときであった。

「や！」までだ！」

「面倒くさいのが来た！」

実の姉を「面倒くさい」の呼ばわりである。

颯爽と現れた第一王女の姉姫が、「どかーん！」と口で言つて体当たりを敢行したのはマウである。

とつさに体勢を整えて彼女を受け止めたマウが、溜息混じりに叫つ。

「お前さんは相変わらず元気だねえ…」

姉姫は彼の話を聞いていない。

「マウやー、どうしてわたしの部屋に遊びに来ないかな君はー」

「どうしてって、君…」

今日は珍しく天氣がいい。

氣温も高く、花が芽吹くこともあるだろつ。

だからマウは、てつきり彼女が環境を慮り自主的に休止状態に入つたのかと深読みしたのだ。

姉姫は、一見そつと分からぬように振舞つているが、とても賢く優しい少女だ。

王城での新生活を始めて一月にも満たないマウが、彼女の表面的な性格を裏までは読めても、その更に奥に潜んだものを看破することは難しい。

マウを口では責めつつも天真爛漫な笑顔を振り撒いている姉姫だから、尚更だ。

驚いたのは将軍である。

「殿下！ そんなどこの馬の骨とも知れぬ輩に……！」

どこの馬の骨とも知れないマウは、悲しくも切ない。

「貴様あつ、べたべたするな！」

「ええ……この子はいつもこんな感じですけど……」

激怒している様子の将軍に、マウは背中を向けてしゃがみ込み、ちよいちよいと姉姫を手招きする。

よしきたと姉姫が応じる。

緊急会議だ。

「あのさあ……もしかして彼女って非マウ派なの？」

「非マウ派、非マウ派」

小声で尋ねてくるマウに、姉姫はうぐうぐと頷いた。
彼女は「んー……」と人差し指を咥えて、小首を傾げる。

「……つうか、何なの？」

要領を得ない問い掛けに、釣られてマウも首を傾げる。

「マネージメントにおいて何だけど、将軍の好き嫌いを密かに克服させたり、二択トンネルを設置して泥沼にダイブさせたりしたのに、何か意味があったの？」

「え、もちろんあるよ？ 仲良くなれっていう意思表示じゃん」

基本的に魔術師たちは、自分本位の考え方をする。

もしも彼らが他人にちゅっかいを出すとすれば、それは「リアクションに期待してます＝仲良くしましょう」という意思表示に他ならない。

だから彼はそれに齧あうとしたのだが、そこは常識的な判断に定評があるマウである。

当初、彼は万が一にも將軍が気分を害さない程度の罠を設置していた。

が、結局のところマウは、彼女の潜在能力を甘く見ていたのだ。

いつ如何なるときも、將軍のリアクションはマウの予想を常に上回った。

例えば二択トンネルの際などは、一度スルーしておいて即座に振り向き特攻するという王道中の王道を披露してくれた。これには陰で見守っていたマウも思わず吹き出してしまい、途轍もない敗北感を味わつたものである。

と同時に…「ああ、これでいいのだ」と思った。

魔術師たちの好意の示し方は常識的に考えておかしいと常口頃から思つていたマウは、実はそうではなかつたのだと確信した。

おかしいのは世界ではない、自分だったと大いに反省したのである。

そして行き着いた先が落とし穴である。

「まあ…途中で目的がすり替わつたのは認めるけど

あまりにも彼女のリアクションが素晴らしいため、どこか意地になつてしまつたのだといふ。

それにしてつて、城内で唯一の同族なのだ。

仲良くしたいと考えるのは当然のことではないのか。

しかし姉姫は人差し指を咥えたまま、

「んー…今更だけどさあ…文化が違つんだよね

それ逆に嫌われるんでね？」と。

「 ちょっと、今更すぎ（笑）」

笑うしかなかつた。

第一十五話、黒騎士

帝国が自分の全てだつた。

魔靈たちが人間を憎み、一方で愛するのは、不老長寿の彼らにとって帝国が狭すぎるからだ。

だが、自分は違う。

多くの魔靈と比べて矮小なこの身には、翼すら生えていない。

帝国から一歩でも外に出れば、自分を待ち受けているのは「裏切り者」という侮蔑と、百万にも及ぶ敵意だけだ。

王族のために生きようと誓つたのはいつだつたか覚えていない。それは自分にとって息をするように自然なことで、覚悟する必要さえなかつたからだ。

女王は厳しい人だから、愛情を向けてもらつた記憶はない。今後もないだろう。

それでも自分に居場所を与えてくれたのは彼女だし、もしも自分に血の通つた人間らしさというものがあるのだとしたら、

…それを与えてくれたのは、きっと一人の姉妹だった。

「動くな」

マウの背後に現れた黒騎士が、彼の喉元に冷たい刃を突き付けていた。

「動けば殺す」

一切の感情を排した将軍の瞳が、冷徹にマウを見据えていた。

将軍は、黒騎士たちを召喚し使役する権能を女王より直々に授けられた、この世で唯一の存在だ。

彼女と彼女の認識する世界の狭間から、黒騎士は自在に行き来できる。

黒騎士とは、すなわち影の魔靈だからだ。

将軍という実体を基点とするため、召喚できる範囲は精々が一～三メートルといったところだが、光あるところに影があるように、召喚そのものは瞬き一つで終えることができる。

影より這い出る騎士を常に引き連れていること、その美しい容貌から、人間たちは彼女を「影姫」あるいは「戦姫」と呼ぶ。

今、その影姫がマウの命を一手に握っていた。

とつねにマウを庇おうとした姉姫が、

「姫様」

将軍のたつた一言で動きを封じられた。

将軍は、姉姫の大事な幼馴染みだった。でもマウは…

葛藤する姉姫に、マウはにこりと微笑んだ。

背後の将軍に語り掛ける声が、場違いなほど穏やかだった。

「姉姫が大事なんだね、将軍。それは…」

彼は何かを問おうとして、やめた。代わりにこいつ尋ねる。

「…女王から聞いてないの？ 魔術師を剣で倒すのは無理だよ。僕らは用心深いからね」

しかし将軍はひるまなかつた。

「魔力で姿を消すか？ それもいい。だが…」

彼女は、マウの魔力の働きを常に注意深く観察していた。

「だが、お前はわたしに使い魔を見せたな」

そして、その機会は十分にあつた。

「追われて消えるお前と、消えて追われるお前は、どちらかが嘘なのではない。どちらとも本当なのではないか？」

「だったら試してみればいい」

「マウは強気に応じた。

だから将軍は確信した。

「今、わたしたちの目の前にいるお前が偽物かも知れないと知つてなお、わたしがお前を本物だと心の底から信じたなら、どうなる?」

(… IJの子は…)

マウの脳裏に浮かんだのは、かつて女王と対峙した際に、自分の魔力を正面から打ち破った老騎士の姿だった。

(そうか…あの人の弟子か…)

遣り方は違えど、この勘の良さ…急所を嗅ぎ当てる嗅覚とでもいうのか…には覚えがあった。

将軍の言つことは…おそらく事実だった。

おそらくといふのは、マウ自身にも確証がなかつたからである。

一つ誤解があるとすれば、魔力の定義だらうか。
その口振りから、彼女は催眠術の一種と考えているようだが、それは魔力そのものというより、魔力を制御する理屈の部分だ。

魔力とは、もつとずっと曖昧で、これという形を持たない、あやふやなものだ。

心がそうであるよつて。

だが、肉体が滅べば心も廻り所を失つよつて、理屈を押さえられた魔力は正常に動作しない。

それは、本来ならば机上の空論に過ぎないのだが…

「…そんなこと出来やしないんだよ」

「試してみれば分かる。やうだつたな？」

「いつ言わると血信がなくなつてへる。

マウは困つた。だつて死にたくないし。

主人の危機を察知して発現したアプリカは、ポーカーフェイスを氣取つて、マウに代わつて將軍の脅しにびっくりさせりしている。そして一段飛びで死期を悟つた優秀な使い魔は、はらはらと落涙しきりに辞世の句を詠むよう勧めてくる。

「ちよつ、内心じきじきしてゐるのがバレるからー。」

言われて、はつとしたアプリカが、マウの肩でぴしりと姿勢を正した。

(よし…)

「…そんな脅しが僕に通用するとしても…」

「…そこからは我慢比べになる。マウは肩越しに不敵に笑い、

「いや、手遅れだろ」

「ですよね」

律儀にツッコんでくれた妹姫に、マウは同意せざるを得なかつたのだ。

すっかりぐだぐだになつた空氣にも、將軍は屈さない。不屈の人である。

「…術士、答えて貰うが」

「何なつと

マウはあつとりと従つた。

何しろ將軍は、いつでも彼を殺すことができた。彼女の狙いは別にあるのだろう。

そんなことも気付けないほど、自分は頭に血が上つていたらしく。

(僕は…)

姉姫と目が合ひ。

彼女の視線は、將軍とマウの間で不安そうに揺れていた。

…彼女は、本当に頭の回転が早い。

だからマウは、將軍に問い合わせを投げ掛けるのだろう。

「ただ、最初に言つとく。僕は女王が嫌いだ

妹姫が息を呑む気配がした。

將軍は、何故とは問わなかつた。

ただ、代わりにこう問うた。これだけは、はつきりしておかねばならなかつた。

「お前は人間だ。お前は…帝国に敵ないと誓えるのか？」

「誓えるよ。と言つよつ、もう誓つた。女王と約束したからね」

マウは即答した。

「僕は…約束は破らない」

「…そつか。ならばいい。では次の質問だ」

「はあ…どうだ」

「好きな食べ物は？」

「え、軽いな急に」

「答える」

「ちょっと待て、何かおかしい」

何かおかしいと振り返ったマウが田こしたもののは、フリップを掲げている黒騎士の姿だった。

「黒騎士のお悩み相談コーナーだ」

しつつとして言つ将軍を、マウは無視した。

「何だ、どした？ 聞きたいことがあるなら、直接おれに言えばいいだろ」

顔を覗き込むとすると、黒騎士はふいと田線を逸らした。

「え、何？ これ何なの？ あ、やだ。何かやだ。凄い嫌な予感がある」

「じゃこ、術士よ」

「じゃこじやねえよ。ホント勘弁してやれ。まじで」

ペペペペ顎を下げるマウス、将軍は無情にも叫ぶ。

「お前、食堂で一回も食事をとつていなこらしこな」

黒騎士は嘆いていたのだ。

第一一十六話、幼馴染み

そして、一人は無言で厨房に立っていた。

将軍と姉姫である。

「……」

「……」

何だか気まずい雰囲気だった。

いつもべたべたしてくる姉姫が隣で黙々と作業しているのを、将軍はちらりちらりと見ていく。

(話題…何か話題を…)

「うー…と奇怪なつめき声を上げた彼女は、無理やり笑顔で姉姫に話し掛けた。

「ひ、姫様は普段お料理をされるのですか?」

将軍は、一人きりのとき姉姫を「姫様」と呼ぶ。

妹姫の誕生を境に互いを取り巻く環境が変わつて、何事も昔のよつには行かなくなつたけど、それでも将軍にとって姉姫が、かけがえのない存在であることには変わりない。

感情が昂つたときにも無意識の内にそう呼んでこるよつで、エメス

などは妹姫と混同してややこじこと愚痴を零すが、はつきりやめろとは言わない。

この一人の絆は、魔靈たちから見ても特別で、第三者が口出しするのは躊躇われるので。

その関係に今、亀裂が走りつとしていた。

姉姫は将軍を一顧だにせず、魚なのか蛙なのか判然としない生物の頭を、包丁ですとんと落とした。

「黒騎士がやつてゐるの、偶に見てたから」

黒騎士から借りたエプロンはこんなにもあんなにも白いの、将軍の気持ちは暗澹とするばかりである。

将軍は悔やんだ。

（わたしのバカ…やつぱり性急すぎたんだ！　あとで問い合わせすなり何なりすれば良かったのに…でもでも…！）

うあーー！　と内心で仰け反る将軍は、だがしかし、それでもやはり、マウを許せなかつたのだ。

「…姫様！」

「鍋」

「あ、はー…」

指摘されて、おたまで鍋をかもす将軍は、挫けそうだ。

どどめ色のスープが、ぽこりと気泡を立てる。

鼻を突く刺激臭も、しかし将軍の心をへし折る」とは叶わなかつた。

「姫様」

「何?」

ただ姉姫の冷たい聲音が、何より将軍の心に深く突き刺さる。

自分を呼んだきり硬直する將軍に、姉姫はやれやれと肩を竦めた。
この幼馴染みは、戦のかけひきばかり達者で、敵に対してもどこまでも強氣になれるのに。

昔からそうだつた。

自分と喧嘩したときには頭が真っ白になり、あとで部屋に戻つて号泣するのだ。

だから、いつもこんなふうに自分が折れることになる。

「なあに? 将軍」

仕方なく微笑む姉姫に、將軍の思考が再び活動を開始した。

姉姫が包丁を手にしていなければ、抱き付いてわんわん泣いていたかもしけない。

鼻がつんとした。

「…姫様。姫様は…あの男が好きなのですか？」

涙をすすりながら尋ねてくる将軍は、きつと今、あまり頭が回っていない。

結構とんでもないことをさらうと訊かれて、けれど姉姫はあっさりと肯いた。

「そだね」

「な、なにゆえ？」

「なにゆえとな」

調子が出てきた。

姉姫は怨嗟の声を上げる野菜たちを包丁でざくざくと刻みながら、「そうだなあ…」とカウンター越しにマウを見遣る。

椅子に縛り付けられてもがいている彼は、見張りの妹姫に「おれをここから逃がしてくれ！」と懇願していた。

「食べなきや死んじゃうんでしょ。あなた馬鹿なの？」

「生きることよりも大切なことが、この世にはあるんだよ…」

妹姫に窘められて、慟哭するマウを見る姉姫の視線が、はっとするほど優しい。

「見てて飽きないからかな。真っ向から母様に啖呵を切る人間なんて、そうそういないでしょ」

彼女は、刻み終えた野菜を順にスープへと投下しながら、将軍に微笑みかけた。

「もちろん、あなたのことも好きよ、将軍」

普段の彼女と違つ口調は、将軍に過去の思い出を連想させた。

妹姫が生まれてから、姉姫は変わった。

目に見えて明るくなり、言葉遣いも碎けて親しみやすくなつたと、魔靈たちは言つ。

けれど将軍は、心配だつた。

表面上は女王と別の道を歩んでいるように見える幼馴染みが、成長するにつれて何故か…むしろ女王に似ていく錯覚に囚われたからだ。

それは本当なら喜ばしいことの筈なのに。

だから将軍は、彼女が昔と同じ貌を見せてくれて、ひどく安堵したのだ。

そのことと比べれば、マウを友達として好きなのだと、姉姫の言葉さえ些細なことだった。

「ああ、何だ、そういう意味ですか。そうですよねー。」

けれど将軍に自覚はなかったから、思ったよりも嬉しくなつて、溢れた感情が彼女のテンションを底上げしたのだ。

隠し味ごと黒騎士から預かつた小瓶を剣帯から取り出した将軍は、
小躍りしながら詫を抜き、中身を一滴、鍋に垂らした。

じゅつ…と壯絶な溶解音がした。

「一体何を混ぜた手前えーつー?」

マウが絶叫した。

第一一十七話、果実

将軍はペーマンとーンジンが嫌いだ。

黒騎士たちは悩んでいた。

人間だつた頃の名残りなのだろう、黒騎士には個性がある。

雍ぐよつに剣を振るう黒騎士が居れば、刺突を主体とする黒騎士も居る。

同様に…料理に情熱を捧げる黒騎士も居るのだ。

自分たちが調理したものを食べて、すくすく育つ将軍を見守るのが、彼らにとっての喜びだった。

しかし（何度も言おつ）、将軍はペーマンとーンジンが嫌いだつた。

食堂は将軍のためにあるようなものだから、嫌いなものをわざわざ使つても仕方ない。

だが、果たしてそれでいいのか。
如何せん栄養が豊富だ。

将軍の発育が（一部）滞つてゐるのは、自分たちの所為なのではないか？

黒騎士たちには個性があるから、議論も紛糾する。

いつそり混ぜて食べさせんべきといつ過激派と、さり気なくお皿に
よそつて反応を窺うべきという慎重派。それでは何も変わらないと
慎重派から分離した中立派。過激派の中でも、調理法で誤魔化そう
とする融和派と、素材にことんまで拘りたい自然派が台頭し、そ
もそも將軍の意に沿わないことは避けるべきという擁護派が睨みを
きかせるに至り、それに対する反発、反発による内紛と、事態は混
迷を極めつつあった。

唯一、彼らの中で一致したのが、戦争などやつていい場合ではない
とこう華麗なる存在理由の崩壊であった。

事態を憂えた各派閥の参謀らは、極秘裏にサミットを招集。
時刻を深夜、会場を魔術師の部屋に定めた…

光陰は矢の如く過ぎ去り…
やがて決行当日。

クソ真夜中に自室に詰めかけてきた黒騎士たちに、マウは嫌な顔一
つしなかつた。

思えばこの日、エメスとの初顔合わせを済ませ、魔靈の行列が見守
る中で望みもしない決闘イベントを消化した彼は、当然ながら使い
魔を連続行使しており、身も心も疲れ果てていた。
しかもきつちりと完全敗北を喫していた。

無理、あれは無理…とこのはマウの言である。

長老のスライムから、先立つて魔術師の苛烈な性を聞き及んでいた
黒騎士たちは、言われるがままに議事進行を執り行うマウにいたく

感心した。

実によくできた魔術師である。

「もしも僕以外の魔術師に出会いことがあるても、ついて行っちゃ駄目だよ?」

と言っていたので、長老の言つことはやはり正しく、彼が異端などと知れた。

彼のおかげで、議会は滞りなく進行した。
いちいち筆談しなくとも、彼が通訳してくれたからだ。

この少年は信頼できると場の全員が認めたので、彼に意見を求めるのは、彼が將軍と同じ種族であるという事実が何より大きい。

「料理は真心だよ」

彼は言った。

「僕は將軍さんと一回顔を合わせたくらいだから、彼女については何とも言えないけどね」

彼は嗤つた。

「…」うつそつ混ぜてさあ、あとでネタばらしちゃ おつせ~。

彼は、超過激派だった…

そして彼は…

「本当は君たちだつて、それを望んでるんだろう? だから僕の部屋に来た。違うとは言わせないよ。僕のこと、知ってるんだろう?」
「低く低く……囁いたのだ。

「魔術師の塔へようこそ……」

第一十八話、心

そ
？ ? ? ? ? れ

？ ? ? な

？ ? ? ? の

？ ? [

……料理は真心であると教えてくれた魔術師は、食堂に来ない理由を將軍に問い合わせられて、こう言ったのだ。

「だつて、素材がグロいんだもん……」

……よりによつて、言つに事欠いて、ビジュアルの問題であると。ましてや料理以前の問題であるとのたまつたのである。

黒騎士は、怒り狂つていい筈だった。

「……」

無言で迫る黒騎士に、慌ててマウが弁解した。

「いや、分かるよ。言いたいことは分かる。でもね、同じだけ分かつて欲しい。おれ魔術師じやん？ でね、なんつうの？ あんな……」

と、そこで彼のお腹がきゅると鳴いた。
全員の視線がマウの腹部に集中する。

「……」

羞恥に頬を染めて赤面したマウが、ふと悔しげに眉根を寄せて、突然その場で床に突っ伏した。

「あんなつ… 意思の塊みてえな野菜食えねえよおーつー。」

魂の叫びであつた。

その田尻には光るものがある。

魔術師の拡大した知覚力は、植物の意思をも捉えるのだ。

物を考える脳がなくとも、世界と密接に結び付く五感が具わつていなくとも、生きとし生けるものには「生きたい」という生理的な欲求がある。

その欲求を満たすために生物は思考能力を獲得したのだと考えるなら、思考の前段階にはまず「願望」がなくてはならない。

脳とは願望を自覚するための器官だ。生み出すための器官ではない。願望を心の働きと捉えるならば、植物にだって意思はある。心はあるのだ。

ただ自覚できないといつ、たつたそれだけの違いでしかない。

そして、王族の「力」にあてられたものは、この「生きたい」と願う希求を強く刺激される。

死を招く力と、生を促す力は、相反するようで、実は一つで一つといふことなのだろう…

「肉ならいいのか」

「もつと無理」

好き嫌いの激しい男である。

面倒な…と將軍は黒騎士に目線を遣る。

黒騎士は、力なく首を振った。

肉も駄目、野菜も果実も駄目となると、手の打ちようがない。他国から食料を取り寄せようにも、交易がない。

しばらく我慢してもうしが…

悩む面々に、姉姫が溜息を吐いた。

「簡単なことでしょう」

彼女は、黒騎士に命じた。

「連行」

ああ、そうか。無理やり食べさせればいいんだ。

まったく問題なかつた。

…そして今、マウは天国と地獄に直面していた。

「そ、たんと召し上がれ」

どん、とテーブルに置かれたのは、ところどころになるまで煮込まれた（あるいは溶かされた）肉と野菜がぷかりと浮いている、透明なスープだった。

ほかほかと湯気が立っている。
匂いも悪くない。

「シーフ、本田のメニューは？」

「ウイ、ムッシュ」

将軍と姉姫の掛け合いは余計だったが、仲直りしたよつて何よつだ。

Hプロンもよく似合つてゐる。

そして、ネーミングは最低だった。

「変な生き物と野菜っぽいシチューのスライム風味で、『ゼコマサ』」

「死ぬだろ、それ」

率直な感想を漏らすマウニ、姉姫は「ちうちう」と搾を振つた。

「分かつてないなあ。おやつさんは生命のスープ。出汁がきいてる
どこひじやないと将軍も大絶賛の究極調味料だよ?」

文字通り身を削つてくれたスライムには申し訳ないが、何もかもが
胡散くさかった。

スライムの溶解液には、この世の如何なる物質も敵わないとされて
いる。

剣で斬り付ければ、何の抵抗も感じずにつっさり振り抜ける。

何故なら刀身が一瞬で融解し、手元に柄しか残らないからだ。

火で炙れば、氣化して大惨事だ。

噂によると寒さに弱いらしいが、だから何だという話である。

適量なら大丈夫なのだろうか。

そういう問題ではない気がする。

しかし事実、しっかりと器に盛られている。

不思議な生き物である。

当然、マウの願いも虚しく、透明な液体を掬つたスプーンは健在だ。そして悲しいことに、粘度も健在だった。

もしも両腕が自由だつたなら、マウは両手で顔を覆つて嘆いたどう。

心のどこかで諦めていた彼は、とろりと糸を引いた煮込みスープといふ予想だにしない惨劇を目の当たりにし、自分の覚悟が如何にちっぽけだつたかを思い知らされた。

「ほれ。あーん」

あーんしてくれている姉姫は文句なしの美少女だが、可愛ければ何をしても許されるという法則は、きっとマウの命を救つてはくれない。

彼を救い、助けてくれたのは、いつだつて頼れる使い魔だった。

「アプリカ！ アプリカ！」

迫り来るスライム汁に、必死に身をよじって首を仰け反るマウ。

魔術師の社会は才能が全てだ。

平凡の烙印を押された魔術師は、その大抵が魔力の制御に幻術という理屈を当て嵌める。マウも例外ではない。

だから彼は、条件さえ整えば、この苦境を乗り越えることができる筈だった。

身動きを封じられているのは辛いが、アプリカが協力してくれるのであれば。

助力を乞う主人に対し、アプリカは…悪徳レフエリーさながらに首を傾げ、聞こえなかつたふりをした。

「あれれ？　聞こえなかつた？　アプリカ～！」

テーブルの縁に腰掛けたアプリカは、窓から覗く大自然のパノラマに魅入られているかのようだつた。
バイオリンを爪弾く背中に哀愁が漂つてゐる。

「アプリカさん？　もしもーし」

結局アプリカは、嬉しかつたのだ。

孤独な幼年期を過ごした主人が、初めての友達を得ようとしている。

学校ではうまく行かなかつた。

魔術師なのに。

優しい世界は、主人を受け入れてくれない。

魔術師だから。

幾重にも連なる世界を重ねて見ていくのに、めくつてもめくつても
見えてこない不確かなものを信じようとするから、主人はどこに居
ても異端だった。

ここに、彼の居場所があるといい。

「あ、ちゅうと、やめて。謝るから。ねえ」

「噉めば噉むほど、味が出る。まあ」

「ひつ……」

夕日が綺麗だった。

第二十九話、真相

「これで、もう大丈夫でしょう？」

と、何もかも見透かした瞳で囁かれて、頭の中が真っ白になった。
…それから先のことは、あまりよく覚えていない。

元々そのつもりで多めに作ったのだろう、残ったぶんのシチューは、
將軍が綺麗に平らげたらしい。

その後、お腹が膨れでお眠になつた將軍を、姉姫がお風呂に連れて
行つたらしい。

らしいと言つのは、気付けば食堂に取り残されていて、ワイングラ
スを傾けている姉姫とテーブルで向かい合つていたからだ。

「あ、こひ」

未成年の飲酒は禁じられている。

少なくともマウの知る常識ではそくなつていたから、彼は慌てて席
を立ち、彼女の手からワイングラスを没収した。

没収してから、これは罷だと氣付いた。

蜘蛛の巣を連想して、ぎくりとしたマウに、姉姫が言つ。

「マウは察しがいいよね。わたしの周りにはあんまりいなかつたタ
イプだから、ちょっと新鮮かな」

これは計算された状況だ。

まあ、元より……マウは姉姫に腹の探り合いで勝てるとは思つてはいなかつた。

彼女は頭がいい。

少なくともマウの嘘をさつくつと見抜ける程度には。いたたまれなくなつたマウは、手元に残されたワインを眺める。血のようなワインレッドだ。透かして見たらさぞかし綺麗だろうと思つて角度を変えるも、ぼうつとしている間にとつぱり口も暮れてしまつたらしく、食堂のカーテンはきつちりと閉められていた。

マウは思つた。

(これは……あれか。どうして分かつた？　とか言わなきゃならない流れなのかな……ハードボイルド的に)

いやでも……と逡巡するマウに、姉姫が取つた行動は劇的だった。

彼女は、すらりとした長い脚を組み直し、架空の肘置きに片肘を乗せて頬杖を突くと、妖艶に笑つた。

「わたしは命令されるのが嫌いだ」

「ぶふつー。」

女王のモノマネだった。

思わず吹き出してしまつたマウは、それは卑怯だろと内心で批判せ

ざるを得ない。

女王は姫姉妹の雛形なのだ。似て当然だし、ヒーリングは気を遣つて女王と同一視しないようにしていふのに、それを逆に利用してくるとは。

まさしく渾身のネタで、おまけに完全な内輪モノだった。

(やばい、ツボつた!)

顔を背けて、ふるふると小刻みに震えているマウを、姉姫は満足そうに眺めている。

「だからさあ、隠してもじょつがないんだよね。はつきり言つて疲れるだけじゃん?」

言葉は便利だ。

だから母は、魔靈の多くに发声器官を設けなかつた。

魔靈と人間の共存の道を絶つためだ。

「将軍の性格からいつて、最初にスライムの部屋に寄るのは分かつてたんだ。

そのあと、エメスと鉢合させしたでしょ?

わたしが呼んだんだよ。

言葉が話せて、魔術師のことに詳しい魔靈となると、どうしても限られてくるからね」

エメスは強い自我を備えているが、あれで忠実な面もある。そして純粋な戦闘能力で言えば、魔靈の中でもトップクラスだ。

「わたしは猜疑心が強いからね。將軍は意識こそ高いんだけど、具体的にどうするかってなると甘さが目立つ。妹は、まだ幼い。

だから、わたしがあなたに最初に接触したの。

わたしはあなたの人となりを観察して、信用できると思ったけど、同時にこうも思った。

感情に振り回されやすい人だなって。
だから心配だったの」

呼吸を整えているマウに、姉姫は艶のある声で尋ねる。

「Hメスに聞いたわ。マウ。あなた、この部屋で何を見たの？」

「…ヒマウは言い淀む。
しかし隠していても今更だ。

自分が別に素材があれだからといって…いや、それも確かに嫌だつたが…食堂を避けていたのではないと見抜かれていたからだ。

「…霧囮気かな。ここはたぶん将軍にとつて大切な思い出で溢れていて…おれが立ち入つていい場所なのかどうか分からなかつた」

幸い、王宮の周りは豊かな森で囲まれていたので、食べ物に困ることはなかつた。見た目がちょっとアレなだけで。

「霧囮気なんて見えるの？」

「あれ、ひょっとしてカマ掛けられましたか、おれ…」

姉姫は綺麗な笑顔で頷いた。

「うん。 だつてエメスも言うほど知らなかつたんだもん。 ちなみに、将軍が言つてた魔術師殺法ね、あれもはつたりだよ。 どう考へても不可能でしょ」

「凄いな、あの人」

悔しいと言つより感心してしまつた。

第三十話、序章

将軍のポテンシャルについて思いを馳せていると、姉姫がぽんと手を打った。

「さて、なんそろかな」

そつまつて、将軍と同じ型の懷中時計を襟元から引つ張り出して眺める。

中じてのめのめ、やはりサイレンで、こちらは姉姫の姿を模していた。どうやら、彼女の外見は持ち主に準じるのが基本らしい。

意識は統一されていながら、サイレンはマウスピースと手を振つてから、小さな身体を精一杯使って現在時刻をお報せした。

一つ頷いた姉姫が、懐中時計を胸元に差し込んだ。ネックレスと同じ要領で携帯しているらしい。

「将軍とおちびは今頃すつまんまんに違いない。わたしはこれよりお風呂に突撃するが、貴公はどうする?」

彼女は常に二手先、三手先を読んでいたようだった。

「いや、どうするって言われても……」

余計な情報を『えらべて、マウは困つたよつて田線を逸らした。頬が熱い。

そんな彼に、姉姫が向ける視線は真剣そのものだ。

「悔しくないのかと言つていいのだよ」

挑戦的な物言いに、マウが鼻白んだ。

「何つ……」

「100%だ」

身構えるマウに、姉姫は焦るなど言ひよつて掌を突き付けた。

「知つての通り、城内は常にリブの監視下にある」

リブにとっては、マウも知る、とある魔靈の愛称である。

「あれはエメスと相反する属性の魔靈だが、どうこう訳か一人は仲がいい」

その理由は、エメスの対抗心が別の魔靈に向いているからなのだが、ここでは伏せた。

その魔靈とマウの接触を、諸事情から姉姫は避けたいと考えていたからだ。

「だから、わたしたちがお風呂できやつきやつふふしていると、ほぼ100%の確率でリブが乱入してくる。彼女は、エメスのことをとても大切にしているからな」

エメスの弱点は水だ。

泥は乾けば一定の強度を保つが、水に濡れると崩れてしまう。

つまり、さしものエメスも水場では力を発揮できない。
だから彼女に代わって、ということだろう。

「そうだ。理解したようだな。つまり今、三人の美少女が生まれたままの姿で洗つたり洗われたりしている計算になる。わたしが突撃すれば、実に四人だ」

マウの妄想を搔き立てる姉姫の意図は分からなかつた。

「もう一度言つ。貴公は悔しくはないのか？」

だが、そんなことはもはやどうでもよかつた。

「分かつた。おれも男だ」

そこまで言われては、引き下がるという選択肢はなかつたのである。

彼は、ようやく理解したのだ。

「おれは、まだ戦つてすらいなかつたんだな…」

マウの良心を担当しているアブリカが、二人を見比べてあたふたとしていた。

その良心を、マウは胸の裡に大切に仕舞い込んだ。

今はただ、力を蓄えるべきだった。

彼を止めるものは、もう誰もいなかつた。

このとき、王城に一匹の獣が檻を破つて放たれたのだ。

第三十一話、男の戦い

魔靈を基準に作られた王城の設備は、そのどれもが民家一つに相当するほど広い。

無論、浴場も例外ではなかつた。

かつては湯殿と呼ばれたこの施設は、十年ほど前に黒騎士たちの手による大々的な改装を経て、今や立派な檜風呂と化している。

一段高く設けられた浴槽から若清水のように湧き出るお湯が足を浸し、波打ち際を歩いているような風情があつた。

湯煙の中、白い裸身が二つ絡まり合い、蠱惑的なシリエットを浮かべていた。

「あの、将軍？ 胸を押し付けるのやめてくれない？」

妹姫の未発達な小さな身体を膝に乗せた将軍が、泡まみれの手で彼女を洗つてあげていた。

「……」

無言だ。

このつむべつたんが、あと数年で自分に追い付き越すのだと思う度に、将軍は世の不条理を嘆かずにはいられない。

あなたも大きくなれば胸が膨らむわよ……と、かつて姉姫は言った。

やがて成長期も軽やかに過ぎ去り、そして現在、將軍は十五歳になる。

マイナス方向に感極まり、とうとう涙をすすり始めた年上の少女に、七歳の女兒がフォローを入れる。

「いや、あのね。あなたもスタイルいいと思うわよ？ 腰が細いし、胸だつて…まだ成長の余地が残されてると思うの」

そこには触れないのが本当の優しさなのだと知るには、彼女は幼すぎた。

「ぐすり…三年前にも、殿下に同じことを言わされました

「おおお…」

妹姫が絶句している頃、マウは群れ成し襲い掛かつてくる黒騎士たちと激突していた。

「うおおおお…」

才覚に恵まれない魔術師が更なる高みを目指すなら、まずは己の肉体を完全に制御する術を学ばねばならない。

雲霞の如く押し寄せる黒騎士たちを、マウはときどき走力で振り切り、またあるときは怪鳥のように跳躍することで突破を試みていた。

何者かのリークがあつたのか、黒騎士たちはその手に聖なるピコピコハンマーを掲げ、魔道に墮ちた魔術師の退路を徐々に削り取つて

いく。

小隊単位の黒騎士が矢継ぎ早に投入され、所狭しと通路を跋扈する。

事態は今や、大規模な鬼ごっことの体裁を擁していた。

既に何度も捕まり、その度に泣くまでピノンコされたマウの体力は、少しずつ、それど確実に奪われつつある。

千騎近い黒騎士から逃げ惑うマウは、しかし冷静に戦局を見極めている。

(一網打尽にするしかない)

謁見の間へと続く階段を駆け上がる、その足に迷いはない。

(喚べて二度。気合と根性で三度……いや、氣絶しては意味がない)

もはや自分に嘘を吐いても仕方ない。

彼は認めた。

「おれはっ」

くるりと反転し、彼は跳んだ。

身投げとしか思えない暴挙に、黒騎士たちの視線が一斉に集中した。

… そう、この瞬間を待っていた。

「おれは女の子のハダカを見てみたい！」

渾身の魔力を込めて刀印を振り下ろしたマウの肩に、使い魔が発現した。

「アプリカ！」

：一人の少年が己の全てを賭していた頃、将軍の背後に忍び寄る影があつた。

「少しば成長したかなあ？」

「ひゃあっ」

後ろから抱き付かれた将軍が、頓狂な声を上げた。

にやにやと厭らしい笑みを浮かべた姉姫が、大きくなあれ大きくなあれと願いを込めてマッサージを施してきたのである。

「このセクハラ王女～！」

顔を真っ赤にした将軍が腕を振り上げて威嚇すると、姉姫は一目散に逃げ出した。

追い駆ける将軍を尻目に、解放された姉姫が安堵の息を漏らすと、足元のお湯が独りでに盛り上がり、全身の泡を洗い流してくれた。

「ありがと、リブ」

髪を編み上げながら、礼を言つ。

リブと言つのは、霧の魔靈レビアタンの愛称だ。

これという実体を持たない彼女は、水と同化し自在に操ることができる。

気まぐれな性質をしており、ときとして氣に入つた人間に力を貸したりもするようだ。

とくに女王に対して忠誠を誓つてゐる訳ではないものの、砂の魔靈エメスとは親交が深い。

意外と世話焼きな部分があるから、それでかもしれない。エメスは強力な魔靈だが、それ故に広く弱点を知られているのだ。

足を滑らせて転びそうになつた將軍を、お湯のクッショーンで受け止めて、そのまま湯船に放り投げる辺り、レビアタンの性格がよく表れている。

奇怪な悲鳴を上げて着水した將軍が、顔に張り付いた髪を乱暴に搔き上げて、手近な湯煙を叱り飛ばす。

「リブ！　お前、もうちょっとわたしを敬え！　わたしはお前より偉いんだぞ！」

子供みたいなことを言つ将軍に、姉姫がお腹を抱えて笑い転げていた。

第三十一話、田原のもの

何かが割れる音がした。

何事かとクラスメイトたちが一斉にこちらを見た。

使い魔の力を借りて、ガラスの球を動かすという内容の授業中だつた。

空中でひしゃげた教材が「トト」と落ちて、辺りに破片を撒き散らした。

大人が思っているよりもずっと、子供は大人の視線に敏感だ。

だから先生が、何か異常なものを見るような目をしているのが分かった。

「この使い魔は…」

違つ。おかしいのは僕だ。
とつむにそう思った。

ガラスの球を動かせばいいと言われて、何で僕は壊すのが一番「簡単」だと思ったんだろ？

こんなことじやいけない。

優しい人になるんだと、子供らしい前向きで明日を誓つた…

その翌日、先生によそのクラスへ行けと教室を追い出された。

思えば、これがケチの付き始め。

新しいクラスのお友達たちは、僕をいじめて喜ぶ悪魔のよつな魔女たちでした。

そして十四歳になつたマウは、何の因果か帝国で魔術師をやつている。

地に伏した黒騎士たちを踏まないよう、ふわりと着地した。

アプリカを発現した状態のマウは、短時間なら浮遊できる。

立つていることも億劫で、がくりと片膝を付いた。呼吸が荒い。

がちがちと具足を鳴らしてもがく黒騎士たちに、マウが駄々をこねる子供を叱るように言つ。

「無駄…だよ。女王がコストを優先したから、君たちは超人じゃない。アプリカの呪縛を、君たちは破れない」

だが、マウは知らない。

どんな魔靈が欲しいと女王に問われて、戦争は質より量ですと答えたのは、幼き日の将軍なのだ。

彼女は帝国に戦術という概念を齎した、まさしく戦姫と呼ばれるに相応しい存在だった。

…鋼が擦れ合つ音がした。

集団戦闘の肝は戦う前に勝つことであると、将軍に骨の髓まで教育された黒騎士の第一大隊が、疲弊したマウを嘲笑うかのように姿を現していた。

マウは嗤つた。彼我の戦力差は絶望的だつた。

彼が己を叱咤して立ち上がつた頃、帝国が誇る三人の美姫らは湯船に浸かつてのほほんとしていた。

「いやあ、今日は暑けかったねえ」

髪が湯船に浸からないよう編み上げた姉姫が、誰にともなく言つて、隣でふにゃふにゃになつてゐる将軍が答えた。

「そつすね。本当なら絶好の訓練日和だつたんですけど、あの馬鹿の所為でうやむやになつてしましました…」

無器用な彼女に代わつて、妹姫が将軍の髪を編んであげていた。

「たまの休みくら」、ゆつくらしなさいよ。あの子も、そのつもりであなたにちよっかいを出しているんじゃない？

「いや、あれは好きな子にイタズラする心理じゃね？」

影のスポンサーである姉姫が、マウのフオローをした。

「好きな子に…えつ！？」

過剰な反応をする将軍に、ああしまつたと姉姫が付け加える。

「ああ、いや、友達になりたいって意味ね」

不老長寿の王族である彼女は、恋愛感情といつものを見知らない。この幼馴染みにも平凡な幸せを掴む権利はある筈だと思っていたから、一人の仲を応援したいといつ気持ちはあるが、いい加減なことは言えなかつた。

「むむむ……」と難しい顔でうなつた将軍が、口まで湯船に浸かつてぶくぶくと氣泡を吐いた。

はつたりではあつたが、一時は本氣で剣を向けたことを気にしているのだろうと察した姉姫が、殊更に明るい声で彼女を励ました。

「だいじょぶ、だいじょぶ。マウはねえ、たぶんどこにも行かないよ。他に行き場がないんだな、あればきっと

「？」と将軍が姉姫を見る。

頭の回転が早い姉姫は、会話していくときどき相手を置き去りにしてしまうことがある。

だが、それすら姉姫には計算外くだ。
彼女はニビルに笑い、こう言った。

「愛に飢えてるつて」とセ

この姉の機転には、姉姫も一目を置いてくる。

「姉様。先生がこんなことを仰っていたのですが…」

彼女は、人間であるマウが帝国で暮らしていることを、ずっと不思議に思つていたのだ。

何故なら魔術師である彼は、やううと思えばいつでもここから逃げられる。

それをしないのは何故なのか？

女王を嫌つてゐるなら尚更だ。

妹姫の話を聞いて、姉姫は内心で苦笑を噛み締めた。

(…あの骨つ子め、余計な入れ知恵を…)

これ以上、将軍を刺激するのは避けたい。

同じ人間だからこそ、マウの言葉や思想に将軍は反発するし、そつあるべきと彼女は己を律してゐる面がある。

しかし考え方によつては好機かもしれない。

マウの話を聞いていて、よく分かつた。

彼は、この城に連れて来られた経緯を隠そうとはしてゐるもの、女王に牙を剥いたこと自体は隠す気がないのだ。

確信を持てるまでは秘しておきたかったが…姉姫は決断した。

ついでに妹姫を抱き寄せようとしたが、逃げられた。

「……」

「無言の拒絕だった。

だから姉姫は、計算通りに将軍の華奢な身体を抱き締めた。

「…たぶん、マウは母様に弱味を握られてるんだよ。口では嫌つてるけど、本当に憎んでる様子はないから、約束つてのがそつなのかも」

「も

おやじく性格的なものだ。

「…」これは、わたしの勝手な憶測だけど、そのときにもマウは一度、母様と敵対してる。それで、負けたんだ」

腕の中で身じろぐする将軍を、姉姫は落ち着くよじりと背中を撫でてあげた。

「エメスに聞いて、幾つか分かったことがある。マウは、母様を魔力で撃てなかつたんだよ。だからここにいる

姉姫が将軍を宥めている頃、マウは迫り来る黒騎士たちと今まさに對峙しようとしていた。

「死にたくねえなあ、畜生……」

かつて女王に命は惜しくないのかと問われたとき、自分は何と答えたか。

(… そうだよな、それでも失いたくないって思つたんだ)

魔靈と人間の戦いには興味がなかつた。

結局のところ、繩張り争いでしかないと思つたからだ。人間は、戦争をさも悲劇的に謳つが、生物同士が殺し合ひのは自然の摂理だ。

これっぽっちも特別なことじやない。

(… 本当に価値があると信じてたものは喪われて、積み木みたいに哀しさが募つてくる。生きる意味なんてあるのかな？ って)

… でも諦めきれないんだ。

ぼうぼうになつて、それでもなお、マウは吠えた。

「だから命は尊いんだろ！」

今、覗きに執念を燃やす少年の魔力が進化しようとしていた。

翅を広げて舞い上がつたアフリカの身体が、ちかちかと点滅する。

幻術という枠組みは、魔術師にとって一つの大きな壁だ。

壁の向こうに広がる世界を、大半の魔術師が、その存在すら気付かないまま生涯を終える。

だがこのとき、非凡な、否、「異常」とさえ称された使い魔が、その壁を乗り越えつづあつた。

明滅するアフリカの付近に、数式と図形が幾重にも浮かび上がる。

それらはアプリカを取り巻き、入れ替わり立ち替わり、周囲を巡つた。

その光景は、マウの認識する世界の「外側」だったから、彼が目にすることはない。

だが、何かが新しく始まるといつ予感があった。

その予感に導かれるままに、彼は叫んだ。

「アプリカ！」

物理的に不可能なことは魔力で再現できない。

だが、本当に不可能なことなどこの世にあるのかという、それは問い合わせだった。

第三十二話、賢者の時間

お風呂を上がった三人が目にした光景は、壮絶なものだった。

まず目を引いたのは、通路一面に並んだテーブルと椅子だ。

その間を縫つて黒騎士たちが忙しなく動き回り、壁面を綺麗に飾り付けていた。

黒騎士以外の魔靈たちも、それを手伝っていた。

歴史の節目ふしめで激戦の地となつた王城の正面通路が、謎のパーティー会場と化していた。

会場を練り歩いているマウを見付けるのは容易だった。

何故なら彼は、「やつはつは。やつはつは」と妙に格調高い笑い声を響かせて、黒騎士たちと次々に握手を交わしていたからだ。

「ありがとう。ありがとう

その度に力強く頷くマウの肩には、当然のようにアブリカがとまっている。

「…何だこれ

異常としか表現できない状況に直面しても、妹姫のコメントは冷静だった。

その声に我に返つた将軍が姉姫を見ると、いつも瞳の奥で冷徹な知謀を張り巡らしている第一王女が啞然としていた。

「…な、何がどうなつてこゝなるの？　まさか魔力？　いや、でも…」

会場にはエメスも居た。

将軍は彼女に歩み寄り、事情を訊くことにした。

「エメス！　これは一体…」

「あ、将軍。いや、あたしもよく分かんない。何か黒騎士が部屋に来て、とにかく集まつてくれつて。逆に訊きたいよ、何なの、これ？」

彼女も事情を知らなかつた。

(…黒騎士が？)

ならば直接、問い合わせた方が早いだろ？…と周囲を見渡していると、朗らかな笑顔でマウが接近してきた。

「今晩は、お嬢さん」

「おじょ…？」

一度は女王に刃向かつたと聞いて、彼に含むといひがあつた将軍が氣圧されていた。

戸惑つ将軍に頬着せず、マウは優雅な身のこなしで彼女の手を取り

上下に揺すつた。

「本日は僕のためにわざわざお越し頂き、誠にありがとうございます」と
す

「はあ…」

追いかけてきた姉姉妹にも同様の挨拶を述べるマウ。

「あ、どうも」

「悪い気はないわね」

一人は如才なく応じた。

危うくスルーし掛けた將軍は、はつとしてマウの肩を掴んだ。

「び、びひしたお前！ 頭でも打つたんじゃないか？」

「やつまつま。まつまつま」

「聞けー。」

耳元で怒鳴ると、彼は怒った様子もなくひかりを見詰めた。

「な、なんだ？」

今更ながらお風呂上がりだったことを思い出して、將軍は恥ずかしくなった。

普段のマウなら、彼女の上気した肌や水氣を帶びてしつとした髪を見て何か思うところがあつただろう。

しかし今のマウは違つた。

彼は胸に手を当てて優雅に身を折ると、将軍にそつと片手を差し伸べた。

「失礼、美しいお嬢さん。よろしければ、僕にサイレン嬢をお貸しい願えますか?」

何だか悔しくなつて、将軍は反射的に断つた。

「だ、駄目だ! なんか、駄目だ。今のお前は、なんかおかしい」

サイレン入りの懐中時計を守るように剣帯に手をやると、指が空を切つた。

「ありがとう。すぐにお返します。ええ、すぐに」

いつの間にか抜き取られていた。

「何だとー?」

心底びっくりした將軍が腰に手をやると、確かにない。

姉姫の予想は正しかつた。

これは魔力だ。

魔力とは曖昧模糊としたものであり、これという決まった形を持たない。それ故、極限まで突き詰めた魔力は、個人によつて効能が異なる。

その究極の魔力を、一部の高等魔術師は「固有結界」と呼ぶ。

今、正面通路を支配しているのは、マウの固有結界だ。

この空間内に立ち入ったものは、須らく戦意を喪失し、手と手を取り合って明日を歌おうといつ氣分になってしまつ。

それがマウの魔力の最終形態だった。

本来なら術者は結界の適用外とされるのが普通なのだが、アプリカを基軸としているため、むしろ一番影響を受けているのはマウだった。

頭が茹だつた主人に代わり、アプリカが命名した、このマウ式固有結界。

名を…「賢者タイム」という。

この結界内において術者のマウは、煩惱から解き放たれるついでに、魔力を使えば体力を消費するという当たり前の制約からも解放される。

否、じれほど大規模な魔力を持続させるとすれば、そのよつた制約は無視して当然なのだ。

畢竟、現在のマウは望むがままに魔力を振るえる、それでいて紳士というハイパーな状態にあつた。

「せつまつま。せつまつま」

ハイパーに仕上がったマウが、影を踏んで階段の踊り場に姿を現した。

「消えた！？」

「いや、あそこだー！」

驚愕する将軍に、早くも気持ちがふわふわしてきた姉姫が、ノリノリで踊り場を指差した。

注目を一身に集めたマウは一礼し、将軍の懐中時計をワイングラスのように掲げた。

「えー、皆様。本日は僕のためにこのみなみの場を設けて頂き、誠に、誠にありがとうございます！」

その声はサイレンによって増幅され、通路の隅々まで行き届いた。

マウの次に結界に囚われた黒騎士たちが一斉にクラッカーを鳴らした。

脇で控えていた黒騎士がくす玉を割り、「よつまつ帝國へ」と書かれた垂れ幕が衆目に晒された。

歓迎会だった。

完膚なきまでに歓迎会だった。

「マウのスピーチが続く。

「宴もたけなわ、堅苦しい挨拶はこれまでと致しまして、お待ちかねのカラオケ大会に移りたいと存じます」

嫌な予感がした。

「トップバッターは、もちろんこの人、勇名轟く帝国の戦姫、今夜わたしは歌姫になりたい、我らが元帥閣下であります！」

「うええ？ わ、わたしか？」

拍手喝采と、視界を埋め尽くす紙吹雪。

楽器に照明にとフル装備の黒騎士たち。

…とても断れる雰囲気ではなかつたといふ。

第三十四話、願い

混沌の坩堝だつた。

將軍が恥ずかしがつていたのは最初の内だけで、十八番の軍歌メドレーが一曲目に差し掛かつた頃には頭の悪そうなポーズでウインクなどやらかしていたし、即席のステージと化した踊り場で、熱氣にあてられた鬼火が頭上を無数に飛び交つていた。

魔靈の大半は夜目がきかないから、それでは困ると黒騎士たちが行灯を片手に鬼火を追いかけ回している。

バックダンサーの黒騎士たちが抜けた穴を、普段は犬猿の仲の人面樹たちが埋めたから、それはホラー以外の何物でもなかつたけど、きつと感動的な光景に違ひなかつた。

だから、何かと魔靈のリーダーを務めたがる、それでいて女王の騎獸には頭が上がらないエメスのテンションが急上昇したのも仕方がないことだつた。

ステージに躍り上がつたエメスが將軍と夢のデュエットを演出したものだから、生理的に彼女を受け付けない人面樹は恥も外聞も捨ててレビューantanに助けを求めた。

彼らが如何に誇りを重んじているかを知つていたから、急け癖のあるレビュイアタンもこのときばかりは助力を惜しまなかつた。

人面樹たちを潤した霧雨は、間違つてもエメスに被害を及ぼさないよう範囲が限定されていたから、本能的に水気を嫌つた鬼火がパー

ティー会場を乱舞した。

本能的に火種を恐れるのは、氷雪の魔靈も一緒だ。

肌も髪も雪のよう、真っ赤な瞳が特徴的な童女は、じわくさに紛れて愛するスライムの胸に飛び込んだ。

どこの育て方を間違つたのか、天敵とさえ言える魔靈に血も凍るような情熱を向けられて、しかし魔靈の長老は一步も退かない。己の肉体が凶器であり、周囲に居るのは護るべきものだと識つていたからだ。

瞬時に凍結した古い友人が情に篤い漢だと識つていたから、剣聖と謳われる老騎士の虚ろな眼窓を熱くさせたのは、きっと友情という名の魔法に違ひなかつた。

「おい、骨つ子」

それなのに、無礼な教え子に水を差されて、骸骨剣士の最後の生き残りは不機嫌になる。

最近ますます女王に似てきた、姉姫だ。

嫌々ながら話しかけているのだと顔を背けている癖に、心細そうに襤襤を掴む仕草は幼い頃と変わりない。

振り払つことはいつでも出来るから、そのままにしておいた。

どうせ魔術師のことでも訊きたいのだろう。

それならそうと、わざと尋ねに来ればいいものを、やれ喋れないから非効率だと屁理屈をこねて賢しいふりをする。

スケルトンと呼ばれるものは、もう自分一人になってしまった、襤
襤を纏つた骸骨剣士は、それでもまだ手の掛かる弟子の多いこと、
呵呵と下顎を打ち鳴らした。

もはや己の一歩と言つてもいい聖剣あるいは魔剣の柄に掛けた手を
ゆるりと上げて、不出来な弟子を幸か不幸か上官に持つ幼い魔靈を
招き寄せた。

ちなみに、その不出来な弟子は今、階段の踊り場で頭の悪そうなボ
ーズを決めている。

きやはつとか言つている上司に疑問は持たないのだろうか、持た
ないのだろう黒騎士から用紙と筆を受け取り、慣れた手付きでさら
さらと一筆したためた。

魔術師に頼れば早いのだが、そういう訳にも行くまい。
せめて偏屈な方の弟子が、魔術師を通せない相談だから連れて来な
かつたと信じたい。

『これは結界だ。今もそう呼ばれているかどうかは知らないが、魔
術師が魔法を敷くときに使つ』

紙面を見て、姉姫が不満げに口を尖らせた。
用件を言い当てられて悔しいのだろう。

「魔力とは違う?」

『たぶん』

「たぶんとは何です。どうちなんですか

そんなことを言われても困る。

別に自分は魔術師ではないのだから。

魔力の一種には違いないだろうが、それは魔術師たちの観点であり、自分たちからすれば別物なのではないか？

視点によって在り方を変える、魔力とはそういうものだ。

幻術とも取れるし、超常の力とも取れる。あるいは、そのどちらでもない。

考えるだけ無駄だ。

『分からぬ。ただ、魔術師は自らの結界をいよいよとなるまで使わない。何故か？』

「…反動が大きいから？」

『さて。それは結界の質による。これは、そういうものではないようだと思つ』

「…千差万別なのですね？」

老剣士は頷いた。

結界とは何なのか。他者に見せるのを極端に嫌うのは何故なのか…大まかな予想は付いていたが、この場で言つことではないと思った。

もしも自分の予想が当たつていたとしたら、あまりに不憫ではないか。

要は、歓迎会をして欲しかったということなのだから。

第二十五話、魔法みたいに

視点を変えれば魔力の在り方が違つて見えるように、見方ひとつで人の貌も様々だ。

妹姫から見たマウは、ちょっと頼りなくて放つておけない感じの、けれど心の優しい少年というイメージだった。

マウは、これまでずっと他人に後ろ指を指される生活を送っていたから、幼子の純真な瞳に「己」がどう映るか不安なのだ。
だから妹姫と接するときは細心の注意を払つたし、小動物の癒し効果に多大なる期待を寄せていた。

そんなマウが、母を嫌つてはいる、ましてや敵対したことさえあるといふ話は、十にも満たない少女にはショックだった。

渋々とステージに向かう将軍を見届けて、手持ち無沙汰になつた妹姫は、手近な椅子に腰掛けて喧騒を見守る。

ステージ上で、将軍に懐中時計を手渡したマウが、恨めしそうに自分を見る彼女から逃げるよう階段を下りるのが見えた。

彼は魔靈たちの注目が将軍に移るのを待つてから、再び影に紛れて、妹姫のすぐ隣に現れた。

黒騎士が配膳してくれたグラスの水に口を付けながら、妹姫はマウに声を掛けた。

「どういう原理なの、それ

将軍が小難しい理屈を並び立てていたが、分からぬこととは訊けばいいのだと、子供らしい素直さで思った。

「おや、魔力に興味がお有りですか、小さなレディー」

テンションがおかしかった。

「…あなた、そんなキャラじやなかつたでしょ」

「夜の煌めきは人を狂わせる。そつは思いませんか?」

夜の煌めきとは何だ。

妹姫はそう思つたが、訊いても為にならなそつだったので追及しなかつた。

分からぬことは訊けばいい。

だが、知つたところではどうにもならないことだつて世の中には往々として存在する。

しかし彼もまた自分に困惑つてゐるようだつた。
マウは眉間を揉み解しながら、

「ちよつと待つて。今…僕、かなりおかしくこと言つてゐるへ..

「…そうね

自覚が芽生えたようで何よりだ。

「…いや、おかしくない。だって、こんなにも世界は美しいじゃな

いか！

でも駄目だった。

その場で無意味にターンしたマウは、劇場のスタアよりじへ両腕を広げて天を仰いだ。

絶望を糧とする王族の第一王女は、マウの固有結界に対する耐性が高かつたから、彼の異様なテンションに引っ張られないと自制できた。

しかしそれも長続きはしそうになかった。

「なんか……胸がざわざわする……」

服の上から胸を押さえる妹姫に、マウは句の根拠もなく断言した。

「それは愛です！」

「たぶん違うと思うの」

だがしかし、マウが差し伸べた手には抗い難い何かがあった。

妹姫の手を取ったマウは、彼女を抱き上げてぐるぐると回る。可愛らしい悲鳴を上げた少女の小さな身体を、彼は軽々と抱きかかえて、膝の裏に片腕を差し込んだ。

「影踏みはよせん詐術！ ですが、アプリカと一緒になら。あ、僕のアプリカ。君は本当に優秀だ！」

あとは寝るだけだと思っていたから、お風呂上かりに裾の短い夜着をチョイスしたのが災いした。

ひらめくスカートを手で抑えた妹姫に制止する暇がある筈もなく、マウは影を踏んで宙に飛び上がった。

魔靈たちの喝采を浴びて、ぎこちなく歌つている將軍がよく見えた。

行灯を抱えた黒騎士たちが、一糸乱れぬ隊列で踊っている。一心不乱に楽器を奏でる黒騎士も居る。

妹姫は、心の底から感激したのだ。

すうい！ あなた、空を飛べるの？」

「三ツ一トリくらいならね 話子が良ければ五ツ一トリでどこか

いつも背伸びしているような女の子が、年相応に瞳を輝かせている
様子が微笑ましくて、偶には魔法使いらしいことをしなくちゃなど
張り切る。

「しつかりと捕まつてね」

高い所が怖くはないだろうかと思ったが、姉妹は元気に頷いて両腕を首の後ろに回してきた。

人を乗せて飛翔できる魔靈は、そつ多くはないものの、まったく居ない訳ではないのだ。

服越しに彼女の体温と胸の鼓動が伝わってきて、女王を撃たなくて良かったと思つた。

それは弱さだと、同郷の魔術師たちなら言つただろう。自分は間違つていないと叫び続けた半生だった。しかし心のどこかでは不安だつたのかもしれない。

初めて認められた気がした。

マウは妹姫を片腕で器用に抱き直して、空いた片腕を振り上げる。親指と小指、薬指を折り畳んで、さつと振り下ろした。

「アプリカ！」

肩の上で、使い魔が弦を弾く。

ぴんと清浄な音が響き、テーブルの上のグラスが一斉にカタカタと震えた。

バイオリンを構えたアプリカが演奏を始めると、どこからか笛の音が鳴り響き、それらは黒騎士たちの演奏と混ざり合つてハーモニーを奏でた。

それは二分か三分ほどの出来事だつたけど、妹姫は大いに感動して「魔法みたい！」としきりにはしゃいだ。

将軍もいよいよ本調子だ。

歌声に街いが消えて、陰鬱な歌詞とは裏腹に最高の笑顔でステージ上を飛んだり跳ねたりしている。

乱入してきたエメスとの戻もばつちりだ。

盛り上がりしている会場に視線を落とすと、どういった経緯を辿ったものか、魔靈の長老が究極の納涼を実現していた。

「あ、先生」

妹姫がそう言ったので見てみると、姉姫と老騎士が並んで立っている。

図書室の主とは彼のことか。

なるほど、これは驚きだ。

自分を捕らえ、帝国に連行したのは彼である。

悪戯心を試すには怖い相手だったから、ゆっくりと降下して声を掛けた。

「今晩は～

「こりやかに手を振ったのに、姉姫は大層立腹の様子である。

「マウ！ 君ね、この魔法を解きなさい」

人差し指を鼻先に突き付けてくる彼女に、マウはハッピーな気分で「あはは」と笑った。

「やつ、出会いは魔法だよね。それは素晴らしいことだよ」

妹姫を下ろしてやり、一割り増しの高速ターンを披露すると、姉姫が「お前の身に一体何があった！？」と驚愕した様子で肩を揺さぶってきた。

「自覚がないんか！？」「

「お嬢さん、魔法は絵本の中だけですが…」

「それそれ！　ぱっちり掛かつてると…」

「今夜、僕は魔法使いになりたい」

「…」これは駄目だ！　話が通じない！』

姉姫は傍らの骸骨剣士に視線で助けを求めるも、彼はお手上げと言うように首を横に振った。

ツッコミに定評がある妹はと言つと、絶賛オンラインステージ中の將軍にきやあきやあと黄色い声援を送つてゐる。

彼岸へ行つてしまつた実妹を見る姉姫の目が生暖かい。

彼女は再びマウに視線を戻し、じつと観察する。

そこで初めて、彼の使い魔が平静を保つてゐることに気が付いた。

「こいつかっ？」

姉姫には魔術師に対する先入観がないから、使い魔が主人を介して魔力を使ひしているという本来ならば有り得ない真相に手が届いた。

アプリ力を鷲掴みにする姉姫に、マウガ「ひりひり」と使い魔を庇う。

「もつと優しく扱つてよね。そもそも、魔力で心に干渉なんて出来る筈が…」

ない、と言い掛けた、彼は硬直した。

「…あるのか。ああ、そうか…」

マウは、両手で顔を覆つて、その場で屈み込んだ。

「そうか、嘘なんだな…」

姉姫の手の中で、使い魔の姿が煙のように霞んで消えた。

魔術師の学校は、子供を育てるための機関ではない。

子供の才能を数値化し、振り分けるための授業なのではないか。

そう考へると、残酷なほど辻褄が合つた。

「なんだそれ…またかよ…」

「…マウ?」

心配なんて掛けさせたくないかったのに、とても立つていられなかつた。

腰を屈めた姉姫が顔を覗き込んでくる。

魔力は解除されていた。

それでも一度火が付いた熱狂は、すぐには冷めない。

姉姫の言つ通り、自分がこの事態を引き起こしたのだと思つと空恐ろしくなつて、声が震えた。

「…將軍、怒るかな？」

階段の踊り場でエメスと一緒に「ぱきゅ～ん」とかやつちやつてる彼女を、とてもではないが直視できなかつた。

もしも自分だつたら、もう末代まで祟るであろう有様だ。

しかし女の子の考え方は異なるのだろうか。

姉姫が、ひらひらと手を振り、こう言つたのだ。

「だいじょぶ、だいじょぶ。あれ、將軍の地だから」

それはそれでどうかと思つた。

第三十六話、救いの手を差し伸べて

将軍とエメスの「ユエット」に見劣りしない一人組と言えば、それはもう姉姫と妹姫の王族姉妹を置いて他には居なかつた。

氷の美貌と、凍て付くような微笑、苛烈にして淒惨な性質と、圧倒的な自負心で知られる女王は、それ故に多くの魔靈から尊敬されていたが、女王はない闊達さや和やかさ、優しさを持つこの姉妹にはアイドル的な人氣がある。

恥ずかしがる姉姫の手を引いて熱狂冷めやらぬステージに上がった姉姫が、将軍とハイタッチして会場に向き直り、

「こん！　ばん！　わ～！」

とかやつちやつている頃、マウは救命活動に勤しんでいた。

立場上、兄や姉に等しい魔靈の暴走に手を出しあぐねている黒騎士に代わり、スライムにひつついで離れない雪童を何とかせねばならなかつた。

「ブレイク！　離れて！」

迂闊に近寄れば、ミイラ取りがミイラになるだけだ。

マウの退去命令を、しかし凍結したスライムに幸せそうに頬を擦り寄せている氷雪の魔靈は、頑なに拒んだ。

大気中の水分が結露し、水霧となつて髪を伝つもの、それらはた

ちまち凍結してしまったから、つららと化した髪の毛先がぱきぱきと音を立てて床に氷の根を張りつつあった。

メディア。それが彼女の名前だ。

名前…と言つよりは、総称と呼んだ方が正しいのかもしれない。

この時代、科学知識というものがなかつたから、人間たちは自然界的猛威を魔靈の仕業と考えていた。

例えば冰雪の魔靈は、吹雪を呼び寄せ、雪山で遭難した人間を凍死させる存在として恐れられている。

自然界の脅威は人間たちにとつて身近で、ごくありふれたものだから、必然的に魔靈は黒騎士のような例外的な種に限らず、数多居るものと決め付けられている。

メディアというのは、伝承に登場する雪女の総称だ。

王族は人間たちの絶望を糧として生きるから、魔靈を生み出すのは女王でも、名付け親になるのは例外なく人間たちだった。

その名前が国内で有効活用されるようになつたのも、將軍が魔靈を指揮するようになつたここの数年の話である。

姉姫のグッズドライブニングに、木々がざわめき、歓声が舞う。陽気な陽炎が氣炎を吐き、気まぐれな水虎すら狂喜した。

「愛してるぜ、ハーハー！」

姉姫が髪の紐を解き、懐中時計を高々と掲げる。

ゆつたりと背中に広がった銀色の髪が、鬼火に照らされて光沢を放ち、幻想的な美しさが観客たちを魅了した。

彼女の美声が会場を席巻する中、嫌々をするメディアに、マウはにやつと笑つた。

「これは僕の歓迎会なんだろ？　なに、焦ることはないさ。彼は君を嫌つてゐる訳じゃないし、僕は君の助けになれる。違うかい？」

メディア

『……』

彼女の沈思する気配が伝わってきた。

魔靈は、世界に蔓延する怒りや憎しみの具現だから、愛や希望と無縁ではいられない。

メディアの愛情は一途だつたから、彼女は決して人間に対しても好意的な魔靈ではなかつた。

そこには、きっと嫉妬の気持ちもある。

古い魔靈の多くがそうであるように、スライムは人間たちを好みしく思つていたし、人間でありながら魔靈の味方をする將軍にとても忠実だ。

それが、メディアにとつてはあまり面白くない。

しかし魔術師だけは話が別だつた。

何故なら彼らは、言葉を持たない魔靈たちの架け橋になり得る存在だからだ。

筆を持ってば即座に凍らせてしまつメディアだから、尚更だった。

言い包められるような形になるのは癪だが、せつかくの歓迎会だし、ここは花を持たせてやるかと… 飽くまでも上から目線で彼女は渋々と折れた。

名残り惜しくも愛するひとから離れると、すかさずマウがスライムに近寄つて片手をかざした。

「ありつたけの毛布を…」

彼は黒騎士に指示を出しつつ、真剣な表情で眉間に皺を寄せた。

「なんて生命力だ…これなら…」

スライムを覆う分厚い氷が、表面から徐々に溶けていく。

マウは、魔靈の生態にさして詳しくない。

時間との戦いになるのなら、遅遲として進まない解凍作業に焦りを覚えてもいい筈だった。

（アプリカを喚ぶか？ だが…）

中にいるスライム」と氷を碎いてしまっては元も子もない。

人間の身体は炎を吐けるよつには出来ていなかから、体温と同じ熱を操るので精一杯だった。

焦るマウ、背後から嗄れた「声」が掛かる。

《どれ、少し手を貸そうか》

そつとて剣を鞘からすらりと抜き放ったのは、老練の骸骨剣士だった。

手骨で危なげなく支えた剣は、決して折れず曲がらず、その鋭さは石をも割くと言われるひと振りだ。

過剰な装飾の類いは一切なく、ただ鋼が本来備える輝きだけがある。数々の逸話で知られる音に聞こえし魔剣が、こうして間近で観察すると何の変哲もない長剣に見えるのは、マウの氣の所為なのだろうか。

将軍の師でもあるスケルトンは、氷漬けスライムに無造作に歩み寄ると、す、す、す、と…またたくの自然体で三度、剣を振った。

《いやせつとは、付き合ひとも長いだな》

たつたそれだけで、氷が剥がれ落ちた。

剣術に疎いマウでさえ、はつきりと分かった。

神業だ。

この人の弟子なら、将軍もさぞかし剣が達者なのだろうと、マウは思つた。

後日、將軍が妙な相談を持ち掛けに来るまでは、そう信じて疑わなかつたのである。

第三十七話、命

女王の眷族たちを一つに大別すると、「魔獣型」と「魔靈型」に大きく分かれる。

魔靈という呼び名が定着したのは、時代の変遷と共に魔獣型の眷族が数を減らし、廃れていったからだ。

その特性上、不可避の「弱点」を抱える魔靈型の眷族は、冷氣や暴風といった現象と同化し、操ることができない反面、非常にコストが掛かる。

女王が、この世界に来て、まずやるべきことは自らの存在を人間たちに知らしめることだつたから、当初彼女はコストが低い魔獣型を大量に生産した。

魔靈型の欠点をもう一つ挙げるとすれば、複製が出来ないことだろう。

例えばエメスが一人居たとすれば、砂を操れるという権能が互いに互いを喰い潰してしまう。

それならば、わざわざ手間を掛けで同種の魔靈を生み出すよりも、異なる属性の眷族を増やした方がよほど効率がいい。

だが、魔獣型には、その欠点がない。

総合的に見て強力なのは魔靈型だつたから、今や指折り数えるほどになってしまったが、建国して間もない頃の帝国を支え、己が身一つで時代を切り拓いたのは、違えようもなく魔獣たちであった。

スライムとスケルトンは、魔獣型の生き残りだ。

スケルトンが幾許かの幸運と磨き抜かれた技量で以って、同胞たちの意志を継ぎ、帝国の発展を見守ってきたのに対して、スライムが生き永らえてきたのは、ひとえに彼の特性に依るところが大きい。

限りなく不死に近い魔獣。

それがスライムだ。

たとえ全身の細胞が活動を停止しようとも、この恐るべき生命体は死の誘惑に屈さない。

ステージを姫姉妹に預けた將軍が、火照った身体を冷まそうと軽い気持ちで「わたし参上」とかやらかしたのは、スライムの並々ならぬ生命力を深く信頼していたからだ。

しかし新参者のマウが、スライムは死はないなどといふ嘘みたいな本当の話をどうして信じられよう。

「ぜえっ、はあっ、ぐっ……！」

お前が大丈夫かという有様だった。

滴り落ちる汗が、顎を伝つて一滴一滴と床に落ちる。

近くで、腕を組んだ師匠がうんうんと小刻みに頷いていた。

マウは、自分が近い将来、全世界の人間たちから裏切り者と蔑まれるだらうことを知っている。

極論ではあるが、魔靈にとつて人間は女王に捧げる供物でしかない。

人間は、命を尊いと言つ。だから魔靈が憎いのだと。

だが、これも「命」だ。

マウは聖人君子ではないから、赤の他人が死んでも、とくに感概を抱かない。

一度でも関わってしまえば情が移ると知つていたから、アプリカと二人でひつそりと暮らせばいいと思つて郷を出た。

それなのに、こんなにも命は眩く愛しい。

今、人肌の温もりを取り戻したスライムが、生まれたての赤ん坊のようにふよんと震えた。

マウは泣いた。

「でも残念。スライムは何をどうやっても死にません」

と、水で喉を潤しつつ見物していた将軍がネタばらしをしたからだ。息を切らして床に突つ伏したマウが、恨めしそうな目で傍らの骸骨剣士を見上げる。

「…それなら、そつと…」

大陸屈指の剣豪は、鼻で笑つた。

『教えたところでどうなる？ 何も変わらぬ。だから結局、お前は甘いのだ』

魔力は便利で、不平等な力だから、その存在を知る人々は魔術師に縋るしかない。

彼ら魔術師が徹底した個人主義を貫くのは、自分の身を守るためだ。

魔靈との戦争に駆り立てられることが分かりきっているから、魔術師たちは人間を見捨てた。

何故なら魔靈は、その多くが人間に負けないよう設計されているから強大で、そんな彼らの「声」を魔術師だけが聞き取れる。

こんな魔術師も居るのかと、女王に立ち向かってきたマウを見て、老騎士は驚いたのだ。

その場で首を跳ねなかつたのは、まだ少年の魔術師が、魔靈の命すら惜しんだからだ。

そのとき、自分の心を震わせたものを、不出来な弟子にも僅かでいいから伝えたかった、というのは余計なお節介なのだろうか。

人間も捨てたものではない…

第三十八話、マウ、オンラインステージ

ひかりのせじと まほりつかいが

おじいに セめてきました

せむりから いまれる

このつと ねがいを つるぎにかえて

にんげんの えいゆひに じゅうひおひませ いいました

よぐわせた むわせあるにんげんよ

ひかりのせじが つるぎをかかげて いいました

まれいのねうよ いまこひど ねむりなさい

じゅうおむねまは わらこました

まほりつかいが つえをかかげて いいました

はい せむり

「…おれ、おれ、つらいんだけど…」

ひとつステージに引っ張り込まれていた。

ぴったりと息が合った連携で、懐中時計をマウに向かた姉妹が、

目尻に涙すら浮かべて笑っている。

何故か魔靈たちにも大ウケだった。

マウは、穴があつたら入りたい。

「ひーー。ちゃんと歌うの。あなた大人でしょー！」

少し目を離した隙にハジけてしまった妹姫が、楽しそうに叱り付けてくる。

「そんなこと言われてもさあ、選曲がちょっと… おれ完全にアウェーだよね？」

あと、姉姫は笑い過ぎだと思います。

「照れてるの？」

妹姫が、大胆不敵にもマウの訴えを無視した。

冷たい微笑の中、目だけが爛々と輝いていた。

いつも実姉と忠臣にからかわれている少女が、今、その鬱憤をぶつける相手を見付けていた。

しかしまウにだって年上の意地がある。

「照れません」

「照れてるんだ。ふうん…」

「ちよつと誰か！」この子を何とかして…」

間奏の度にイエジられるマウは、もう何が正解なのか分からない。両手で顔を覆つて嘆くマウに、姉姫が無表情にべいぐいと懷中時計を押し付けてくる。

「何で照れてるの？ 何が恥ずかしいの？」

自分の半分しか生きていらない女の子に葉責めをされていた。

「ねえ、何で？ ちやんと言つてくれなくちゃ分からないわ」

妹の成長に、姉姫がふくふくと笑つて皿を細めている。

こつなつては将軍だけが頼りだった。

会場でぐいぐいとグラスを呷つている少女に縋るような視線を向けて、すぐさまマウは目を逸らした。

マウの記憶が確かなら、色の付いた液体は水に分類されない筈だつた。

頬にぐいぐいとサイレン野を押し付けながら、マウは小声でスタッフを呼んだ。

「黒騎士、黒騎士…！」

手前の階段で「そこでボケて」というカンペを掲げていた黒騎士が、何ぞ何ぞと近寄つてくる。

「おいつ、大丈夫なのか、あれ？」

そもそも帝国には法律という概念が存在しない。

従つて飲酒を咎める道理もないのだが、マウに言われて振り返つた黒騎士がぎょっとしたのは、きっと目の錯覚ではない。

とつあえずと手渡された空のグラスを、マウは呆然と見詰める。

「…」それでボケると…？」

ひっくり返して思案するも、何も思い浮かばない。
ここでボケる必然性もよく分からない。

それでも妹姫の追及は一向に収まらないし、魔靈たちの期待は高まる一方だ。

及び腰になつたマウは、おずおずとグラスを掲げて…彼の名譽のために言う、何か考えがあつた訳ではない…

「が…ガラスのハートなもんで」

「面白いわ」

妹姫が、にこりと笑つてくれた。

ほつと胸を撫で下ろしたマウで、彼女は言つ。

「もう一度、言つてみて」

「将軍！ 助けて！」

もはや形振り構つてゐる場合ではなかつた。

あると將軍は…と呟いたとした瞳で、手元の杯をじっと見詰めた。

「お手本とか要らないから…そういう意味の助けは求めてないから
！」

マウの必死の訴えに、「あ、うん…」と曖昧に頷いた將軍が、えへ
へ…と照れくさそうにほにかんで、グラスを掲げた。

「かんぱーい」

すっかり使いものにならなくなつていた。

「かんぱーい」

それでもシッコむことが全てではないのだと、本日一番の笑顔で応
じたマウは、自らを犠牲にして示したのだ。

第三十九話、將軍の決意

警備上の問題から、王族と將軍の寝室は城の最上階付近にある。人間は空を飛べないからだ。

マウの部屋が一階にあるのは、階段の上り下りを苦手とする魔靈も居るからである。

魔靈たちの居住区から少し離れた、中庭に程近い角部屋がマウに宛がわれた寝室だ。

表札が掛かっていない、古びた木製の扉を開けると、軋む音がした。

ここは、今や滅んだ古い魔獸のかつての住処の一つだ。
鳥類に属する魔獸だつたのか、部屋の中央には天井から鎖で固定された止まり木が吊り下がっている。

その止まり木に寄り添うように、質素な寝台がぽつんと置かれている。

カーテンを閉める習慣がないのか、間取りに対して随分と大きく感じる窓から月明かりが差し込み、室内を仄かに照らしていた。

寝台の上で規則正しい寝息を立てているのは、当然マウだ。

眠っているときの彼は、表情から険が取れて少し幼く見える。

寝顔を見物することしばし。

将軍は……「よこしょ」とマウの掛け布団を剥ぎ取ると、熟睡している彼の腕を掴んで引っ張り起こした。

「時間だ、行くぞ」

「……」

マウは抵抗しなかった。だらりと首を垂らして、ふらふらと将軍に追随する。

彼女の足取りに迷いはない。

一体どこへ連れて行こうとしているのか。

疑惑の黒鎧までじっかりと着込んで、夜の散歩もあるまい。

懐中時計なんて洒落た小道具を持たないマウだが、彼の体内時計は魔術師ならではの正確さを誇る。（だからと言つて例の懐中時計が欲しくないという訳では決してない。むしろ欲しい）

時刻は、草木も眠る丑二つ時だった……

クソ真夜中に部屋を訪ねて来るのは、黒騎士団の伝統なのかもしない。

そういうふうに考えれば、少しほは寛容になれる気がした。

もちろん、そんな伝統はない。

将軍はマウの腕を引っ張り廊下を歩きながら、

「とにかく、術士。お前、夜田はまく方か？」

「……

……あくけどおつ…」

マウは、たっぷりと間を置いてから駄々をこねる子供のように嫌々をした。

魔術師は夜目がきく。

まったく見知らぬ土地に連れて行かれて、さあ案内しろと言われても困るが、「魔眼」といって、過去に見た光景と現在を照合して暗所を見通す術がある。

とくにマウの魔力は、対象との距離が近ければ近いほど、つまり自分自身に対して最大の効力を發揮する特性を備えていたから、いわゆる「定跡」と呼ばれる初步的な術が得意だった。

魔眼は定跡の一つだ。

研究しきぐられて、最短の道のりを定められているから、発想力や構想力を必要としない。

マウは平凡な魔術師だから、持久力や集中力といった精密さを磨くことは出来ても、その上を目指することは出来ない。

それなのに使い魔だけが際立つて優秀だから、この少年は魔術師たちの間ではちょっととした有名人だった。

夜目がきくと聞いて、将軍が食いついてきた。

「ほつ！ それはいい。適任ではないか

大抵の魔靈は夜目がきかないからなあ…と呟いた彼女に、マウが舟を漕ぎながら相づちを打つ。

「ん…夜目え？ そんなイメージ…ないけどなあ…」

はきはきと答える将軍が、いつそ憎らじいほど対照的だつた。

「さうとも。女王陛下は人間どもが苦しんでいるのを見るのが好きだからな。魔靈の活動時間は田中がメインだ」

ろくでもねえなあ…とマウは思つたが、王族の体質を鑑みれば至極当然のことなので、口には出さなかつた。

とにかくひたすら眠かつたので、将軍の柔らかい手を意識せずに済んだのは幸か不幸か。

寝癖の付いた髪をぐしゃりと搔き乱して、マウは「あー」だの「うー」だのとうめいた。

「…で、なんなの？ 夜分遅くつていつレベルの時間帯ですうねえぞ…」

ぼやくマウに、将軍が足を止めて振り返つた。ふわりと鼻先を掠めた髪から甘い香りがした。

「思えば、わたしが甘かった」

彼女は真剣な表情で、マウの両肩を掴んだ。

「お前が陛下を嫌っているのは何となく分かつてた。それなのに…
わたしが、いけないんだ。
許せとは言わない。だが、安心しろ。わたしが、お前を教育してや
る」

将軍の瞳が、熱く燃え盛っていた。

ありがた迷惑だった。

第四十話、見えない明日

北に世界最大の湖、南に前人未到の靈峰、見渡す限りを秘境の樹海で覆われた帝都は、天然の要塞だ。

城の屋上から眺めた風景は、まさしく難攻不落といったところか。

行灯に篝火まで幅広く活躍する鬼火が、あちこちで青白く瞬き、夜の帳にささやかな抵抗を続けていた。

夜風を孕んだ將軍のマントが、大きく翻つた。

「ここ帝國領内は、気候の変動が激しい。」

魔獸はともかくとして、トップクラスの魔靈ともなれば、その存在だけで自然に影響を及ぼしてしまうからだ。

將軍が身に付けている革鎧は特別製で、体温を調整し体力の消耗を軽減してくれる。

市場に出せば値が付かないほどの価値がある。

マウが着てている半袖の寝間着とは雲泥の差だ。

つまり何を言いたいのかといふと、

「…寒いっす」

眠気が吹き飛んだ。

しかし前述にある通り、摩訶の黒鎧に身を包んでいる将軍は、多少の肌寒さを感じる程度だ。

彼女はか細い腕をすっと伸ばして、樹海の向こうを指差した。

「森を抜けた先にあるのが死海。海って呼ばれてるけど、本当は湖なんだと」

「はあ…」

「あつひある山は頂上から辺でいつも雪が降ってる。不思議

「…標高が高いからだよ。気圧が低いと空気が散つて、気温を保てなくなるんだ」

憐みの目で見られた。

「そうか、お前の住んでた村ではきっとそつなんだな…」

「何この人。ナチュラルにおれを見下してくれるんですけど」

マウは手櫛で寝癖を撫で付けながら、視線を逸らした。

時代が下るにつれて、いつしか魔術師が集団を形成し独自の文化を築きつつあることは知られていない。

情報の流通量と人口密度は比例するから、歴史から姿を消した魔術師が山村に隠れ住んでいるという考え方あながち間違ってはいけなかつた。

マウに背を向けていた将軍が、ゆっくりと振り返った。
彼女の秀麗な横顔を、鬼火が照らしていた。

「将軍は、何度でもマウに問う。
お前はそれでいいのかと。」

「人間どもの脆弱な戦力では、魔靈には決して勝てんぞ」

「…どうかな」

マウが明言を避けたのは、戦争にあまり詳しくなかつたからだ。

ただ、ひとつだけはつきりと言ふことができた。

「でも、魔靈には欲がない。あつても少ない。欲望は、生きるために
の力だ。魔靈にはそれがない…」

王族の食欲を満たすためだけに戦う魔靈の、歪さがそこにある気が
した。

「……」

将軍は否定しなかつた。

彼女も同意見だったからだ。

瞑目した彼女は、腕を組み…一度二度と頷いてから、マウの肩に手
を置いた。

「術士よ。お前はこれから白毛警備員として働くのだ。どうだ?」

「どうもひつじ

聞こえはいいけど、それ実質無職じゃね？ と。

しかし将軍の決意は固かつた。

彼女は、もしもこの少年が死ぬときは、自分の手に掛かって死ぬべきだと思い詰めていた。

何故なら彼は自分と同じ人間で、魔靈たちは彼を歓迎しているだけれど、それでも…

(…わたしは…！)

…同じ人間である彼に魔靈を認めて欲しいという願いを捨て切れない。

「お前が自分勝手に振る舞うのは、責任感がないからだ。やはり人間、無職ではいかん」

「無職とか言うな」

女王直属の魔術師なのに、里帰りする女王に置いて行かれたマウが、今はたまたま仕事がないだけだと呟えた。

将軍がマウの両肩を揺さぶり、彼の敏感な部分をちくちくと刺激する。

「わたしは常日頃から、城の夜間警備に不満があった。お前がやるんだ。まずは飛び出せ無職を」

「だから無職とか言つた」

けれどマウの心は揺れていた。

魔靈は夜目がきかない。これは自分にしか出来ない、自分だからこそ出来る仕事だ。

「…べつ、べつに仕事なんて欲しくないんだからねー」

だからそう、魔力の訓練にちょうどいいからと、將軍がどうしてもと言つから、仕方なく引き受けたのだ。

第四十一話、友情

魔力を制御する理論とは、すなわち自分を如何にして正当化するかという、その一点に集約されるから、魔術師という人種は總じて、驚くほど人の話を聞こうとしない。

あんた大人だとツツコミ続けて生きてきたマウだから、いざ自分が給料泥棒の立場になつてみると、いたたまれなくて仕様がないのだ。

一応、帝国魔術師という肩書きは持っているものの、女王は魔術師を手元に置いただけで満足してしまったから、業務内容が曖昧の一言に過ぎない。

魔靈たちはあれこれと無理難題を言つてくるが、交渉の余地があるだけ生易しいとすら感じていた。

だからだろう。

まんまと夜勤を押し付けて睡眠時間を獲得した將軍が「しつかりやれよ。うむうむ」とか言って去り行くのを、燁然と眺めていたマウは、内心そう満更でもなかつた。

素直に喜ばなかつたのは、厄介ごとに首を突つ込む 気付けば四面楚歌というルーチンワークをこなしている内に形成された人格が、ろくなことにならないぞと耳元で囁くからだ。

「なんだよ、もひ…」

けど本人に自覚はないから、感情とは裏腹に悪態を吐くのだ。

唇を尖らせたマウは、腕を組んで瞑目し、何度も身体を揺する。

(…ま、女の子だしな。夜中に出歩くのはどうかと思はず)

心の着地点を定めた彼は、「よし」と一つ頷き、屋上を漂っている鬼火を手招きした。

「おいで、ウイスプ」

ウイスプというのは、鬼火の呼び名の一つだ。「人魂」と呼ばれることもあるこの魔靈は、人懐っこく陽気な反面、臆病な面がある。

好奇心が旺盛なので、呼べば近付いてくるが、手の届く範囲まで寄ると不安になつて一定の距離を保とうとする。

いぐら夜目が悪くとはいえ、光源が近くにあるのとないのでは、魔眼の精度が違つてくる。

マウは、口を利用しない魔靈に対しては自然体で接することが多い。

「ほら、集まつて集まつて。はい、輪になつて。そしてぐるっとターン」

手拍子で音頭を取るマウが、鬼火と一緒になつてくる。回る。

「ありよつと」

女の子の一人歩きは危ないからと、マウが將軍を彼女の部屋まで送り届けるのは不自然ではない。

彼女の寝室は屋上にはないから、鬼火を引き連れたマウが城内に居

るのは当然の流れだ。

影を踏むというのは、そういうことだ。

無駄足を踏ませるということであり、影を「畳む」…つまり主体を移すという意味もある。

自身だけでなく他者を伴える術者はそつ多くないが、要は相手の同意を得られるかどうかが鍵なので、条件付けを常識的範疇にどめておけるマウとは相性の良い魔力だ。

この場合は、將軍に善意を抱いている鬼火だから成立したと言える。

鬼火からしてみると瞬間移動以外の何物でもなかつたから、彼らは大いに驚き、喜んだ。

妹姫には大層好評だつたからどうかと思つたのだが、喜んでくれたようで何よりである。

こつしてコツコツと信頼を積み上げておけば、有事の際にも安心だ。

マウの魔力が一風変わつた特性を備えているのは、彼の考え方が他の魔術師とは根本から異なる所為でもある。

マウを取り巻く鬼火たちが、城の内壁を淡く照らしていた。

寄り集まつても光量そのものは変わらないのが、彼らの大きな特徴だ。

帝国には、純粹に炎属の魔靈が存在しない。

あらゆるものを灰燼に帰す魔靈が居たなら、それは確かに無敵かもしれないが、他の魔靈との相性が悪すぎる。

人類の滅亡は女王の飢餓をも意味するから、代表的なところで「火」と「水」を秤に掛けた折り、彼女は後者を選んだ。

今、マウの足元に立ち込めつつある夜霧は、そうした経緯で誕生した魔靈だ。

泡を食つて浮上する鬼火を嘲笑うかのように、レビューアタンは凝り固まり渦を巻いて屹立し、髪の長い女性のシルエットを取つた。

『まさか本当に来るとは思わなかつたぞ、人間』

「何か誤解があるようですが…」

その口振りから待ち伏せされたのだと知つて、マウは早くも逃げ腰になる。

『分かつている』

レビューアタンは、今まで言つなど頷いた。

彼女は気分屋ではあるものの、人魔を問わず氣に入った者には手を差し伸べる大らかさがある。

『…夜這いだな?』

「待て、話せば分かる」

将軍の寝室と王族の寝室は同じ階にある。

「…Hメスの差し金か？」

レビュアタンと仲良しのHメスは、王族への忠誠心が強く、女王嫌いのマウを一方的に敵視している。

『その度胸は買おう。だが…』

もしもレビュアタンが姫姉妹の寝室に近付いた不埒者を抹消する任に就いているなら、魔術師並みに我が道を行く彼女を説得するより、まず先に依頼者を特定して命乞いする必要があった。

『だが、貴様が愛に殉じるといつなら、わたしは友に応えねばならない…分かるな？』

実際に面倒くさい友情である。

第四十一話、レビューアタン

アプリカとの初めての共同作業で、マウはクラスだけでなく寮も追い出された。

当時は戸惑うばかりで言われるがままにするしかなかつたが、今なら上から学校に圧力が掛かつたのだと分かる。

使い魔は術者の潜在能力を引き出すための存在だから、子供の握力では決して砕けない強度のガラス球を粉々にするほどの物理的干渉を僅か八歳で成し遂げたというなら、その少年の未来は希代の天才魔術師でなければならなかつた。

魔術師の社会では魔力に秀でた人物が実権を握るから、権力者たちは今ある地位を失うまいと優れた人材を独占したがる。

そして現在。

一時は将来を嘱望された少年魔術師が、今、遠く離れた異国之地で人生に落第しようとしていた。

『そうか、狙いは少しこい方か』

「狙いつて何だよ！」

廊下で騒いで将軍やら姫姉妹が出て来たら事態は泥沼だ。
それだけは避けねばならない。

階段方向へ駆け出したマウに、レビューアタンは躊躇いなく人間失格

の烙印を押した。

言つても無駄だと分かつていても、沈黙が肯定を意味するようで嫌だった。

霧の魔靈は、いつそ清々しいほど人の話を聞かない。
まるで魔女だ。海神：

『このことは責任を持つて報告させて貰う。あとたったの十年が待てなかつたのだと。いや、だからこそか…』

「生々しいだろ！ 本氣でやめてー！」

本氣で逃げる魔術師を捕えることが出来るのは、同じ魔術師だけだ。けれど今、マウの尊厳が風前の灯火だったから、彼女を野放しにする訳には行かなかつた。

マウの人生は、いつもそんな感じだ。

逃げて失うものと戦つて得られるものを秤に掛けたなら、決まって天秤は後者に傾くかのようだつた。

とぶんと大気に潜水したレビュー・アタンが、再び夜霧と化してマウに迫る。

水で構成される彼女を呪縛できる自信はなかつた。
行く手を遮る水柱に、マウは舌打ちして飛び退いた。

じりじりと後退しながら、彼は思案する。

魔靈の権能はどの程度まで有効で、限界はどこにあるのかと。

仮に一切の制約がないなら、勝ち目はなかつた。
血液の大部分は水だからだ。

警戒を露わにするマウを、その浅はかさを、レビューアタンは嘲笑う。

『このわたしが、人間如きに手の内を明かすとでも思つてゐるのか
?』

水柱を割つて、中から人影が現れる。

やはり髪の長い、目も口も鼻もない女性の輪郭だつた。

『近距離戦が得意なのだろう? まるで魔術師の出来損ないだな
何と言つたか…そう、確か＊＊＊だ』

彼女が何と言つたのか、マウには分からなかつた。

魔術師は物言わぬ民と交信できるが、固有名詞の類いは互いに共通
の認識を持つていなければ伝わらない。

だが、彼女が何を言いたいのかは分かつた。

手札を伏せたまま、格闘戦でマウを叩きのめすと言つてゐるのだ。

魔靈は、いつの時代も人間を弱小と侮る。

その油断が、魔靈の最大の弱点だったとしてもだ、明日があると信
じてゐるから人間は前へ進める。

絶望を享受したなら、それは「諦め」だ。

女王は世界征服を謳つてゐるが、本心ではない。

魔靈は効率的に敗北し、効果的に勝利するべきなのだ。

レヴィアタンは、女王を親とも思っていないが、女王が弱体化すれば魔靈の権能も衰退する。

魔靈の力は相対的で、実は刻一刻と変動していることを、人間たちは知らない。

無造作に歩み寄つてくるレヴィアタンは隙だらけで、格闘技の心得があるように見えない。

対するマウも武術を習つた経験はない。

しかし彼には、誰よりも精密な魔力がある。

自身の運動を客観的かつ機械的にコントロールできるマウは、それ故にクラスメイトから「あんた変質者のスキルばっかり上げて将来どうすんの?」と真顔で訊かれたことさえある。

無警戒に距離を詰めるレヴィアタンに、彼は何を思ったのか、その場で片膝を付いた。

『…降伏か?』

「そう思つてゐるなら、君の負けだ」

上空で鬼火たちが見守る中、顔を伏せたマウの双眸だけが不気味に煌々としていた。

レヴィアタンが獰猛に笑う。

『面白い…』

初めて会話が成立した。

当たり前のことに嬉しく感じて、マウは自分がどうへ向かおうとしているのか不安になる。

「…おれ、真夜中に一体何をやつてるんだろ?…」

ふと、やつと思つた。

第四十二話、深夜の攻防

互いまでの距離が二メートルを切った。

魔術師は動かない。片膝を付き、やや前のめりに倒した上半身を片腕で支えている。

顔を伏せたのは、田線を隠すためか。それとも、他に何か理由があるのか…

彼の狙いが何であろうと、レビューアタンは一向に構わない。

最強の魔靈と称される「伯爵」にすら、彼女は負けない自信がある。

それほどまでに、生命と水の関係は深い。

レビューアタンが城内の監視を任せているのは、大気中の水分と同化した彼女が生物に対して絶対的な優位に立てるからだ。

エメスとの戦いは見せて貰つた。

不必要な接近と離脱を繰り返す彼の戦い方は、魔術師のそれとはかけ離れている。

遙か昔、魔術師が「魔法使い」と呼ばれていた時代に暗躍した、強制的に魔力を開発された人間の兵士と酷似していると感じた。

二メートル。互いに手を伸ばせば指先が触れる距離だ。

マウは動かない。

『どうした、射程距離内だぞ?』

レビューアタンは親切にも教えてあげた。

近ければ近いほど、彼の魔力は真価を發揮する筈だった。

もちろん望ましいのはゼロ距離射撃なのだろうが、広い視野の確保は魔術師の生命線でもある。

その狭間を行き来するマウのスタイルは、魔術師として褒められたものではない。

だが…

レビューアタンは微かに目を見張った。

この、肌を刺すような圧迫感はどうだ。

質量を持たない筈の魔力が、まるで彼の小柄な身体から立ち昇つているかのようだ。

にわかに緊張を帯びた空氣にも法まず、レビューアタンは懶々と歩を進める。

一メートル。

振り上げたレビューアタンの手が、したたかにマウの頬を打つた。

彼は、まったくの無抵抗だった。

もしも振り下ろしたのが拳だったら、それで終わっていた。

だが、実際にマウの頬を打つたのは、鋭く振り抜かれた平手だった。

ククク…

切れた唇の端から滴る血を、彼は拭いもせず、低く囁つた。

「こ……寧にも忠告してやつたのによ」

僕の勝ちだ。

そつ囁いたマウの姿が忽然と消失した。

影踏み！ だが…

脇を通り抜けざま、刀印を突き付けてくるマウを、レビュアタンは超人的な反応速度で迎撃する。

彼女の手刀がマウを貫くより早く、肩をぽんと叩かれた。

軽やかな身のこなしで飛び上がったマウが、レビュアタンの肩を支点に彼女を飛び越えていた。

『二人…いや三人だと…?』

レビュアタンは今度こそ驚愕した。

マウは、影踏みをほぼ完璧に制御できる。

レビュアタンには見えないが、彼の肩にはいつしか使い魔が発現し

ていた。

マウが、使い魔を発現させるときに執拗なまでにアプリカの名を呼ぶのは、そうしなければ喚べないと周囲に錯覚させるためだ。

マウの魔力は、アプリカを発現することで爆発的に出力が上昇する。今、レビューアタンが目にしている現象は、魔力のオーバーフローだった。

暴走した魔力は破綻へと向かって崩壊するのが常だが、発現したアプリカがそれを許さない。

結果として、影踏みの作用も手伝い、魔力は「術者が複数人いる」「だから破綻はしていい」という理屈に飛び付いた。

本来なら実現不可能で説得力が皆無の理論に魔力を誘導する。

一人では出来ないことも、二人なら、三人なら？

アプリカという非常識な使い魔に支えられたマウだから可能な、これが彼の奥の手だった。

完全に虚を突かれたレビューアタンが「しまった」と思つたとき、背後のマウが、またもや煙のよじに姿を消した。

「でも忠告はお互い様だね」

一度ない好機をあえて見送った理由を、肩越しにマウが明かした。

人間が、だ。

どこまでも対等であるとする少年に、レビューアタンの心が震えた。

『面白い！ 面白いぞ、人間…いや魔術師！ コーティと言つたな
！』

魔靈が真に願うのは、人間の手による敗北だ。

悔り、踏み付けにした人間が己に依つて立ち上がり、強大な魔靈に屈さず立ち向かうというなら、それは「心の力」の具現たる彼女たちの実在を証左するようなものだ。

「やめてよね、その名前で呼ぶの！ 僕はマウだ！」

着地して再び駆け出したマウの背を、レビューアタンが追う。

前言を撤回した彼女が、鞭状に変化させた髪を無数に撃ち出す。

きんつ…と新たに展開された魔眼が、背後から迫るそれらを捉えてマウに軌道を正確に伝えた。

戦闘時の彼に死角はない。

後ろに目があるような回避運動を見せるマウに、レビューアタンは歓喜した。

しっかりと避け切つてから、わざわざ振り向いた彼の目が、夜闇に爛々と輝く魔眼が、「ついて来い」と雄弁に告げていたからだ。

戦いの中では生きられない人間だと直感した。魔靈と同じだ。

「どうした？ その程度か、レヴィアタン！ どうした、どうした
… 海神の名が泣くぜ？」

魔術師とはいえど人間だ。

全力を出した魔靈に敵う筈がない。

それでも、マウは挑発的な物言いを改めようとしない。

口で言つても聞かない魔術師たちを力尽くで黙らせている内に、すっかり歪んでしまっていた。

家族と呼べるのは、もうアプリカだけだった。

術者と使い魔は一心同体だから、失うものは何もない。

守るべきものが自分の中にしかないのなら、どこまでも強気になれた。

それは弱さだ。

だから、傲然と立ち塞がる砂の魔神を正面に認めて、嗤つしかない。

「居たなあ、エメス！」

この場で土下座しても良い筈だった。

だが、それは何かが「違う」と感じた。

地を削る勢いで立ち止まり、背後のレヴィアタン、正面のエメスに両手で刀印を向けるマウに、こいつはシチュエーションが大好物の魔靈たちは灼熱のような興奮を覚える。

「ちょっと見ない間にあたし好みに育つてんじゃねえか、人間！」
まるでプロポーズのように吠えたエメスが、両腕を砂へと変じ緩慢な動作で迫ってくる。

アプリ力を肩に乗せたマウが、よく通る声で叫んだ。

「来いよ！ 二人掛けでも構わないぜ！ それで勝てるんならな

⋮

⋮ だから、正直、真夜中だとか、そういうことは頭から飛んでいたのだと、マウは妹姫に釈明した。

三人揃って廊下に正座させられていた。

「そうなの。それで……」ははは「… 言つてみて」

「… 廊下です」

「もつと具体的に教えて？ どこの廊下なの？」

クソ真夜中に寝室の真ん前でぎやあぎやあと騒がれた妹姫の口調は、ひたすら優しい。

「妹姫の…部屋の前です

「それ、わたしのことよね？」

「…そうです」

マウは、昨日と今日で二回も妹姫（七歳）に怒られている。

こんな筈ではなかつたと、幼い頃のマウが現状を知つたら嘆くだろう。

だが、十四歳になつたマウとて、過去の自分に書いてやりたいことがある。

お前、もうちよつとまともな人生を送れなかつたのかと。

そしてこうも言えるだらう、少なくとも今の自分は一人ではないと。

「…姫様、あたしは巻き込まれただけなんス」

だが、早くも内部分裂の狼煙は上がつていた。

「レビイだつて、本当のといふは分からぬじゃないじやないスか。こいつの証言なんて」

エメスは、親友のレビイアタンを「レビイ」と呼ぶ。友人を庇おうといつ、麗しい友情の発露だ。思うに、そこに保身がなければ最高だった。

売られたマウは、内心で嘲笑う。

（これだから叱られ慣れてないやつは…）

彼女は何も分かつていない。

責任の所在など、もはや妹姫にどうては問題ですらないのだ。

瞑目してエメスの言い分を聞いていた妹姫は、果たしてゆっくりとまぶたを開けた。

「…で？」

何が言いたいのかさっぱり分からないと、妹姫は一文字で簡潔に告げた。

「…え？　いや、だから…」

察しの悪いエメスに、妹姫は優しく教えてあげる。

「あのね、わたしは今、あなたたち三人を叱つてるの。ここまではいい？」

辛うじて頷くエメスに、よく出来ましたと微笑む。

「じゃあ、わたしがこうして真夜中に廊下に立つてるのは誰の所為なの？　あなたが言うように、マウが全部悪いの？　本当は全然悪くないあなたトリブを、わたしは性格が悪いから間違えて怒つてるの？　どうなの？　黙つてちゃ分からないわ、ねえエメス…」

笑顔で追い詰めてくる妹姫は背筋が震えるほど怖いのに、可愛いと思つてしまつのは何故だ。

マウは、そろそろ考えている。

第四十四話、プロローグ

理屈を説いて戦い始めるのに、途中で感情という壁にぶつかって、終いには理想を追い駆けるから駄目なのだ。

言っていることは正しいし、共感できる部分だつてまつたくない訳じゃないのに、自分では一貫しているつもりでも周りからすると目的がこころいろと変わっているように見えるから、誰もついて行けないのだ。

事あるごとに魔術師の在り方に疑問を投げ掛けるマウだが、常に人生のクライマックスを迎えているような彼を正しいと認めれば、待ち受けているのは、きっと取り返しのつかない泥沼に違いなかった。

日に日に成長するサボテンは、その象徴であるかのようだ。

魔力により成長を促され、己が何者であるかさえ忘れた観葉植物は、この日の朝、ついに食虫能力をも獲得した。

鋭い二ードルで覆われた蔓が、他でもない自分を付け狙っているようで、アブリカは落ち着かない。

小鳥ほどもあるキリギ里斯という視覚情報を内包した使い魔。特技はバイオリン。
それが彼だ。

使い魔というのは、簡単に言えば魔力の一種であり、魔力を自動制御するために仮想人格を付与された存在である。

魔力を二重起動しているようなものなので、当然ながら術者への負担は通常の比ではない。

魔力の制御は修練で磨くことができるから、使い魔に頼るのは本來なら不名誉なことだ。

だが、古代の魔法使いたちが魔術師と名を変え、暮らしが安定するにつれて、魔術師が自らの魔力を自慢できる相手は同じ魔術師に限定されていったから、いつしか彼らは持久力よりも瞬発力、発想の奇抜さや柔軟性をより高く評価する傾向を強めていった。

事実、それらは才能と呼ばれるもので、後天的な努力では到達できない分野に属する。

人間は五感の内で視覚を重用する生き物だから、目に見えない努力よりも、はつきりとした才能を好む。

アプリカの主人は一言で言えば努力の人だ。

マウとかコーティとか呼ばれる彼が、自身の使い魔であるアプリカと比して平凡などと評されるのは、ひとえに生まれた時代を間違えたとしか言いようがない。

運も実力の内と言つなら、それもまた主人に課せられた宿命なのか。

止まり木で翅を休めているアプリカは、幸せそうに布団の中で眠っている主人を見るにつけて、不憫に思う。

己の使い魔に同情されているという事実が、またより一層に涙を誘うのだ。

アプリカの一日は、不正な手段で進化したサボテン（他称）の世話から始まる。

元々はエメスとかいう変な生き物（魔靈とか呼ばれている）に依頼されて種から育てたものだが、当の彼女がサボテンを永久機関か何かと勘違いしていたため、そのまま主人が引き取つて育てるに至った。

いささか歪な進化を遂げたサボテンは、植物にあるまじき自由意思を備えつつあつたので、見捨てられなかつたのだ。

情に脆いというのは彼の美德であると同時に、最大の弱点もある。使い魔としてオーバースペックなアプリカは、主人の意思とは無関係に発現し、あまつさえ無断で魔力を拝借することさえ可能だ。

常識的に考えてありえないことなので、そのことを主人は誰かに相談したことはない。

魔力を織り込んだ演奏を披露し、更なる飛躍をサボテンに課したら、次は自分の番だ。

部屋の中央に吊り下がつている止まり木に舞い降りて、瞑想する。

主人は人としてどうかと思うほど無茶をやらかす人間なので、彼を支える使い魔として日々の努力は欠かせない。

殊に最近は何を血迷つたのか、死と隣り合わせの新生活を始めたりと、まったくもって油断ならない。

主人は昼頃まで寝て過ごす。

自宅警備員という、何だか悲しい響きの職に就いており、朝方まで働いているからだ。

本当なら昼を過ぎても寝ていたいらしいのだが、大抵は途中で邪魔が入るので、仕方なく起床する羽目になる。

「マウマウ～」

本日の闖入者は、姉姫とか呼ばれている変な生き物だった。

他人の部屋に入るときは扉をノックするのが習慣しながらしかった。か主人の部屋だけは適用外であるらしかった。

どうでもいいが、主人の名前を連呼すると新種の鳴き声のようである。

姉姫が扉を開けたとき、主人は既に着替えを終えてくつろいでいる。寝顔を見られるのが嫌らしく、来客をきっかけとし「影踏み」という魔力で身支度を終えるよう設定しているのだ。

至福の一度寝という美しい未来が碎け散る様は、アプリカの胸に何も言えない寂寥感をもたらす。

しかし主人はめげない。

彼が就職したのは、帝国といって、およそ最悪な評判と、それに見合うだけの実績を叩き出している職場だ。

帝国に連行される前、主人は魔術師たちの国に住んでいた。

魔力に目覚める条件からして真っ当な人生にバックドロップするようなものなので、魔術師は実にその大半が人格破綻者という素敵な人種だ。

その中にあって、例外的にまともな人格をしている主人は、それ故に身近な者に対して過保護になり易い。

特に同年代もしくは年下の異性に対してはその傾向が顕著だった。

「マウです。こんにけは」

穏やかに返した主人は、いちいち服を選ぶのが面倒くさいという理由で、白いカツターシャツを好んで着る。

会社勤めのテキる大人への憧れもあるのだろう。

まだ成長の余地はあるからと大きめのサイズで一式を揃えたため、余った袖を腕まくりする癖が付いていた。

一方、姉姫の服装が白いドレスで統一されているのは、混戦時に見分け易いようにという、きちんとした理由があった。

そのぶん彼女は、日によつてころいろと髪型を変える。

腰まで届く銀髪を、今日は背中で軽く編み込み、大きなリボンで結んでいた。

滑らかな髪は、彼女の動きに合わせて小さく跳ねる。

「遊びに来たぜっ」

特にこれと言つた用事はないらしかつた。

将来的に帝国の未来を背負つて立つ筈の姉姫は、同時に国内で随一の暇人でもある。

主人は、小さな子供にするようにちょいちょいと手招きした。

「ちょうどいいト」に来た。ナイスタイミング姉姫。そうさな、さしづめ…ザ・ナイスタイミング姉姫…てことだな

即興で一つ名を『えたのに、おそらく深い意味はない。さしづめという単語を使いたかっただけだろう。

「よろしい。わたしは今日からザ・ナイスタイミング姉姫として生きよう」

主人がおかしなことを口走つた所為で、一人の少女が今、人生という名の道を踏み外そうとしていた。

傍目から見て、この一人は、ちょっと気持ち悪いくらい仲が良い。

姉姫の方はどうか知らないが、主人は生まれて初めて出来た友人とどう接して良いか分からず、とりあえずテンションを上げてみたのだ。

慣れてくれれば落ち着くだろうとアブリカは樂觀視していたのだが、何とそのまま定着してしまっていた。

慣れとは恐ろしい。

主人の部屋には、調度品の類いが極めて少ない。正確には、少なくなった。

部屋まで詰め掛けて来た魔靈に対応している内に、少々前衛的な形状を獲得してしまったため、魔靈の長老に頼んで放棄して貰つたのだ。

でも最近、人面樹という魔靈にお願いしてテーブルセットを再び導入した。

今度は長持ちするといい。

結論から言つと三日で壊れたけど。

新品の椅子にちょこんと腰掛けた姉姫に、主人は勿体ぶつて告げた。

「まずは、これを見てくれ

「」、これは…！」

主人がテーブルの上に置いたのは、一冊の本だつた。事態を悟った姉姫が、ごくりと生唾を飲み込んだ。

そこには、じつ記されていたのだ。

『世界の名剣全集』と。

第四十五話、発端

つい昨日の出来事である。

その日、王族（小）の勅命で森へと出向き、人面樹の教えのもと隠し芸を習得してきたマウは、もつ誰にも無職とは言わせない、大手を振つて堂々とランチタイムに突入しようとしていた。

いけないことだと分かっていても、某液状生物の味の素が病み付きになつてしまつていた。

帝王国城の食堂は、和平交渉に訪れた他国の大使に歓迎の意を示せるよう、魔靈がひしめく一階の居住区ごと真ん中にスペースを設けている。

マウの部屋から、ちよづじ中庭を挟んで反対側だ。

魔靈は食事を必要としないので、扉は人間が肩を並べて通れる程度の大きさだ。

これが魔靈の通用口ともなれば、人間が組体操をしながら行進してもなお余りある開放感を満喫できる。

まるで巨人の国だと、帝王国の女王に首輪で繋がれて入城した日、マウは思ったものだ。

両腕を鎖と呪符で拘束されていなければ、もつ少し感動できたかもしない。

実に惜しいことをした。

食堂には先客が居た。

金髪碧眼の少女で、立派なこじらえの黒鎧を身に付けている。

普段はその上から羽織っている帝国紋入りのマントを、今は畳んで椅子の背に引っ掛けていたため、具足に覆われていない白い太ももと一の腕が露出していた。

彼女は「将軍」という。

その名の通り、魔靈を指揮する立場にある少女であり、国際的には元帥の位階を持つ。

生後間もなく女王に拾われ育てられたという、人間の女の子だ。

口から物を食べないとやがて餓死してしまう、帝国では少数派に属する彼女と、マウは食堂で鉢合わせことが多い。

マウが、將軍から少し離れた席に座つたのは、特別に他意あってのことではない。

彼女が読書中だったからだ。

随分と熱心な様子である。

声を掛けるのも悪いかと思い、マウはカウンターの向こう、厨房へと田を向ける。

そこでは、漆黒の戦鬼が鍋を火に掛けていた。

ここ数年で帝国の代名詞と化した、魔靈兵士、黒騎士だ。

魔靈としては珍しい、集団戦闘を得意とする彼らは、平時においては城内の細々とした雑事を任せられている。

手先の器用さは個体によってまちまちなので、調理班の他に清掃班、改装班、お庭番とチームごとに分かれて内部でローテーションを組んでいるらしい。

料理担当の黒騎士が、マウの視線に田で頷く。
食堂のメニューは日替わりランチ一択なので、わざわざ声を出して
注文する必要はない。

マウと黒騎士が田と田で通じ合っていると、おもむろに将軍が席を立つた。

「……」

彼女は本を広げたまま、無言で歩み寄ってくると、そのままマウと
同じテーブルの対面席に着席した。

「……」

マウは、厨房の黒騎士に田線で問ひ。お前の上司は何がしたいのか
と。

将軍は、黒騎士たちを召喚し使役する権能を女王から授かっている。
だから実質、黒騎士たちは彼女の保護者のようなものだつた。

蝶よ花よと将軍の成長を見守ってきた黒騎士団の一員は、すっかり
大きくなつた（……）彼女の奇行の是非を問われて、ふと材料籠か
らジャガイモを手に取つた。

人面樹から強奪してきたそれは、形といい、大きさといい、悔しい
が一級品と認めざるを得ない……つまりはマウの問い合わせを無視した。

このやうひ……マウは内心で黒騎士を罵る。

渦中に居る少女は、まるで朗読でもするかのようて本を田線の間に掲げ、まつまつとわざとらしく感嘆の声を上げる。

「ふむふむ。ほほつ……よもやこのよつな……」

「……」

マウは、三たび黒騎士に視線を振る。お前らが育てたんだから、お前らが何とかしつて、明確な意思を乗せた視線だ。

マウに背を向けた黒騎士が、肩越しにちらりと振り返り、手にした包丁で、断末魔の叫び声を上げるジャガイモを無慈悲にもすとんと両断した。

調理の工程上、先に芽を取るべきところをだ。
次はお前だと言われた気がした。

これはつまり、俺はお前を無視するが、お前が彼女を無視するのは許さないといつ意思表示に他ならなかつた。

普段は謙虚で心穏やかな黒騎士たちだが、こと将軍が絡んでくると豹変する。完全に親ばかの心境に到達していた。

マウは溜息を吐いた。そういうことなら仕方ない……

彼はまぶたを閉じて、底辺まで落ち込んだ気分を一段、一段と持ち上げる。

テキストに忠実なマウの魔力は、幻術を基とした理屈で成り立つてゐる。

使い魔が術者に寄り添い支えるよつて、魔力の支柱は理論であり、確固たる意志でなければならない。

相手の心理を衝き手玉に取る魔術師が、それなのに自分の心をえまならないのは何故だ。

マウは、微笑もつとして失敗した。

帝国で暮らし始めてもう二週間になるのに、未だに彼女とどう接するべきか決めかねていたからだ。

魔術師流の「ミコニケーションは駄目だと誓つて…

まずは無難に尋ねてみた。

「…何、読んでるの？」

すると彼女は即座に反応した。

「ん、何だ？ 気になるのか？」

由々しく述べぬける将軍に、マウは卑くも面倒くさくなつてへる。面倒くやう面倒くやうと口では言つても厄介」と率先して引き受けてしまつ面がマウである。

このときもやうだ。

彼は、見るからにそわそわし始めた将軍をして、嫌な予感が膨れ上がるのを感じた。

「まあね」と答えたのは、ほとんど条件反射のよくなものだった。

その場しのぎで返事をすると、ろくなことになりないと、十四歳のマウはそろそろ学習してもいい筈だった。

魔術師は子供の頃に学校で、自分たちこそが優良人種なのだと教えられる。

魔術師から誇りを取つたら、無法者しか残らないからだ。

魔力を持たない人間は哀れな存在だと、傲慢な魔術師たちは信じて疑わない。

それなのに、「え～どいじょうかな～」とそれまで読んでいた本を胸元に引き寄せて隠す将軍から田を離せずにいた。

人間といつ檻からは逃れられないのだと言われているようだった。

人間は誰しもが、いつか自分の中に眠る怪物と向き合わなくてはならない。

思春期というやつだ。

「いいから見してみ。ほれ

「え～…でもお…」

散々じりじりしてから、將軍は「これー」と手にした本を突き出した。

それから、差し出された本をぱらぱらと流し読みするマウに、彼女はもじもじと身をよじって、

「実はあ、この度… 剣を新調しようと思ひます！」

わざと叫びた將軍が、「わやつ」と恥ずかしそうに顔を両手で覆つた。

第四十六話、使い魔の半分は思いやつて出来ている

好きにすればいいと思つた。

それを口に出して言わなかつたのは、学生時代に培つた勘が警鐘を鳴らしていたからだ。

将軍は、いつも腰に提げている剣を新しいものと変えたいらしい。それを、何故わざわざ門外漢の自分に告げたのかが気掛かりだつた。だが、疑念を抱いてゐることを知られる訳には行かなかつた。

マウも最近になつて分かつってきたのだ。
同じ人間だからこそ、自分と彼女の仲は際限なくこじれる。
帝国でたつた一人きりの人間が脇目も振らず仲良くしていたら、魔靈たちの目にはどう映るか。

かつて将軍が悩み、そして彼女なりの答えを出した問いに、今度はマウが試される番だつた。

しかし将軍と違つて、田代の存在であるマウが悩む時間を、魔靈たちは『教えてくれない。

マウは、将軍から手渡された『世界の名剣全集』をひつくり返して、背表紙を見詰める。

「でもこれ、物語に出てくる魔剣とか聖剣の逸話を集めたものだろ。実在しなくね?」

「何を言ひ」

将軍は強氣だった。

「一ページ目を見てみる」

言われて、開いてみる。田次などとこう氣の利いたものはなかつた。代わりにあつたのが、怪談集と見紛うような挿絵と、その説明文と思しき行書体だった。

「…おお」

マウは絶句した。

襤褸を纏つた骸骨剣士が、岩山に突き刺さつた剣を抜き放つた場面が、流麗に描かれていた。

一人の人間が一つの技術に生涯を費やしたなら、それはもう努力や才能という領域すら超える。

不老長寿の魔靈が、永い年月を極限の修練に当てたなら、「技」というものの最果てに手が届くかも知れなかつた。

剣士であれば、誰もが一度はと願う存在。

それが「剣聖」…生き残つた最後のスケルトンである。

将軍は、その弟子だ。

「だからって君…前例があるからって…まさかおれに探して持つて

来いって言つたんじゃないだひつな?」

雲を遁むよひな話だつた。

將軍は…他に頼れる者が居ないことにでも言つたが、可
變らじくおねだりした。

「…だめ?」

「ばか、やるよ。こなんん、やこり歩けば転がつてゐる

だから時間をくれと。マウは言つた。

昨日の話だ。

「…ビリビリ、姉姫…」

あらかた事情を話し終えた頃、マウは両手で顔を覆つていた。
話を聞いていた姉姫も同様だった。聞くに耐えないといった様子で
ある。

しかし彼女の場合は、理由が違つた。

姉姫は思い出したのだ。

…そいいえば、彼の前で明言したことなかつた。
いや、あるあるはあるのだが、そのときマウは交信中で話を聞いてい
なかつた。

姉姫は、新品同然のテーブルに突っ伏した。まだ色濃い木々の新鮮な香りがした。

「やつべ…」

「…やうだよね、ないよね…」

「やつじやなくて…」

「?」と怪訝な顔をするマウニ、姉姫は慎重に切り出した。

「マウナ…魔剣が見付かればそれで解決だと思つてゐよな?」

「あるのー?」

「いや、ないけど」

腰を浮かせるマウニ、姉姫はぴしゃりと言つた。

そんなものはない。

金属で作られてる以上、折れない剣はないし、使い続けていれば必ず歪み、曲がる。

この文献に拠れば、魔靈の牙を研ぎ鍛えた剣をどこの王家が国宝として祀っているらしいが、魔靈の部位に権能が宿ることはないし、あつたとしてもそれは魔靈が進んでそうする以外に可能性はない。

「ないけど…」

姉姫は、それ以上を口にすることが出来なかつた。

将軍は、姉姫にとつて大切な幼馴染みだ。

ひめさま、ひめさまと追い駆けてくる人間の女の子を煩わしく感じた時期もあつたが、過去の話である。

今では立場が逆転し、たまにうざつたそつな目で見られる。

マウはどうだらうか。彼は、自分のことをどう…

そこまで考えて、姉姫は目線を伏せた。

王族は人間たちの絶望を糧に生きている。
友達になれる筈もない。

それなのに、彼は…平氣で自分の手を取り、言つのだ。

「頼むよ… 友達だろ？」

マウは、この国にやつて来て最初に優しくしてくれた姉姫に多大なる信頼を寄せている。

姉姫がマウに接触したのは、彼が魔力という異能を持った人間で、幼馴染みと妹に危害を加えるのではないかと疑つたからだ。

そのことを、姉姫はマウに打ち明けている。

何故なら、彼となら友達になるかもしないと心のどこかで期待してしまつたからだ。それを自覚してしまつたからだ。

打算で近付いたと知つても、彼はまったく気にしなかつた。

マウの経験則によれば、最初から友情を求めて近付いてくる輩は、

土壇場で「ふはははー、まんまと騙されたなー」とか言い出すからだ。

友情は生まれるものではなく育むものだと学んでいたからだ。

だから、このとき、姉姫も同じことを学んだのだ。

「友情……！」

胸を打たれた姉姫が、マウの手を握り返す。

「ではヒントを一つッ……！」

「よし来た！」

椅子を蹴つて立ち上がった姉姫が、細い腰に手を当てて、ぴんと人差し指を立てた。

裾が短いドレスから覗く、すらりとした脚線に目が行ってしまうのは、一概にマウの責任とも言い切れない。潑刺とした愛らしさが、この姫君にはあった。

彼女は、小刻みに身体を左右に揺すりながら言ひ。その度にドレスの裾がひらひらと舞い、マウの視線を誘うのだ。

「ヒント… ちやうつ … ページ四一」

この城で暮らしていると、いつか女性の脚に偏愛を抱くようになりそうで怖かった。

姉姫は、太ももの半ばまでしか隠せないワンピースと、膝上まです

つぱり覆つ長ちの靴下を好んで着用する。

ドレスの裾と靴下の境界線をどこまでも追及するのが、マウニ課された宿命であるかのようだつた。

「…難しいな…」

「え…？ や、やう？」

真剣な面持ちで沈思するマウニ、ほとんど答えを言つたつもりの姉姫は戸惑いを隠せない。

もしも運命といつものがこの世にあるのなら、真実と戦つてきたマウに微笑むのは、きっと悪夢のような現実だった。

彼の魔眼に映るのは、肉体を持たない意思たちが笑いやざめく光景だ。

目を凝らしても実体を捉えられない影に、ぽんと肩を叩かれた気がした。

「…ああ、分かつてゐよ」

その声が明らかに自分以外に向けられたものだつたから、姉姫はとつさに周囲を見渡し、止まり木の上でじつとしているアフリカに気が付いてぎょっとした。

「い、いつからそこ…」

「意識を向けなければ見えていても認識できない」

出し抜けに、マウが言った。

彼は、いつしか瞑目していた。安堵したように微笑み、

「思いやりと同じだね…」

「しつかりしるー…？」

第四十七話、図書室へ行け

とこう訳で、やつて参りました図書室。

魔剣のことなら、魔剣の持ち主に訊けばいいというのが姉姫の案である。

姉姫は、姫姉妹の教育係でもある老騎士が苦手だ。

一応は同行を済ってはみたものの、「一人は嫌だ」と懇願するマウが事態の深刻さを理解していなかっため、元より一人で行かせるつもりはなかつた。

そして今、二人はどうちらが先頭に立つて図書室へ乗り込むかで揉めている。

「じゃ、よろしくマウ」

「語尾みたいに言つても駄目。姉姫の方が親しいでしょ。おれに至つては図書室に入ったことすらないよ」

魔術師と言えば知的なイメージがあるのに、この少年はまったく本を読まない。

感性を磨く、思考力を養うという意味では読書も悪くないが、結局のところ「答え」は自分の中にはしかないから、活字を読まない魔術師だつて居る。

姉姫は頬を膨らませて、つんとそっぽを向いた。

「やだもん。わたし、あいつ苦手だもん

だが、それなりマウにだつて言い分はあるのだ。

「おれなんて、いつぺん殺され掛かってるんだからね」

「のままでは平行線だ。

交わらない道を交差させるためには、妥協しかない。
そして、勝負とは敗者が「口を曲げるための交渉術でもある。

無言で拳を掲げる姉姫に、マウが「上等」と応じる。

「じゃん、けん、ほいっ」

姉姫の勝ちは揺るがなかった。

何故ならマウは、自覚はないらしいが、チヨキを出さないからだ。

魔術師にとって、人差し指と中指を立てた「刀印」は特別な意味を持つ。

剣の儀式的側面である「破邪」を象り、転じて「封魔」…魔力の暴走を押さえ込む意志の表れだ。

だが、魔力の暴走を利用することを出来るマウにとっては、「敵を打ち碎くための刃」という認識が強いから、親しい者にそれを向けることを無意識の内に拒んでしまつ。

昔からジャンケンで勝てないマウは、貧乏くじを引いても「まあいや」で済ませるから、あまり深く考えたことはないのだ。

精々が、男はグーだろ程度だ。

彼を打ち負かすのは、いつだって差し伸べられた手であるかのようだった。

渋々と門扉の前に立つたマウが、負け惜しみを嘆いた。

「…でも本当の意味で勝ったのはおれだからね？」

「マウや、歴史を紡ぐのは勝者なのだよ」

姉姫にぐいぐいと押され、マウが「くわい…」といじけた脇で門に片手をつく。

そり、これは「門」だ。

魔靈も通れる造りの扉はジャンボにして重厚である。

だが、将軍に黒騎士が付き従うより、マウには魔力がある。

手を触れた状態からなら、彼は使い魔の助け無しでも、筋力が許す範囲で物体に干渉できる。

図書「室」と書つよりは、図書「館」と表現した方がしっくり来ると思った。

この世の全てがここにあるとでも書つように膨大な蔵書が、整然と並ぶ本棚にぎっしり詰まっている。

遥か頭上では、天井から吊り下がっている木造の羽がくくるくくると回

つていた。

部屋の中央には、大きな円卓と椅子が数脚、疎らに配置されている。かつて姉姫が学んだであろう円卓に、今はその妹が教科書を広げていた。

その傍らに立つ老骨の剣士が、片手に支え持った書籍をぱたんと閉じた。

『ちょうどいいところに来たな、魔術師……』

ザ・ナイスタイミング…マウ。

筆を置いた「剣聖」が、襤襷を翻して振り返った。

『實に。…そう、今まさに魔術師の倒し方を教えていたところだ』

「何を教えてんだ、あんた！」

第四十八話、剣と魔力

死が不可避のものだから、人は何かを遺そうとする。

後世に何かを伝えようとするのは、限りある生命の、死に対する抵抗だ。

スケルトンという魔靈は、スライムやエメスとはタイプが違う。ほんの些細なミスで、あっせりと滅びてしまつ。

だから、伝えるべきことを、伝えられる内に、伝えておきたいのだ。

スケルトンの足取りは緩やかなものだった。

踵骨が床を擦る度に、襪襪の中でカシャカシャと音が鳴る。

『まずは機先を封じる』

魔靈の『声』を、魔術師だけは聞き取れる。

より正確に言つなら、彼らの意思を言語に変換して再生できる。

だから、マウは怯えた。

マウは、この骸骨剣士に完全敗北を喫したことがある。

エメスや黒騎士とは状況が違う、負けてはならない戦いでだ。

人間と同程度の身体能力で、練り上げられた技巧に敬意を抱いてしまつたから、おそらく一生勝てない。

知らず知らずの内に後ずさり、マウを盾にこそこそと隠れていた姉

姉と軽く接触した。

「ふきやつ」と小さな悲鳴がすぐ後ろから聞こえたかひ、もう肚を決める頃合にだつた。

ぐつと眉間に皺を寄せて前へ一歩踏み出した少年に、老騎士が呵呵と下顎を打ち鳴らした。

『そうだ。いいぞ……お前には戦士の素質がある』

それが何より重要なことであるように思われて、マウは又論せずにはいられなかつたのだ。

「そんなものなくたつて、人は笑えるだる。悲しいときは泣くんだけよ」

魔靈の声が届くのは魔術師だから、突拍子もない」と言い出したマウに、このとき初めて一人が「会話」していることに姉姫が気付いた。

ひょこと肩越しに顔を覗かせると、口づねで教師が無駄のない足運びでこちらへと歩いてくるのが見えた。

椅子に腰掛けてくる小つこに目で問いつと、ふいとそっぽを向かれた。

あとで泣かそうと心に決めた。

今はマウだ。

「何だ、どした?」

「あんたほどの魔靈が、どうして…」

「…おおづ

その温度差に、姉姫はつめいた。

彼女は惱んだが、置いてきぼりは寂しいので、とりあえず参加してみることにした。

「や、やめろー！」

マウを押しのけて前に出ると、彼を庇つよつて両腕を広げて立ち塞がつたのだ。

教え子に対しても、老騎士の動きに迷いはない。

檻櫻の裾を跳ね上げて剣帯に手骨を差し込んだスケルトンが、振りかぶった得物を容赦なく姉姫に叩き付けた。

快音が鳴り響いた。…ハリセンだつた。

馬鹿弟子の一人が、これで叩かれると大人しくなるので、常備しているのだ。

イイ顔で前のめりに倒れ込む姉姫。

「無茶しやがつて…！」

その背後から飛び出したマウが、刀印を正面に突き出す。

自らの肉体を完璧に制御できる彼の瞬発力は、ほとんど人類の限界値に近い。

自分より遅い筈のスケルトンを、それなのに見失うのは何故なのかが、マウには理解できない。

ぴたりと側面に付いたスケルトンは、そのとき既に抜剣していた。

回避する暇などあろう筈もない。

だが、逆袈裟に跳ね上がった剣先が、迂闊にも踏み込んだマウを捉えても、そうでないマウなら掠りもしない。

影を踏んでスケルトンの背後に現れたマウが、至近距離から襤襪の背中に刀印を突き付ける。

しかしそれよりも早く、びんつと剣の柄を手骨で器用に弾き飛ばしたスケルトンが、その場で急激に旋回し、空中で半回転した剣を逆手に掴み取つて、マウの喉元に突き付けていた。

「何ソレ！？」

魔眼の反応が、まるで追いかない。

マウの悲鳴に、倒れ掛かっていた姉姫が踏ん張りを見せた。片腕を振り上げて、スケルトンを背後から強襲する。

「死ねえ～！」

本気すぎて怖い。

この機会に恩師を「きよ者にしてよつてこつのか、どす黒いオーラが田に見えるよつだつた。

「いや、実際に見えていた。

姉姫の腕を、黒いもやのよつなものが覆つていた。

王族は人間とそつ変わりない、非力な存在だが、魔靈を生み出し支配する「力」を持つている。

姉姫の腕を覆つた鉤爪状の「闇」は、魔靈の原型だ。

しかしそれすら、彼女を教え導いた先生には通用しない。

マウの首にぴたりと剣を添えたまま、彼はぐるりと反転し、残る片腕で力一杯ハリセンを振り下ろした。

「う…うつあんです」

頭頂部から突き抜けた衝撃に、姉姫がもんぞつ打つて倒れる。

「姉姫！　くそつ…だつたらー。」

スケルトンが転進して駆け出したとき、マウは再び影を踏んで、今度は円卓の上に片膝を付いた姿勢で出現した。

ショートレンジの差し合いで勝負にならない。

距離を置くなら、印象に残つた円卓の付近が最適で、けれど幼い妹姫の背に隠れるほど恥知らずにはなれなかつた。

その思考を、完全にトレースされていた。

先読みしてこちらへ直進してくるスケルトンに面食らつマウだが、さすがにこの距離だ。先手を取れる。

刀印を横なぎに振るったマウが、使い魔を発現した。

「アプリカ！」

マウの魔力は、対象の内面に働きかける幻術の特性を強く帯びている。

発動したなら、避ける術はない。

襲い掛かる横殴りの衝撃波を、スケルトンはひらりと跳躍して回避した。

「避け…ええ！？」

行き場を失つた衝撃波が、轟音を立てて本棚を直撃した。

「おしおきね」

惨劇を目の当たりにした妹姫が、ぽつりと呟いた。

一生懸命がんばれば、いつか報われるトマウは信じている。

第四十九話、不正停止

魔術師たちの間で人気の競技と言えば、「決闘ルール」だ。

三メートルの距離で向かい合い、互いの魔力を正面からぶつけ合つもので、ほとんど一撃で勝敗が決するから、まず使い魔を発現しての抜き撃ちになる。

そのルールにおいて、マウは負けたことがない。

だから、想像だにしなかった。

(踏めない)

逃げ道を想定できない。影を踏めないなど…

マウが最後に頼るのは、やはり使い魔だ。

目が合つた。

アプリカは、残念ですが…とでも言つよつて、ふるりと一度、頭を揺すつた。

ぎくつと硬直したマウに、襤襷を纏つた剣士が覆い被さつた。

「痛つ

田舎に背中を打ち付けて、息が詰まる。

(…一)

反射的に閉ざしたまぶたを、まことに想い即座に見開くも、瞬き一つで、もう趨勢は決していた。

円卓の上で大の字に倒れたマウを、虚ろな眼窩が見下ろしていた。皿を向けなくとも、喉元に冷たい気配を感じたから、ああ負けたのだと腑に落ちた。

彼が本気だったなら自分は死んでいたと、やや遅れて理解が降ってきて、ひどく恐ろしくなった。

声が震えたのは、その所為だ。

「なんで…」

『儂が魔力を使つた。お前を通してな』

「な…に？」

理解できないと呟つよつて眉をしかめる少年に、老教師は我が意を得たりと頷いた。

『それだ。お前は正規の教育を受けていないのか？』

彼は剣先を引き戻すと、手元できりきりと魔剣を回して、剣帯の鞘にぱちんと納めた。

もう片方の手に持つハリセンはそのままに、空いた片手をマウへと

差し出す。掴まれとこうことだらけ。

比喩表現でも何でもなく、皮も肉も削ぎ落した手骨は、驚くほど細い。

不思議と暖かみのある中手骨に指先が触れて、無性に恥ずかしくなってきた。

「いや……」

助け起こされたマウが言い淀んだのは、学歴に自信がなかつたからだ。

彼が十四歳といつ若さで郷を飛び出したのは、進路の関係で一悶着あつた為である。

進学の見込みはなかつた。お世辞にも優等生とは言えない成績だったからだ。

落ち零れて流されて…今や「いつまでテーブルの上に留まるの」と十七歳児に叱られるところまで来てしまつた。

素直にすみませんと頭を下げるのは年上のプライドが許せなかつたから、卓上に散乱したノートを盗み見て、「ちゃんと勉強してるんだ。偉いね」と頭を撫でてあげた。

魔靈の姫は一人姉妹で、何食わぬ顔でやつて来て妹の隣に座つた方が「姉姫」、席ごとにじり寄つてくる姉をガン無視している方が「妹姫」だ。

姉妹と言つだけあつて似通つた面差しをしている。

数年も経てば、「同一人物です」と言つても通用するだらう。それほど似ている。

ただし、白いドレスに身を包んでいる姉姫に対して、その妹が着ているのは真紅のドレスだ。

まさしくお姫様然とした丈の長い衣装で、ふわりと裾が広がったスカートと、肩口を装つ華やかなフリルが特徴的だった。

一の腕から指先にかけてを、こちらは純白の、長手袋で覆っている。姉姫と同じくらいの長さの、やはり銀色の髪を、姉姫は彼女らの母親を真似ておるじている。

姉姫は、魔靈の王たる母を強く尊敬している。

だからと云つて、マウが妹姫を女王と同一視することはない。

女王は、はつきり言つて救いようがない。

だが、心優しく可憐な姫姉妹には明るい未来が似合つと感じていた。

「座るの？ 座らないの？」

たとえ、獲物をいたぶるような目で見られたとしてもだ。

「…座ります。すみません」

身分が違うから謝つてもいいのだと、また一つ誇りを失つた。

姉姫とは逆側の椅子を無言でばんばんと叩く妹姫に、マウは忠犬よろしく従つた。

彼が着席したのを見届けて、スケルトンが筆を取る。

嫌がらせのつもりだらうか、椅子の上で身を乗り出して、頬と頬が触れそうなほど間近で妹を凝視している馬鹿弟子一号を、まずはハリセンで叩いておいた。

第五十話、スケルトンの分かりやすい魔力講座

魔力を使うという行為は、扉を開くことと似ていて、老教師は言った。

「魔術師」とは、その扉を開くことのできる人間だ。

つまり、魔術師でなくとも、扉さえ開いていれば潜ることはできる。

その現象を、気が遠くなるほど歳月を戦場で過ごした騎士は「影踏みの瑕」と書き記した。

姉姉妹には彼の声が届かないから、ひょっとしたら自分にとつて致命的かもしれないことを、マウ本人の口から伝える羽目になる。

しかし妹姫が興味を示したのは、まったく別のことだった。

「…先生、自分のこと儂なんて言うんだ…」

筆記では、いつも『私』と書いているのだ。

恥じらう歳でもない、スケルトンは、しかし気まずそうに講義を続ける。

『…お前は以前に他人を連れて影を踏んだだろ？だから、当然知っているものとばかり思っていた』

一人称を避けて話しているのが分かるから、マウも微妙に気まずくなる。

「その……瑕つてやつ？ 僕…おれは魔術師の学校で魔力の使い方を習つたけど聞いたことないによねマウです」

引きずられてマウの一人称もぶれてしまい、早口で誤魔化そうとしたから、拳句に語尾まで怪しくなって、最後に自己紹介を付け加える始末だった。

姉姫が顔を背けて必死に笑いをこらえているのが見えたから、二人の間の空気がますます微妙になる。

『他者を同伴する影踏みは、その者の同意を得られる状況が必要だ。分かるか？ 私を攻撃したことで、お前は逃げ道を失ったのだ』

「……」めん、全然分からない

一人称を変えたことに気付いたら負けだと分かっていたのに、気持ちとは裏腹に研ぎ澄まされた五感が鈍感になることを許してくれない。

スケルトンは、根気強く説明する。

『お前に反撃を許す状況を、先に私が作ったということだ。無意識にしろ、お前がその状況を受け入れ攻勢に回った時点で、私がお前の魔力に干渉した』

つまり、攻性の魔力を放つことでマウの「現在」が確定し、それにより影踏みの下地が崩れたということだ。

だが、本人の意向を無視して進学クラスに放り込まれたマウは、授業について行けずに落ち零れたのだ。

スケルトンの語る難解な理屈を聞いてすぐ理解できるようなら、今頃マウは魔術師の里で高校受験に向けて勤しんでいる筈だった。

「な、なんとなく分かるような…？」

何故？ どうして？ と問うたびに、この少年の魔術師としての歪さが浮き彫りになるかのようだったから、スケルトンの口調からも自信が失われていく。

『そもそも、あの場面で空間指定の魔力を使ったのは何故だ？ 対象指定だったなら、最低でも私を足止めできた筈だぞ』

マウは、答えられなかつた。同様に考え彼が編み上げた呪縛の術を、補強し上書きしたのはアプリカだったからだ。

空間指定の物理干渉など、マウには逆立ちしてもできない。つまり、アプリカが紡ぎ出す理論の多くは、マウの理解を越えていられるのだ。

そして、そのことを、マウは誰にも打ち明けるつもりはない。魔術師なら誰しもが欲しがる情報だと分かつてゐるからだ。家族を守りたいという強い欲求が、マウにはあつた。

魔術師をよく知る老騎士だからこそ、使い魔が術を書き換えたのとは決して思い付かない。

『…これは言つまでもないかもしけんが、剣士である私が対等の条件で魔術師に勝とうとするなら、影踏みの瑕を突くしかない。お前が圧倒されたと思つなら、それは私の思惑に嵌つたということだ』

お前もそつしろと書外に語り、老教師は筆を置いた。

もしも高等魔術師が帝国を襲撃したなら、現時点のマウでは太刀打ちできないと思つたからだ。

彼が魔術師の里を出奔したのは個人的な事情だろうと察していたもの、歴史の奔流は私情を容易く呑み込み押し流してしまう。

時代が動いたのだと、老騎士は感じていた。

第五十一話 帝国今昔

会話にしきものをする一人は、一切口を合わせようとしない。

何やら真面目な話をしているようだが、けらりと先生を見たマウが、はつとして目線を伏せたから、もう何だか…

「…それで、あなた何をしに来たの？」

妹姫が尋ねると、マウはきょとんとした。

「え、なんで？」

「…？ 先生に負けるためにわざわざここに来たの？ 違ひでしょ？」

マウは、目的を忘れていた。

生命の危機に瀕したためか、それとも忘れた方が楽になれると思つて、いたからか、おそらく両方だ。

ただ、失われつつある年上の威儀を大切にしたかった。そのことだけは確かだ。

「負けるためつて…そんなのやつてみなくちゃ分からないよ」

「でも負けたわ」

広義で言えば、魔靈とて女王の子には違いない。

それでも姉姫と妹姫が「王族」と呼ばれ、特別視されるのは、彼女

たちが正しく女王の形質を受け継いでいるからだ。

妹姫は、酷薄に笑つた。

「あなた、ほんの少しでも先生に勝てると思っていたの？ 謄めなければ、きっと、いざれ？ 人間らしい物の考え方をするのね…マウ」

魔術師なのに…と囁いた、あどけない少女が、すっと腕を伸ばして、マウの前髪を指先で軽く払つた。

マウは、黒髪黒目の中年だ。

片方だけならともかく、両方とも混じり氣なしの黒色といつのは、実は珍しい。

頬まで降りてきた妹姫のか細い指を、マウは壊れ物でも扱うような手付きで柔らかく包んだ。

「思つてるよ。今でも思つてる。諦めなければ、きっといざれ…」

人間は魔靈と比べて短命だから、自分が何を残せるのかと問い合わせる。

生物の究極形が不老不死であることは間違いない。

「だから」人間は死ぬ。

種として全体で見るなら、年老いた細胞が次世代にあとを託すのは、生物が到達した一つの結論だからだ。

だからマウは、おそらく人間よりずっと長く生きる」の姉妹に何かを残してあげたかった。

人生に意味があると言つなら、魔術師の役割は、何かを「伝える」とだと信じたかつたのだ。

ああ、と姉妹は思つた。

だから母様は、この人間を連れてきたのだと分かつた。

魔術師だから、それだけではない。

まるで黒い蜜のようだと思った。どうりとしていて、それも火のようだ熱い。

剥がれ落ちた希望を絶望と言つなら、上辺だけ信念で塗り固められた「怒り」を何と言つて表現すればいい?

飢えた狼が生肉を目の前にしておあづけを命じられたような目で見詰められて、マウは居心地悪そうに身じろぎした。

「ちょっと、何で目で人を見るの…」

実のところ妹よりも「力」に乏しい姉妹は、それ故に「食欲」に対しても鈍感でいられた。

「おちび、おちび? おい、ちびすけ。いや、正気に戻りなさい。よだれが出てるぞ、はしたない」

姉妹は、妹を「ちび」と呼ぶ。

畏れ多くも帝国の第一王女を、そんなふうに呼ぶのは、世界広じといえど姉だけだ。

「マウを凝視していた姉姫が、姉にたしなめられて、はつと我に返った。屈辱の極みだった。

「よだれなんて出てません！　わたしは姉様より力があるんだから、こうなるの仕方ないでしょ！」

妹に力で劣ると、事実は、姉姫のプライドを著しく損なう問題だった。

「お姉ちゃんに對して何て言い草だ！　生意氣なやつめ！」

不毛な争いが始まった。

お互いの頬を引っ張り合つ王女らに、その教育係は不干涉を貫くと決めているようだった。

止めなくていいの？　とマウが目で問えば、《好きにさせとおけ》と氣のない様子で鞄から剣を取り出し、こなれた所作で手入れを始める。

丸めた教科書とノートでばしばしと攻防戦を繰り広げる姉妹をよそに、マウが尋ねる。

「大事にしてるんだな。それ、絶対に折れないんだろ？」

剣聖スケルトンの振るう剣が、鉄をも切り裂く魔剣であるという伝説は、大陸で暮らす人々の間でよく知られた逸話だった。

『否定はしない。そういうときもあつた』

しかし返ってきたのは、含みのある言葉だった。

長く生きていれば、色々とある。もちろん後ろ暗いことも。

取り立てて話すつもりはなかつたが、…円卓に頬杖を突いて、ぼんやりといちじらの手元を眺めている魔術師を見て、少し気が変わつた。

『…そうだな、お前には話しておいた方がいいかもしれん』

「ん？」

『儂は、幾度か…魔術師たちと共に闘したことがある。卑しくも女王陛下に牙を剥いた魔獸どもを斬るためにだ』

魔靈は、生体を基礎とする「魔獸型」と、精神を基軸とする「魔靈型」の一通りに分かれれる。

もつと言えば、魔靈を生体に封じめたのが魔獸だ。

靈体が剥き出しの魔靈は、強大な權能を振るえる反面、不安定で、自滅しやすい。

その点、靈体を封入された魔獸は、安定していて力こそ弱いが、ほとんど弱点らしい弱点を持たない。

スケルトンは、典型的な魔獸型だ。

つまり、同胞を討つたと、彼は言つのだ。

第五十一話、吐露

魔靈は、生みの親である女王に対して必ずしも忠実ではない。

魔靈同士の仲間意識はあるから、大抵の魔靈は帝国に立てるのを選びが、一方で傲慢な女王に反発を覚えるものもいる。

特に魔獸だ。

彼らは靈体を外殻で保護されているため、權能の盛衰に左右されにくい。

それはつまり、帝国の庇護を必要としないということだ。

「ほり、おちび！ お姉ちゃんに謝りなさい！ お姉ちゃん大好きでも可！」

だから、姉姫に馬乗りになつた姉姫が愛情を強要するように、女王の食欲を満たすために戦う生活に嫌気が差して離反する魔靈だつて居る。

「本当のこと言つただけでしょ！ やつやつてむきになるといふが子供なんです！」

しかし妹姫が姉姫の要求を跳ね除けるより、戦わない魔靈に価値はないと女王は言つ。

魔靈の權能は女王の「力」を変換したものだから、無駄な消費を嫌つた女王は、配下の魔靈に討伐を命じることになる。

両腕を突つ張つて姉姫を押し退けようとする姉姫のよつこ、魔靈同士の争いが起つるのだ。

「わたしのこと子供扱いする癖に、姉様は自分勝手です！　いい加減、お風呂について来るのやめてって言つてるでしょ！」

しゃせん、女王にとつて魔靈は道具に過ぎないのだ。
そこには、膝を立てて体重を掛けないようにしている姉姫のような慈悲はない。

「お前は何も分かつてない。將軍なんて十五歳になつても未だにお風呂でよく転ぶんだぞ！」

「あの人、何もないところでも転ぶでしょ！」

將軍がお風呂でよく転ぶよつこ、スケルトンの脅力には先天的な限界がある。

鋼より強靭な魔靈が相手だった場合、第三者の協力が必要る。

「知つたような口を…。じゃあお前、將軍が最後におねしょしたのいつか知つて『アプリカ！』

さすがに同情を禁じ得なかつたマウが、使い魔の力を借りて姉姫の身柄を拘束した。

「はわつーーー？」

ふわりと浮き上がる姉姫。

重力から解き放たれ、とつさにドレスの裾を抑えた彼女が、空中でくるりと回る。

「ふおお…」

マウが指を手前に引くと、それに応じて、姉姫の身体が不自然な等速運動で寄ってきた。

(…正常に作用する。さっきのは…アプリカ…)

マウは、魔靈と話すときでも言葉を声に出して言いつ。読心術ではないからだ。

しかし相手が使い魔なら話は別だつた。

ちうじと見ると、肩とまつていてるアプリカが、前脚に持つ『』でちよこひょこと首をつついてきた。

スケルトンが言いつて、確かに呪縛なら命中だつたひつ。マウもそう考えた。

だが、アプリカの考えは異なる。

彼には、術者のマウですか見えないものが見える。

あの場面で貪欲に勝ちを拾おうとしたなら、だからこそ物理干渉に賭けるべきだったのだ。

胸を張る使い魔に、マウは肩を竦めた。

アプリカは、いつ見えて好戦的なのだ。誰に似たんだか…

手の届く範囲まで近付いてきた姉姫を受け止めて、隣の椅子に降ろしてあげる。

「いじめじつと言つておるべきだわ」

「田上の人人が話してゐんだから、ちやんと聞きなさい」

姉姫が唇を尖らせる。

「だつておちびが……」

「言ひ訳しないの」

「ひしゃつと『アマウ』、しかしスケルトンが言つた。

『もういい。お前が老人の昔話より、パンチラに興味があるのはよく分かつた』

「……もうこいつとあるよな、おれ……」

あらうと直覺があるマウだった。

第五十二話、誤算

要約すると、スケルトンが使っている剣は、何の変哲もない鉄剣らしい。

同じ部隊にいた戦友の形見なので愛着はあるが、酷使すれば曲がるし、欠ける。そのたびに研ぎ直しているのだといふ。ときには魔術師に依頼することもあつたとか。

その縁で魔術師と浅からぬ付き合いがあつたスケルトンは、剣だけではどうにもならない魔獣を相手取つた際に魔力を剣に宿してもらつたことがある。

怪しくも冴え渡つた剣は、魔獣の強靭な外殻さえも打ち碎いたのだといふ。

だが、形あるものはいずれ滅びるよう、永続する魔力などない。

ただの鉄に戻つた剣は、それでも今なお、伝説の名剣として語り継がれている…

「…え、じゃあ將軍の剣はどうすんの？」

言つてみて、用件を思い出したマウの血の気が引いた。

剣の切れ味を上げる魔力と聞いても、まるでぴんと来なかつたからだ。

マウの魔力を乗り物に例えるなら、このままならない現実と接続するサー・キットは、錯覚や幻聴をベースとした暗示催眠術といふ…

辻褄合わせ」だ。

魔力の定義があやふやだから、それを操る魔術師たちは、一定の法則と方向性を定めて、「だからこうなる」と自分を納得させねばならない。

マウもそうだが、大半の魔術師が魔力を幻術という理屈で制御するのは、それが一番簡単で、通りがよく、しかも使い勝手がいいからだ。

だからと言つて万能という訳では、もちろんない。

一例として…幻術式の魔力は、こと物体に対して、しばしば無力に陥る。

木石は物を考えないからだ。

マウは、魔力に幻術という方程式を当て嵌めることに慣れすぎていて、その考え方から抜け出せないし、「別の方程式」にシフトするという発想 자체がない。

複数の回路基盤を持ち、自在に切り替えることができる一握りの天才を、「高等魔術師」と呼ぶのだ。

マウは、直に手で触れて工程を省略する術と、指定の空間に斥力を発生させる術が、結果は同じ物体干渉でも、実はまったくの別物であることをすら知らない。

聞いても理解できないだろう。

仮に理解できたとしてもだ、自分に嘘は吐けない。

だから彼には、魔剣を作れと言われても無理なのだ。

将軍は、スケルトンの弟子の一人だ。

正直、あまり関わり合いになりたくないが、師弟でも何でもないマウにばかり負担を掛けた訳にも行くまい。

『…あやつが、どうした?』

「将軍が…あやつがどうしたと老師が嫌々ながら興味を示してあります」

「…こと近寄ってきた妹姫を抱き上げて、姉姫とは反対側の席上に安置しながら、マウは姉姫に報告した。

この姉妹を隣り合わせると話が進まないと学習したからだ。

姉姫が妹姫に構うのは、妹の将来に期待しているからだ。手が届く範囲にいななら、殊更に構つたりはしない。

姉姫は、円卓を挟んで向かい側の席に腰掛けている老教師を見据えると、腕を組んで鼻を鳴らした。

「新しい剣が欲しいんだと。今度は魔剣が欲しいとか言い出した

妹姫が、か細い吐息を吐いた。

「…まだそんなこと言つてゐるの、あの子…」

おねだりされてホイホイと安請け合つたマウが、将軍を庇つて言う。

「まあまあ。やつぱり將軍くらいになると、普通の剣じゃ満足できないんだよ。おれとしては、魔劍とまでは行かなくとも、名のある鍛治職人に一振り打つてもうおつかなと」

魔剣が実在しないなら、その旨を告げればきっと彼女は分かつてくれるべく、このときのマウは考えていた。

「……」

妹姫が、信じられないといつぱりマウを見ていた。

將軍くらいになると？ 普通の剣じゃ満足できない？ そう言った今、彼は何と言った？

妹姫は、マウに気付かれないと、そつと姉に配せした。

妹の視線に気付いた姉姫が、然りと頷く。

マウは、勘違いしている。

將軍は、剣に関しては素人だ。

残念な運動神経をしているので、そこら辺の村娘にも負けるだろう。

だが、当の本人である將軍には自覚はない。いや、あることはあるのだろうが、剣聖の直弟子にして黒騎士の宿主でもある彼女は、頭の中で自らを美化しがちなのだ。

『…』

スケルトンが、烈火の如く姉姫を睨んでいた。
謀られたことに気が付いたからだ。

將軍は、帝国で育てられた人間の少女だ。

人間である以上、魔靈と同等の個体戦力は望むべくもなかつたから、
幼い頃から戦術指揮官としての英才教育を施された。

現存する魔靈で、曲がりなりにも部隊長を務めた経験があるのは、
スケルトンだけだ。

だから、もしも彼がその気だつたら、將軍を一端の剣士に仕立て
あげることも可能な筈だつた。

そつしなかつたのは何故か？ 剣一つで守れるものなどたかが知れ
ていると思つたからだ。

事実、將軍は黒騎士団団長として数多の戦果を挙げ、今や全軍を率
いる元帥職にまで登り詰めた。

だからスケルトンは、彼女に「お前に剣の才能はない。よく転ぶし」ときつぱり告げたことはない。

妙な自信もはつたりの一部として有効だつたから、すっかり機を逃
してしまつていた。

その点に関して、スケルトンは責任を感じていた。

ここに至つて、知らぬ存ぜぬは通らないだろう。

… もう、共犯者は多いに越したことはない…

腕まくりをしながら、別に興味はないけど……とこいつよつて四線を逸らして、マウが言った。

「で、どうなの？　ああ、これは飽くまでも参考までに訊くんだけど」

と前置きしてから、

「彼女、老師と試合して三本中一本は取れるとかそんな感じ？　腕とかめりちや細いもんな、やっぱ軽くて細身な剣の方がいいんかね」

マウが知る限り、「剣」と呼ばれるものは三種類。

ブロードソード、ロングソード、ショートソードの三つだ。

ブロードソードは厚身の剣で、重量はあるものの、一撃の殺傷力が高い。黒騎士たちの制式武装がこれだ。

ロングソードは、刀身が長く、扱いに熟練を要する。騎士が用いるのは専らこれだ。スケルトンも愛用している。

ショートソードは、小剣とも呼ばれるもので、ややこしいが短剣とは違う。刃渡りは五十センチほど、屋内でも振り回せるし、扱いやすい。

将軍が帶剣しているのは、師と同じ長剣だ。

禍々しいデザインになっていて、見た目だけでうなづか、よほど魔劍らしい。

将軍の腕前を尋ねるマウだが…

『……』

彼女の師は、気まずそつに目線を逸らした。

実際に気まずかった。

馬鹿弟子一号とその妹が、揃つて期待の眼差しを寄せていたからだ。もしも女王が一人いたなら、確実に共倒れになるから、その娘たちは能力あるいは人格的に差異が出るよう調整されている。

最初に姉姫が生まれて…

しかし女王の「期待」を満たしたのは、むしろ人間である筈の将軍だったから、第二子の姉姫が生まれた。

母親が自分に求めている役割が、他の魔靈たちが言うように、女王の後継者「ではない」と姉姫は気付いていたから、こんなにもひねくれてしまつた。

その点、馬鹿弟子一号は、一号と違つて素直だ。

性格的にちょっとアレな部分はあるものの、大きくなつても昔と変わらず師匠、師匠と慕つてくれている。

それでもスケルトンが迷いを捨て切れないのは、最終的に自分が従うのは女王だと決めているからだ。

だから、せめてそれまでは…という想いをビリしても捨てられない。

軽い気持ちで訊いたのに、一向に返事がないから、マウは戸惑うしかない。

「…あら？ エー…と」

困ったときに使い魔に頼るのは、彼の悪い癖だつた。

さつと視線を振ると、アブリカは素早く身を翻して、バイオリンの調律を始めた。

「ちょっと、今、完全に目が合つたよね？」

使い魔の補助を交えた魔力は、確かに強力だが、術者への反動もまた大きい。

だから、ときとして心を鬼にすることだってある。

マウは使い魔に甘いので、見捨てられても決して怒らない。

それに、今は他にも頼れる友人がいる。

だが、姉姫からしてみれば、将軍は大きな妹のような存在だ。縋るような目で見られても、真相を打ち明けるのは陰口を叩くようで嫌だつた。

戦略的な見地ではどうなのか？ 帝国魔術師が、帝国軍元帥のへつぽこぶりを知ることは有益か否か…

姉姫が師に期待しているのは、そこだ。

マウは年齢の割に大人びたところがある少年だが、秘密を守れるタ
イプではない。感情に走りやすく、余計な気を回して失敗するタイ
プだ。

帝国では周知の事実と化していることだが……敵国に知れ渡るのだけ
は避けたい。

しかし戦場では何が起こるか分からぬ。

仮にマウが出兵に参加するなら、「知らない」では済まされないだ
けで。

その辺り、おもにマウの扱いに関してが曖昧なまま、母が里帰り…
というのは「ついで」なのだろうが……してしまったので、判断がで
きない。

師は、どう答えるのか…

実際に戦場でマウと矛を交えたことがある老騎士は、重々しく口を開いた。

『……あれはどうに留まる?』

「え? んー……サイレン、将軍がどこに居るか分かる?」

マウは、使い魔の助け無くして遠距離の探査ができる。
距離に応じて、不確定要素が増えるからだ。

姉姉妹を通してではなく直接サイレンに話しかけたのは、彼女たち

が持つて いる通話用の携帯端末を、自分も欲しがつて いるところをやかなアピールだつた。

それなのにマウの視線が食い付いたのは姉姫のふくよかな胸元だから、彼の願いが通じることはない。

同じ端末を持つて いるのに一顧だにされなかつた七歳児が、はつとして椅子をぴょんと飛び降りると、姉に駆け寄り、つま先立ちで姉の耳元に口を寄せた。

ひそひそと耳打ちされて、姉姫が「ほほん……」と皿を細めた。

「…なるほど、女なら誰でも…」

「よし分かつた。まずはエメスだ。やつせばど」に面する?」

マウの尊厳が失われるとしたら、その経緯には、いくつも少數のお喋り魔靈が絡んで いるに違ひなかつた。

「マウのえつり

姉姫が身の危険を感じたように両腕で胸を隠したから、人間性を疑われたようではショックだつた。

それなのに、隠れた膨らみを残念に思つ気持ちを捨て切れない。

この怒りをどこへ向ければいい? …決まつて いる。エメスだ。

「ハーレム……」

いずれは決着を付けねばなるまい……？

第五十五話、マウ包围網

「影姫」と、將軍は人間たちによく呼ばれる。

今、人面樹たちの眼前で騎士の形狀を獲得した魔靈兵士たちの正体が、將軍の影だからだ。

霧の魔靈が渴きを嫌い、嵐の魔靈が冷水を嫌うように、魔靈型の眷族には、必ず弱点がある。

黒騎士は数年前に生まれたばかりの幼い魔靈で、それはつまり最新型ということでもある。

池に小石を投げても水面の月は揺れさざめくだけだから、黒騎士は倒されても時間を置けば復活できる。

彼らの鎧と剣は、現実に干渉するために実体を得た「影」の一形態に過ぎないからだ。

生まれて間もない黒騎士たちは、他の魔靈のように、自らの權能を理解し発展させることができない。

一律、騎士の形状で統一されているのは、そのためだ。

物語の中で、姫君を護るのは騎士と相場が決まっている。

だから、つまり、黒騎士たちの致命的な弱点とは、本体である將軍なのだ。

彼女の命が散つたとき、黒騎士たちもまた同様に滅ぶのである。

無数の黒騎士を顕現した將軍が、深く長く呼吸し、剣帯に差し込まれた剣を、しゃんと洗練された動作で抜き放つた。

剣の至る所に施された、煌びやかな宝玉が、木漏れ日を浴びて燐々と輝いた。

『まつ』と書かれた看板を首から提げた案山子に、距離を隔てて剣先を向ける。

案山子の足元には、『小』と明記されたクマのぬいぐるみが置いてある。

王城を囲う樹海の奥深くで、將軍は、最後に大きく息を吸い、号令を飛ばした。

「進めーーっ！」

「ちよっ…何やつてんの、この人…」

茂みを搔き分けて現場に到着したマウガ、呆然としていた。

將軍の号令に従い、じゅきつと一緒に剣を構えた黒騎士たちが、足下の草を踏み締めて突進した。

『まつ』の末路は哀れなものだった。

四方八方から串刺しにされ、その衝撃に耐え切れなかつた四肢が千切れ飛んだ。

「お、おれー！」

マウには、自分と同じ名前の案山子に感情移入できる程度の想像力はあった。

「何してんの！？ ホントに向してんの！ もうやだ！ この子、怖い！」

半狂乱になつて喚くマウに、将軍が何故か照れた様子で内股をもじりと擦り合わせた。

「…ばか、言わせるな。お前が姫様を誘拐して森に逃げ込んだ状況をシミュレーションしていたんだ」

女の子の秘密を打ち明けるような態度で殺害計画を告げられて、マウはどうしてもいいか分からぬ。

将軍は城内で暮らす同族の先輩だから、きっとマウは、彼女の常識に見習ひべき筈だった。

だが、作戦やら武装やらの話で羞恥心を覚えるよつになつたり、今後の人生に差し支えがありそつて躊躇いを覚えた。

黒騎士が大事そうに抱えて持つてきたクマのぬいぐるみに関しては言及したくなかったから、恥じらう将軍にマウは簡潔に用件を述べる。

「中」や「大」ではないのかと。何故『小』なのかといつ問い合わせ込みすぎだと…意識しすぎだと自覚していたからだ。

「将軍、あの…「も、もつ見付かったのか…？」

午前中に雨が降ったのか、微かに湿った地面を立てたつま先で掘り返しながら、將軍が先に尋ねてきた。

魔剣のことだ。

黒騎士たちの目を気にしているらしく、恨めしげに上田遣いで見られていた。

よほど緊張感溢れる演習だつたらしく、呼吸は浅く、薄らと紅潮した肌が汗ばんでいた。

マウは、もしかして自分は彼女にとても恥ずかしいことを強要しているのではないかと不安になってきた。

黒騎士たちの注目がマウに集中していたからだ。

「あ、いや……」

とても言いく出せる雰囲気ではなかつた。

「いや、いいんだ！ 別に急ぎではないから、自分のペースで構わない……楽しみにしてる」

言い淀むマウに、慌てて首を振った將軍が、最後にそう付け加えて穏やかに微笑んだから、今、どんどん後戻りができなくなっていく。

わきわきと根を蠢かせて這い寄ってきた人面樹たちが聴衆に加わり、証人が更に増えた。

勝手に発現したアブリカにペチペチと頬を叩かれて、マウは「分かつてると頷いた。

無理なものは無理だ。

「がんばります」

自らの限界を誰よりも知っている薔の少年が、しかし境界線の一歩先を目指すのはいつものパターンだった。

具体的なプランを訊かれても困るといつも、むしろ自分が訊きたいくじこだったから、マウは早口で用件を告げる。

「あのね、今日は伝言に来たんだ。スケルトンが庭園に来て欲しいつて

伝言なら、サイレンに頼めば済む話だった。

魔剣は諦めて欲しいと言つて来た薔のマウが、実際にやつたのは、己の首を絞めただけだ。

不甲斐ない自分を認めたくなかったから、責任の所在地を求めて、愚痴が口を衝いて出た。

「…呼び付けるくじこなら、おれと一緒に来れば良かつたのに」

「とんでもない！」

将軍がわたわだと片手を振った。

「せうか、お前には言つてなかつたな。スケルトン殿は、わたしの師だ。こから出向くのが筋だろ？」

「でも、君は元帥なんだろ？ 立場で言えば君の方が上なんじゃないのか？」

マウの素朴な疑問に、将軍は少し悩んだ。

彼の会話のペースは、将軍のとつて少し早い。

彼女が遅いという訳ではなく、

魔力の応酬の合間に信念をぶつけ合ひのがマウの日常だったから、自分の気持ちを言葉で表すのに長けているのだ。

その話術を用いれば、将軍を幾らでも丸め込むことだつて出来る筈なのに、相手が女の子というだけで、マウはこんなにも弱くなる。魔術師の社会では男女平等を是とするが、そんなものは絵空事に過ぎなかつた。

一息挟んで、将軍がたどたどしく言ひ。

「……いや、でも、やつぱり、師弟の関係は別だ。もちろん戦場では……そうだ。わたしの指揮で動いて頂くが、平時でまでとなると、逆に申し訳なくて……その、困る」

「まあ、それが普通かな。おれにも魔力の師匠みたいな人は居たんだけどね、これが偏屈な人で」

マウが自分のこと話をるのは珍しい。

先に歩き始めた彼に、興味を惹かれて、その背中に将軍が声を掛け る。

やや早足であとを追いながら、

「やはり魔術師といつのは師弟制度なのか？」

彼女は、この魔術師の少年に心を許しつつあった。
魔靈たちに優しいからだ。

魔靈の存在を認めてくれる同士が一人居るだけで、こんなにも心強
い。

将軍は、やはり人間だ。

幼い頃から一緒に姉妹だった姉姫が、将軍に、あなたは人間であると、そ
の自覚を捨てるなど常に言い聞かせていたからだ。

そうでもしないと、将軍は自分が人間であるという、その一点を心
に抱え、卑屈に育つかもしれないと考えたからだ。

あるいは、影に巢食う魔靈に同調して人間であることを辞めてしま
つていたかもしれない…

一方：

「人間」という定義にどれだけの価値がある？

マウはそう考へている。

「ん…皆が皆つて訳じゃないね。おれの場合は、師匠つて言うより、
下宿先の家主つて感じかな。おれ、あんまり才能がなかつたんだ」

言外に「だから見捨てられた」と言つも、それは方便だった。

誰もがマウを劣等生だと認識し始めて、その人物だけはマウに強い期待を抱いていた。

「野望」と言い換えてもいい。

もしも使い魔の能力が独走しているだけならば、マウの並外れた魔力精度はどこから来るのか？ と考えた高等魔術師が居るのだ。

それは使い魔の力を制限するためではないのか？ と。

だからマウは、使い魔を守るために里を出た。
彼にとって、アプリカは家族だからだ。

帝国に流れ着いたのは、まったくの偶然だろうが、ここなら周囲を自分の戦いに巻き込むことはない。

魔術師は総じて自分勝手だが、魔靈と敵対する道を選ぶほど愚かではない。

帝国で暮らしてよく分かった。

魔靈と人間では視点が違う。

確かに魔力は魔靈に対しても有効だが、魔術師では決して魔靈には勝てない。

そういうふうに仕組まれている。

魔靈を倒せるのは人間だけだ。

この世界の異分子が、「女王」と「魔力」だからだ。

魔力に目覚めた人間は、世界から見ると「人間」の定義を外れるらしい。

マウは、帝国に来てから、ずっと女の子のことばかり考えている。

例えば、不老長寿である筈の女王が跡継ぎを生み出したのは何故なのか？ とか、人間の赤子を拾ったのは何のために？ とかだ。

マウは、女王が嫌いだ。

だから、彼女の目的は何なのかと考える。

ぴょんと軽く跳ねて隣に並んだ将軍が、身体を屈めて顔を覗き込んできた。

「やっぱりセクハラで追い出されたのか？」

「え、違うし。やっぱりつてどうしたことなの……」

ぞろぞろと着いてきた黒騎士たちが、順番に将軍の影へと沈む傍ら、いちいちこぢりに疑惑の視線を寄越していく。

マウは、もうこの国は一度滅ぶべきなんじゃないかと思つ。

第五十六話、遭遇

魔靈たちは不老長寿だから、欲望が希薄だ。

女王さえ存命であれば、それだけで生命活動に支障を来さないのでから、そもそも何かを欲しがる必要がない。

だから、たいていの魔靈は何かしらの生き甲斐を求めて生きる。

今、掛け声と共に二階の窓から身を投げ出したエメスは、帝国の尖兵として名の知れた存在だ。

「魔術師！」

「…エメス！」

彼女はマウの中でブラックリスト入りしていたから、魔眼が自動的に反応して、「金髪碧眼の少女」の姿を捉えた。

使い魔を見たいと黙々とこねて視覚を開発された将軍は、活性化した魔眼のイメージを田で見ることができた。

将軍の肌の露出について熱く語っていた（よりによつて本人に）変態魔術師の片目の中の先に独立した眼球が発現し、ぎょろりと動いたから、隣でマウの熱弁を聞き流していた将軍は、「うわ、キモつ」と率直な感想を述べた。

内心傷付きながらも、マウはとにかく身体を屈めて、地面に指でラインを引いた。

帝王城の一階と言えば、民家の三階か四階に相当する。人間が飛び降りれば無事では済まない高さだ。

直立した姿勢で軽やかに着地した少女は、当然ながら人間ではなかった。

「乾き」を司る魔靈…それが彼女だ。

魔靈の中でも変身能力に秀でるエメスは、「人形」という本質を持つ故に、人間に化けるのが上手い。

將軍と瓜二つの容姿をした少女が、猛獸のよつに犬歯を剥いて囁いた。

「おい、魔術師。おい。それは何のつもりだ？　何度も言つてんだろ。人間、お前じやあたしには勝てねーよ」

土壤に指を突き立てたまま、マウが軽口を叩いて応じる。

「妹姫に偉そなこと言つちまつたからな。退くに退けないのぞ」

だが、その声には多分の強がりと、微かな自信が同居していた。

エメスは、乾きの象徴たる「砂」を自在に操れる強力な魔靈だ。

人間は空を飛べないから、大地に干渉できる魔靈に対しても脅威を感じる。

逃げ場がないからだ。

だからマウは、彼女に勝とうとするなら、彼女のテリトリーに踏み

込むしかないと考えた。

あえて、こちらからだ。

確かに、とエメスは思った。

確かに…この少年には戦士の素質がある。

何を企んでいるのかは知らないが、自らの命を対価に差し出せる人間はそういうない。

しかし女王を認めようとしない彼が気に入らなかつたから、エメスは小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「教えてやる、魔術師。お前がてめーらの力を魔力と呼ぶように、あたしら魔靈が生まれつき持つ力を…権能と呼ぶ」

その変身能力で容易く人間を欺き、またあらゆる物理攻撃を無効化できるエメスは、純粹な戦闘能力で言えばトップクラスの魔靈だ。

その彼女が言う。

「権能ってのは、使いうやうで幾らでも応用が利く。権能の発展つてやつだ。いいか…黒騎士やら人面樹どもと一緒にたにすんな。あたしの権能は、ほとんど完成してる」

そう言って彼女は、羽織っていたマントを脱ぎ、片手に掲げ持つ。すると、マントが端から見る間に風化し、最後には手元に一握りの砂だけが残つた。

「ぐつ…」

気圧されるものを感じて、マウがつめこた。

白田の下に晒された彼女の白い太ももが、マウの視線を囚えて離さなかつたからだ。

そして何より、

「……」

……そして何より、隣で二人の遭り取り眺めている将軍の視線が痛かつた。

「……先に行つていいか?」

彼女は、尊敬する師に呼ばれて参上する途中なのだ。エメスとマウの、下らない争いに付き合つていい暇はない。

言つが早いが、さつさと歩き始めた将軍に、ぱっと身を翻したエメスが纏わり付く。

「え、何だよ……ノリが悪いじゃん、将軍〜」

エメスは若い魔靈にありがちな、大の人間嫌いだが、唯一、将軍だけは認めている。

この元帥がひとたび指揮を執れば、帝国軍は常勝無敗だからだ。

女王は最低限の指示は出すものの、自軍の損害をまったく気にしないし、そもそも勝敗に興味がない。

戦争とは、魔靈の權能を誇示するための場だという認識が強いからだ。

女王を批判する訳ではないが、矢面に立つ魔靈の立場からすると、優秀な指揮官と言えるのは、やはりこの人間の少女だ。

エメスが、好んで將軍の姿を取るのは、彼女なりの友好の証である。

將軍とて、別にエメスを嫌っている訳ではない。

自分の容姿を写し取られるのは面白くないが、だからといって女王の真似をしろなどとは口が裂けても言えないからだ。

「師匠に呼ばれてるんだ。一緒に来るか？」

「げえ、あたし、あいつ苦手なんだよね……」

そう口では言いつつも、Hメスはひょこひょこと將軍についていく。

將軍を姫姉妹の騎士とするなら、魔獸の生き残りである骸骨剣士は女王の騎士だ。

人間の中から「英雄」と呼ばれる類いの人物が登場するたびに、Hメスは先駆けして帝国の尖兵として立ち塞がる。

だが、負ける。

どういう訳か負ける。

まるで運命を敵に回したかのように、友情とか何かそんなのが奇跡を起こして負ける。ひどい話だ。

その点、あの骸骨剣士は、一定の戦果を上げるのだ。
女王に忠誠を誓っているエメスが、面白くあらう筈もない。

「ぬき声を上げるエメスに、将軍の片眉が跳ねた。

「…お前、もうちょっとお淑やかになれないか？　わたしの姿でそ
うこう…なんだ…わたしの品性が疑われるだろ」

「…あれ？」

言われて、エメスがきょとんとした。
今更ながら気付いたのだ。

「あなた、なんで戦場モードの口調なの？」

彼女は、これでもかと言ひほど空氣を読まない。

折り悪く追いついてきたマウが、せっかく気付かないふりをしてい
たのに台無しになりそうだったから、素早く使い魔を発現して天氣
の話を振った。

「いい天気だね、アプリカ」

肩の上で、アプリカがうんうんと同意した。

ちよつと森を抜けたところでエメスとエンカウントしたから、まる
で後を追つようになに頭上までやって来たどんよりとした雲がよく見え
た。

かりりりとマウを盗み見した将軍が、精一杯の虚勢を張った。

「ふ、深い意味はない…」

第五十七話、枝葉

帝國王城の中央庭園は、魔靈たちの憩いの場として人気を集めのスポートだ。

日中なら、庭師（黒い）と木々（人面）の熱い戦いが観戦できるだけでなく、つい先日、実在を確認された魔術師が暇そうにしているのを目にする機会も多い。

今日に限つて言えば、噴水の縁に腰掛けて足をぶらぶらしている美姫らを幸運にも鑑賞できるだらう。

その傍りで、風景に溶け込むように佇んでいる骸骨剣士が、將軍の師だ。

「しつしょー！」

ぶんぶんと手を振つて駆け寄つてくる直弟子に、スケルトンは内心で目を細めた。

姫姉妹を教え子に持つスケルトンだが、その半生を剣に捧げた彼の技を正しく継ぐ者がいるとすれば、それは將軍に他ならなかつた。

目指す目的が勝利なら、手段は剣でなくともいい。

部隊の運用、戦場の機微を徹底的に叩き込んだ白漫の弟子だ。

その彼女に刃を向けねばならないのは、哀しいことだ。

すっと片腕を上げて、ぴたりと剣尖を伸ばした老師に、將軍は駆け寄る足を止めた。

「歸匠?」

時代の変節を感じていたから、スケルトンはそう遠くない未来で、自分が朽ち果てるだらうことを意識している。

伝えるべきことを、伝えるべきものに伝えておきたかった。

彼の上半身が、ぐらりとよろめいて見えた次の瞬間、スケルトンの剣先が將軍の細い首にぴたりと添えられていた。

彼女を行った筈のマウがこの場に居なかつたから、將軍の無知を装う態度が演技であることは分かつていた。

だから、「將軍」の口角が無機質に吊り上がり、三日月に歪んでも、スケルトンは驚かなかつた。

「ほんとにちば

眼前でわざと風化した少女の正体は、將軍に化けたエメスだつた。

では本当の將軍はどうなつる?

いや、そうではない。

エメスと分離した細い腕が、まっすぐ伸びていた。

日の光に対し垂直に腕を伸ばせば、腕の内側は陰になる。

将軍の身体から剥離した「影」は、彼女自身がそう在りたいと願うように、騎士の形質を獲得してスケルトンを取り囲んだ。

魔靈は「本質」に縛られるのが普通だ。

如何に変身能力を有していようと、「心」の具現たる彼らは「自分」からかけ離れた姿にはなれない。

だが、じく一部の魔靈は、自らの権能を発展させていく過程で、そうした制限を超えていく。

ひとつ例を挙げるなら、「人間に化ける」という現象を分解し、部位ごとに変身したり、更に細かく、指を長くしたりと試みているうちに、やがて「人間」という枠組みから外れていく…
権能の「発展」と呼ばれる現象が、これだ。

完成した権能は、その属性において、およそ人間が想像しうる範疇、全てを再現できると考えていい。

例えば、自身を薄皮一枚とし、将軍をコーティングすることだって出来る。

それがエメスという魔靈だ。

「……」

その彼女が、今、羞恥に悶えて地に伏した。

帝国軍が誇る元帥は、戦闘時と平常時のギャップが激しい少女だ。

戦場では「貴様に明日はない」とか言っていた口で、次の日には「今日はピクニックだぴょん」とか平気で言つたりする。

その場で突つ伏してひたすら地面に視線を固定しているHメスの苦惱を、将軍が察することはない。

「Hメス！？」

「…どうじてこうなった…」

「立て！ 来るぞ！」

木漏れ日が枝葉の影を落とすように、黒騎士の召喚は瞬く間に成立する。

「光の速さ」という概念が、この時代には無いから、将軍は「影姫」と呼ばれている。

この世の生物が光を情報の媒体として選び、進化した以上、それを上回るもののが、たとえ実在したとしてもだ、認識はできない。

それは、人間の心を加工されて生まれた魔靈とて例外ではない。

如何にスケルトンが技を極めよつとも、将軍の召喚速度を超えるスピードで剣を振り回すことはできない。

だからこの怖るべき剣士は、召喚主たる将軍の意識の間隙を縫つて反撃するのだ。

わずかひと振りで、召喚された黒騎士たちの手元から剣が弾き飛ば

される。

技術といつものに限界はないかのようだつた。
独特的の歩法に翻弄されて、黒騎士たちの剣は空を切る。

まるで魔法のようだ。

将軍の隣で、立ち直つたエメスが歯噛みした。

（あたしを頼れよ、将軍。剣聖が何だつてんだ…あたしなら勝てる。
利用できるものは何でも利用する。そうだろ。あんたはそれでいい
…）

人間は弱い。ちょっとした怪我で死ぬし、そうでなくとも百年も経
てば寿命だ。

だからエメスは、将軍を見ていると心配でそわそわする。
無意識のうちに、一步踏み出したのはそのためだ。

それを、将軍が見咎めた。

「エメス」

エメスではスケルトンには勝てない。

将軍はそう考へてゐる。

負けるとは言わないが、エメスの攻撃が、あの骸骨剣士を捉えるこ
とはないだらう。

だから、将軍はエメスを自分の傍らに配置しておきたかった。

彼女の変身能力は、強力な武器であるが、それだけではなく、むし
ろ強力な武器「にもなる」点を、将軍は高く評価してゐる。

おそらく最上位の権能であると言え。

元帥の声に、エメスは渋々と弓を下げる。

それでも自分は負けないとthoughtいたから、懲罰を晴らす相手が必要だった。

「魔術師！ 何やつてんだ、さつさと撃て！ あたしが仕留める」

わざわざバラしてどうある、と思つたマウは、距離を隔てた庭園の片隅で、樹上に隠れ潜んでいた。

將軍の指示だ。

近距離戦ではスケルトンには勝てない。

勝機があるとすれば、遠距離からの狙撃しかない。

枝と枝に足を掛けて器用に立ち、庭園の中央付近に刀印を向けているマウを、人面樹たちが興味深そうに見ていた。

肩には、発現したアプリカが既にとまっている。

マウが、同世代の魔術師と戦つてきて今日まで無敗でいられたのは、幾つかの切り札を隠し持つているからだ。

使い魔の無音発現は、そのひとつだった。

身内に甘い彼だから、一度心を許した相手には、自分にとっての生命線であるそれらを躊躇いなく晒してしまう。

何度か騙されて痛い目に遭っているのに、それでも人と人は手を取り合えると心のどこかで信じているからだ。

だが、アプリカの考えは異なっていた。

術者の分身である筈の使い魔が優先するのは、主人の身の安全だ。まったく無関係な戦いで手の内を晒してどうするのか。

だからアプリカは、使い魔なしでも遠距離狙撃できるよう、マウの魔眼を「改造」した。

より早く、より遠く。

「魔法」という、ひとつ究極に到達したアプリカには、それが可能だった。

より広く、より深く。

マウの魔眼が、彼自身にさえ理解できない理屈で拡張した。剥き出しの眼球を、その隣に新しく浮かび上がった歯車と滑車が連動し、マウの視界を深く鋭く押し広げた。

魔眼の力スタマイズは、高等魔術師にとってさして驚くべきことではない。

「定跡」と呼ばれる魔力の多くは、極めれば大きな役割を果たすからだ。

自らの魔眼に起こった変化に、マウは気が付かなかつた。

ただ、いつもより遠隔視が鮮明で、スケルトンの動きが手に取るようにならなかった。

まるで、実際にあの場にいるかのようだった。
調子がいいと思った。

彼は、エメスの求めに応じるように魔力の引き金を絞った。

「作戦は、こうだ」

旅の同行にエメスを加えた一向は、城内に足を踏み入れる前にミーティングをしていた。

中庭に集まるよう告げたスケルトンの真意は、マウには分からなかつたが、師が弟子に求めるものは一つしかなかつたから、将軍が取るべき行動は決まつていた。

黒騎士という権能を（しかも自分から望んで）与えられておきながら、将軍は模擬戦等で師に勝てた試しがない。

黒騎士が弱い訳ではない。

将軍の指揮が拙いという訳でもない。

スケルトンの技量が、それらを凌駕しているのだ。

将軍は、スケルトンに戦術のイロハを叩き込まれ、如何なる戦況にも即応できるよう鍛え上げられている。

だから、トップクラスの魔靈であるエメスと共に加え、お伽話の住人であつた魔術師が傘下に降つた、この機を逃す道理はなかつた。

両膝を揃えてしゃがみ込んだ将軍が、地面に描いた庭園の簡単な見取り図にぽんぽんと小石を配置していく。

ついでに、さも真剣な面持ちで話を聞いているような風情で「ち

らの膝小僧を注視している工口魔術師に、如何に自分が優秀な指揮官であるかを知らしめるチャンスだつた。

他者に厳しく自分に甘い將軍は、自己顯示欲の強い少女だ。何だか、普段、微妙に上から目線というか、子供扱いされているような気がしているから尚更だった。

何者かに呼ばれて振り返り、虚空に向けて「なら、僕の傍に面う」と独り、こちた哀れな男の袖を引っ張り、座らせる。

將軍は念押しした。

「いいか。まず、わたしとエメスで足止めをする」

言われて、マウは幾許か思案したものの、やがて頷いた。

「…そつだな。おれとエメス、あるいは君とじやあ、連携は難しい
マウは認めた。心情的には自分が足止めを買って出たことひうだつ

魔眼で追えないといつゝとは、意識の間隙を突かれているといつゝだ。

とれほとの死線を潜れば、あの境地は遁することができるのか、それすら想像の範疇を超えていた。

小石の配置にさつと目を通し、微かに眉をしかめたマウに、将軍はほんとひとつ咳払いした。

「おまえの手の話になると、マウは食に付きがいい。趣味が合つただとしたら、少し照れくさかつた。

引っ張られて伸びた袖を腕まくりをするマウ。彼女は続ける。

「それ、癖か？見苦しいからやめろ。…で、続ける。師匠は、たぶん奇襲してくる。正面からかどうかは分からない。だから…」

将軍は、マウの癖をあまり好ましく思っていない。

身の丈に合つ、といふ言葉があるように、装具には氣を遣うべきだと考えているからだ。？

言われて初めて気付いたところ、マウの視線が宙を泳ぎ、行き場をなくした手が空を搔いた。

そして結局、腕まくりした。

将軍はかちんと来た。

「馬鹿にしてるのか？やめろと言つたぞ」

「こきなり言われても、すぐには治せないよ。据わりが悪くて」

「ぶかぶかの服を着てるからだ。お前、わたしと大して背が違わないだろ」

「これから伸びるよ。まだ十五なんだ」

マウは、さり気なくサバを読んだ。

将軍の年齢を聞き知っていたから、年下だとバレたら何を言われるか分からないと思ったのだ。

マツモト、マツモト、マツモト、マツモト、マツモト

しかし將軍は、彼の年齢に頓着しなかつた。

育つた環境が違うのだ。当然、価値観も異なる。

「ここや、伸びない。お前は、伸びのままだ。そつこいつ顔をしてる」

「顔！？」

容貌と身長の関連性について、彼女は一家言を持つているらしかった。

マウはショックを受けた。

のちに成人男性の平均程度までは成長するのだが、この遣り取りがなければ、平均を多少は上回ったかもしれない。

۷

傍らで一人の問答を眺めていたエメスの視線が痛かったから、将軍は慌てて居住まいを正した。

「と、とにかく… 奇襲に対応できるよう、エメスはわたしのカバーに回つてもらひ。師匠は、気配を読むことに長けているから、蛇の陣で行くぞ」

「何だそれ」

尋ねたのは、マウではなくエメスだった。

将軍は、その場の気分で氣に入つた戦術に命名しておきながら、あとで勝手に名称を変更するから、本人にしか分からぬのだ。

何となくユアンスは云わるもの、念のためにエメスは尋ねた。

将軍は、傷付いたような表情をした。

「…知らないのか？」

「…いや、分かるけど。あたしが、あんたに引っ付くやつでしょ。変装ましたのに、雨が降ってきて、はわわってなつたやつ」

「…つむ。綿密な調査と情報操作が、通り雨ひとつでおじゃんだ。あれは…そう、はわわだったな…」

はわわだったらしい。

マウは、上空を覆いつつある分厚い雲を眺めた。

同じ惨劇が繰り返されなければいいが。
それだけが気掛かりだつた。

「…一人が足止めしてゐる間に、おれは遠距離から狙撃すればいいのか？」

将軍は何故か得意げだった。

「そう。そこが肝だ。師匠の剣技は桁が違う。だが、やはり剣士だ。剣士が嫌がることは、師匠にとつても厄介なんだ。

当たり前のことだから、まったくの不意打ちにはならないだろうが、

基本は押されておきたい

将軍の戦術は、基本に忠実だ。

人間で言つといひの、歴史に名を残すタイプの軍師ではない。

だが、魔靈という、人間よりも強大な兵士を運用する上では、複雑にして緻密な奸計よりも、余計な支枝を削ぎ落とした策謀が有効なのかも知れなかつた。

「期待しているが、じゅうぶん

そう言つて、将軍は締め括つた。

最後に「術士」と言おうとして噛んだが、辛うじて言い切つたから、体裁は保てた筈だと信じたかつた。

マウは氣付いていないようなので、ほつとした。

だが、もちろんマウは氣付いていたし、名前で呼ぶのに抵抗があるのなら、何故「魔術師」ではないのかと、わざわざ言いにくいけ呼び名を使わなくてよいこと思つたものの、口吐はせずに領いた。

代わりに、指を三本立てて突き出した。

「…？」

それが何を意味するのか分からなかつたから、将軍はとうあえずマウの中指を指先でつまんだ。

「…こや、やうじゅなくて…」

マウは言い淀んだが、今回に関して言えば察しるという方が無理だ。彼は反省した。

長年の習性で、マウは女の子に対して甘い面がある。悪い言い方をすれば、子供扱いをしてしまいうきらいがあった。

その彼が、将軍に対して謎掛けのような、はつきりしない態度をとった。

心の中でアブリカが、「彼女を信頼するな」と主張していたからだ。

マウは、魔術師の社会において異端の存在だった。

魔力の優劣を絶対的な価値観とする魔術師たちに對して懷疑的だつたし、使い魔を道具としてしか扱わない者には嫌悪感すら抱いていた。

自分を正当化することに慣れきった魔術師は、己の非を決して認めようとはしないから、マウが自分を曲げない限りは必然的に衝突が起ころ。

その頃、マウは進学クラスに在籍していた。

進学クラスと言つだけあり、クラスメイトたちは高等魔術師の卵ばかりだ。

彼女たちは将来を約束された人間だから、マウを変なやつだとは認めて、彼と決定的な対立を迎えることはなかつた。

だからマウは、同年代の魔術師と戦つても負けたことがない。

彼の使い魔が、やはり飛び抜けた存在だつたからだ。

近距離戦では誰も敵わないとすら噂されていたから、彼を利用しようとする者も居た。

そのたびにアプリカは、主人に信じるなど警告した。

言つてみればエリートの一員で、しかも使い魔の助けなしでは平凡な素質しか持たないマウを妬む者は多い。

望んで苦境に立とうとする人間は少ない。

アプリカの言つことは、いつだって正しかった。

それなのにマウは、アプリカの提言を無視し続けた。

魔力の優劣に拘ることは虚しいことだと、支え合つて生きることは恥ではないと叫び続けていた、当の本人だったからだ。

今、このときもやうだ。

将軍の指先の体温に絆されて、といつのはアプリカの推測だが、マウは密かに打ち明けた。

「三度だ」

「…？」

マウの指をつまんだまま、将軍は首を傾げた。

それに合わせて、幼女のような癖つ毛を残す金髪が、肩を滑つてさ

らりと揺れた。

マウは頷いた。何に対しても納得したのか、はたまた同意したのかは彼自身にしか分からぬだろう。

しかし使い魔は術者の分身だから、きっとアプリカには筒抜けだった。

確固とした信念を持ち、人間の外面よりも内面を重視している筈の主人は、それなのに異性に甘いし、女の子のちょっとした仕草を見て癒されるのだ。

「使い魔は、術者の魔力を限界まで解放する」

マウは繰り返した。

「限界までだ。

だから、使い魔を発現したばかりの…訓練を十分に積んでいない魔術師は、最大威力の魔力を一度しか撃てない」

逆に言えば、一定以上の訓練を積んだ魔術師なら、自分自身で制御できる魔力の割合が増えるため、一度は撃てる。

「魔力は体力を食う。短期間で、魔術師が連発できる最大魔力は一度が限度なんだ」

マウにしても、条件は同じ筈だった。

どれだけ魔力を精密にコントロールできても、人間が不随意筋を自分の意思で止めることができないように、制御し得る総量には限界がある。

だが、何事にも例外はある。

マウだ。

「何故なのか？　おれにも分からぬ。おれより優秀な魔術師は幾らでもいる。
でも、おれだけなんだよな、

…三度撃てるの」

第五十九話、魔獣

狭い所が好い。

適度な湿気が必要だ。

暗所であれば尚好い。

しかし、偶には日の光を浴びねば立ち行かぬ。氣分も滅入るし、日干しがてら庭へ出てみた。

おや、と思った。

普段、庭で暴れている影どもの姿が見えない。元帥に召喚でもされたか。

まだ幼年といふこともあり、彼女の権能には謎が多い。

魔靈の専売である権能を人間が持つなど、当然だが、かつて無かつたことだからだ。

一時の安寧を得た面樹どもが、寄り集まつて情報の共有に励んでいた。

彼ら人面樹は、結果的にではあるが、黒騎士の雛形になつた魔靈だ。

「根」とは別に「本体」が存在し、本体を叩かれないと、根が枯れることはない。

木々を変質せしめ分身と成すため、古きより王城を守護してきた樹海は、今や人面樹どもの巣窟と化していた。

枝で土壤を削つて下達の文書を遣り取りするので、覗き込んで確認することもできた。

魔術師が、元帥のために魔剣をひと振り鍛えて贈るのだといつ。

好事だと思った。

今、元帥が用いている剣は、軽いが切れないと聞いたことがある。

それでは自衛には心許ないと常々思つていた。

結構なことだ。

しかし、まだ赤子だった彼女を一人で歩けるまで育てたのは、面樹どもある。

どうしつらうかと尋ねると、面樹どもは、影どもが無能だから剣が必要になつたのではないかと迂遠な表現で伝えてきた。

：此奴らは、一向に仲違いを正そとしない。

同じ魔靈なのだから仲良くしようと何度か言い渡したのだが、諂いの原因が元帥の親権とあって、なかなか解消の兆しが見えないので。

魔術師も骨を折ってくれてこるようだが……

同意を求めてくる面樹どもを振り払い、重い身体をずりすりと引き摺つて進む。

庭の中央には優美な「じらえの噴水が設けてあり、一帯は樹々が刈

り取られていいため、田町たりが良いのだ。

支道を抜けた先、石畳が敷き詰められた広場では、姫君らが珍しく姉妹揃つて、噴水の縁に腰掛けていた。

何せこの巨体だ、こちらに気付いた姉姫が、長い睫毛を瞬かせて振り向き、口許を綻ばせると、軽やかに片手を振った。

以前は仏頂面ばかりだった少女が、美しく成長したものだと感慨深くなる。

その傍らで、姉に遅れて佩ひつと会釈した妹姫は、やはり昔の姉姫と似ていると氣付くも、当時の彼女ほど鬱屈したものは感じない。

姉姫が、守つているからだ。

自分もそう在りたいと思つ。

魔靈たちは、自分にとつて弟妹のようなものだ。

あまり近付いて傷付けでもしたらと思つとぞつとするから、少し離れた位置で身体を休める。

姉姫は察しが良い。

「もう少し寄つたら？　あなた、溶かさないことだって出来るんだから」

つまり、溶かすことも出来る。それが厭なのだ。

お構いなくと手文字で伝えると、姉姫は仕方ないといった様子で苦

笑し、けれど直ぐに何かを思い付いて悪戯のよつに笑つた。

「おやつさんは、骨つ子と仲が良かつたよね」

スケルトンのことだ。

仲が良い…と言つより、戦友だ。

女王陛下に仕えて、長い…本当に長い歳月を共に過ごしてきた。

先に逝つてしまつた戦友たちのことを想つ。

人間が憎いと思つたこともある。

だが、憎しみは際限の無い迷路のよんなものだ。
死に行く者たちの気持ちを考えるなら、敵は尊敬できた方がいい。
そう考えるようになった。

姉姫が、田を細めて手招きをする。

「そこからじや見えないよ。おいで」

王族は、魔靈を生み出し支配する力を持つている。

彼女たちの声には、魔靈を縛り従わせる、抗い難い靈力がある。

渋々と姉姫の脇を陣取ると、妹姫が小さな手を伸ばして自分に触れようとしてきた。

びびつた。

しかし、寸での所で姉姫が制止してくれたので事なきを得る。

「まあ待て、妹よ。おやつさんは接触恐怖症なんだ。人の嫌がることをやつてはいかん」

が、姉姫は強情だった。

「そんなこと言つてたら、いつまで経つても治らないでしょ。大人なんだから、自分の身体のことくらい、自分できちんととしないと駄目ですよ」

しかも正論だつた。姉に似て利発な少女である。

ぐうの音も出ない。

結局の所、自身を完璧に制御できたなら何ら問題無い筈だからだ。

しかし姉姫には、また別の見解があるようだつた。

「絶対といつことは、この世にはない。どうしてもと言つながら、マウに頼みなさい」

「どうして?」と首を傾げる妹に、姉姫は告げた。

「絶対に許可しないからだ」

……。

広場の向奥では、盟友のスケルトンが黒騎士たちに剣の手解きをしているようだつた。

「元帥も居るのだろうか？」そこからでは見えないが、黒騎士たちの陣形から、そつと窺える。

「隠れて見えないけど、エメスもいるよ」

じつと見詰めていると、姉姫が補足してくれた。

「エメスで自分を覆つて、初撃をいなしてから、至近距離から黒騎士で包囲襲撃。エメスは待機。

包围したのは、たぶんマウの狙撃を待つてるからかな。だとすれば、マウは圏で本命はエメス…」

戦術のことは、よく分からない。
自分が考へるべきことではないからだ。

進むも退くも億劫なこの身では、下手な考え方むに似たりだ。

だから、姉姫の予見に反論するのは自分ではなく、その妹で良い。

「でも姉様。マウは、近くからないと力を發揮できなくなつてよ

その声が、どこか誇らしげであった。
きっと姉に褒めて貰いたいのだろう。

しかし妹の背伸びは、姉にとつて面白くないのが、この姉妹の悲劇である。

「…といつのは見せ掛けで、実は近くに潜んでいて魔力で姿を消してゐんだ。これ、わたしの発案ね。おちびは他のこしなさい」

実に大人げない対応である。

褒めて貰えなかつた姉姫は、頬を膨らませて、そっぽを向いた。

「 知らないなら知らないって言えばいいのに…」

幼稚な挑発に、姉姫はしたり顔で鼻を鳴らした。

「お姉ちゃんは、何でも知っています」

元来、姉姫は賢い少女である。
…が、あちらで剣を振つてゐる友人によれば、それも虚栄である
といふ。

魔靈たちの総意は、友人に味方してゐる。

元帥と手を組んで、奇行に花を咲かせるからだ。

つまり元帥も、姫姉妹で言うなら、それも失礼な話だろうが、姉寄
りの人間だと思われてゐる。
悲しいが、それは事実だ。

元帥は、あまり物事を深く考へないし、ときどき魂消るような失策
をやらかす。

この国に魔術師が来て安堵してゐるのは、自分だけではない筈だ。

魔術師というのは便利な生き物で、大抵の厄介事を片付けてくれる。

特に今代の魔術師は、言われずとも勝手にてきぱきと働くので、非
常に重宝されていた。

友人も…喜んでいた。

「魔術師」が帝国の軍門に降つた…これが何を意味するのか…果たして人間たちは気付いているのだろうか?

女王陛下は…どう、だらうか…

第六十話、対峙

最大魔力の解放は二度までだ。

「固有結界」もしくは「固定魔法」と呼ばれる例外を除けば、これは絶対と言つてい。

だから、もしもアフリカが諾々と従つていたなら、マウの勝ちだつた。

百戦錬磨だからこそ、スケルトンは無意識の中に「ありえない選択肢」を除外する。

だが、例えば遠くから、高精度の魔力を撃つというなら、これは予想の圈内だ。

五感を歪めて、遠くのものを近いと誤認する…そうした技の持ち主と、かつて敵対したことがあるからだ。

もしかしたら…程度の考えだつた。

何しろマウは、スケルトンの目の前で、既に一度、使い魔を使っている。

幾許か体力が回復していたとしても、不得手な遠距離狙撃を達成するだけの余裕は無いと踏んでいた。

手足に重い枷を嵌められたような感覚に愕然としたのは、それが完全な不意打ちだったから…だけではない。

現代の魔術師に、本来あつてはならない技術だからだ。

これは、かつて存在した、「魔術師ではない人間が」「魔術師を倒すため」の技だ。

目まぐるしく動いていた師が、途端に失速したのを、将軍は見逃さなかつた。

だが、事前の打ち合わせ通りであつたにも拘らず、彼女は呆気に取られて逡巡した。

戦う術をスケルトンに教わつて育つた将軍は、師の強さを心のどこかで神聖視していた。

本当に魔力が通じるとは思つていなかつたのだ。

ぞくりとした。

「今日の勝利」と「明日の敗北」は紙一重だった。

将軍は魔靈に育てられた人間だから、「人間」という定義に誰よりも拘る。

マウは人間だ。

人間だから…

いつか、帝国に牙を剥くかもしれない。

一度は結論を出した筈なのに、目の前で進行する現実は、何度も問い合わせてくる。試されているかのようだ。

それでも信じようと思つたから、反駁を瞬時に押しやることができ
た。

戦局は常に流動的だ。

一度は取りこぼした勝機を、一度目も拾うことだつてある。

もちろん、逆もある。

スケルトンは、歴戦の剣士だ。

その戦歴は凄まじく、光弾を全包围に音速で撃ち出す魔獸にさえ打ち勝つことがある。

討伐を命じたのは、女王だ。

大した権能を持たない筈の量産型の魔獸が、戯れに作った「最強を目指して設計された魔獸」を打ち倒したから、どこまでやれるのかと興味を抱いた。

負ければそれまでだと、ただ剣を上手く振れるだけの魔靈など不要であると考えたのだ。

… 積み上げたブロックを何本まで抜いても倒さずにいられるだらうか？

そんなスリルを愉しんだ。

… 同胞が一人帰らなくなり、また一人、また一人…

積み木のように

倒れしていく

女王が憎くないのかと…とある魔獣は言った。

憎くないと答えた。

それが騎士だと。

そして今、スケルトンと呼ばれる魔靈の最後の生き残りが、魔力を斬るのを、マウは見た。

(あるのか！？ そんな魔力の捉え方が…)

あるのだ。

先刻、スケルトンは魔力を「扉」に例えた。

一方通行ではない…

マウの魔力は幻術を基にしている。

だから、もしもスケルトンが魔力を「斬れる」という意思に基づき行動し、それをマウが否定しきれなかつたなら、マウの魔力は斬れる。

「影踏みの瑕」と原理は同じだ。

だが、それすら、マウは半信半疑だった。

無意識の領域を完全にコントロールできる生物など、本来存在しな

いからだ。

だが、これではつきりした。

自らの肉体を骨格や筋力ではなく、イメージで支える魔靈には、それが出来るのだ。

人間と同じように考えていては勝てない。

乱暴な言い方になるし、正確でもないだろうが、こつ考えるべきだつた。

魔靈は「女王の魔力」だ。

だから、魔力の存在を肯定する魔術師では、魔靈に決定的なダメージを与えない。

魔術、という単語が頭の奥に浮かんだ。

使い魔は術者の分身だから、内心で遣り取りしていると、気付かない内に自分との対話になる。

魔術師が、自分たちの力を「魔力」と呼ぶのは、「力」と「術」を分離して考えなければならないからだ。

だが、「魔力」を制御する理屈を「魔術」とは呼ばない。

何故なら、「魔術」と呼ぶべきものが、他にあるからではないのか?

後戻りできない道を歩んでいるような感覚があつた。

実際問題として、やたらと「よく見え」る。

魔力を断ち切ったスケルトンが、一拍遅れて殺到した黒騎士たちを剣一つでいなしているのも、片膝を付いた將軍が地面に手を当てていて太ももが、いや少し離れたところで何故か悔しそうな顔をしている姉姫のスカートが際どい角度を、

「くつ…！」

マウは、眉をしかめて片目をまぶたの上から押さえた。

彼は今更ながら気付いたのだ。

調子がいい感じの話ではない。

…絶好調だった。

「普段と変わりない様子」の魔眼が、自分の意思に反してぎょぎょぎょと動く。

エメスはともかくとして、妹姫に反応を示したなら、これから先どうやって生きていけばいいのか分からなくなる気がした。

無言で見詰めてくる人面樹たちに責められているような気がして、訳もなく申し訳なくなる。

魔眼を仕舞えばいいと思い付いたのに、その思い付きの方を大切に仕舞い込んでしまったから、尚更だった。

だから、今は戦うべきだった。

将軍のことが心配だつたから、影を踏めば彼女の傍らに立てる。

「マウは、影踏みをほぼ完璧に制御できる。」

戦っている女の子がいて、その近くに自分が居ないといつ選択肢は、マウではない。

彼の参戦に、将軍は渋い顔をした。

傍田にも、マウの魔眼が気持ち悪いことになつていたからだ。

(歯車が回転し、滑車が上下するたびに) 魔眼が血走り、瞳孔が収縮を繰り返している。

視線を忙しく左右に往復しているのもマイナスポイントに挙げられるだろう。

「…お前、それ仕舞え」

「そんなこと言つてるのは珍しいだろ!」

マウは一喝した。今の魔眼なら、スケルトンの動きを追えると思つ付いたからだ。

将軍の隣にはエメスが控えており、その本性が巨大な泥人形だとしても、今は将軍の姿を模しているから、ひと粒で一度おいしかった。

意識せずとも、姉姫の隣にスライムが佇んでいるのが見えた。

厚い雲が頭上で渦を巻いている。

雨でも降らうものなら、もう立ち上がりかもしれないかも知れないと、自分の中の冷静な部分が告げた。

白い衣装は水に濡れると透けるからだ。

マウは、鋭く舌打ちした。

「…時間との戦いになるな

「…ん?」

意味が分からなかつたので、将軍は首を傾げた。

マウは、スケルトンの動きをじっと観察している。

背後で、エメスが将軍と同じ仕草で首を傾げていた。
お前らは何が目的なんだと叫びたかった。

「突破されるのも時間の問題だろ。何か策でも?」

「ある」

将軍は断言した。

だが、マウは適当に誤魔化しだけなので、直前の自分の台詞さえ記憶からこぼれ落ちて、即答されても何のことか分からなかつた。

「…え?」

「…ん?」

とつをに振り返ると、将軍とエメスが揃って同じタイミングで首を傾げた。

マウは、まぶたの上から汗を揉みほぐした。

「…こや、うん…続けて」

もつ話を合わせるしかなかつた。

なのに将軍は無情にも首を振る。

「説明している時間はない」

現実は非情で、常にマウを追い立てるかのようだつた。

何が「ある」のだらうか…マウは模索しながら戦わねばならない。

《相談は済んだか?》

最後まで立っていた黒騎士を打ち倒したスケルトンが、調子を確かめるように虚空をひとなぎして、訊いてきた。

マウは、いつでも一人で戦つてきた。

弱みを見せたら負けだと自分に言い聞かせてきたから、こんなときでも強がる。

「随分と余裕だな。それ、あんたら魔靈の悪い癖だぜ?」

《ほやけ。ろくに魔力も使えないのだらう》

魔術師としてのマウに疑惑を抱いているスケルトンは、解釈次第で核心を突くかもしれない言葉で探りを入れた。

だが、マウに自覚はないため、それは空振りに終わる。

「どうかな？ もしかしたら、あんたはおれが魔力を使つたのを見たかもしないな」

はつたりだ。さすがに通用するとは思えないが、どちらにせよ言ってみて損はない。

思ったよりも消耗はしていないし、思考もクリアだが、他者に魔力で干渉できるほどの余力はなさそうだった。

体力の回復に要する時間は、その日の体調によつて変わる。感情が高ぶると疲労に対しても鈍感になるから、はつきりしたところは分からなかつた。

最大魔力の解放は三度が限度で、本当なら先程の魔力で昏倒してもおかしくはないのだ。

術者であるマウは、アブリカの内部工作に違和感を覚えない。内々で処理されるため、記憶は混同するし、あとは時間が解決してくれる。

埒が明かないと感じたスケルトンは、单刀直入に言つ。

『魔力が変質したな。何をした?』

「あとで、いつか教えてあげる

他者に指摘されるとぼろが出るから、アプリカがせつせと記憶を抽送し、魔眼を強化したのだとマウに自覚をせる。

もちろん、わざわざいこうで言つ必要はなかつた。

自覚が芽生えれば、制御も出来るようになる。

魔眼の活動を鎮めて、一部の駆動系は認識できないため、アプリカに託した。

この新技をスーパー魔眼とアプリカは名付けたようだつた。とても他人には聞かせられないネーミングセンスだつた。

ちなみに、空間指定の物理干渉を、アプリカは「マジカルハンマー」と呼ぶ。どうしようつ。

…いや、おかしいのは自分のセンスなのかもしれない。

使い魔を溺愛しているマウは、ときどき無謀な挑戦をして「今時の調整を図るのだ。

「…まあ、スーパー魔眼つてこいだな」

「ねーよ」

エメスが即答してくれたので、自分は間違つていないと再認識できた。

何事も経験である。

第六十一話、本質

「来い！」

氣勢を上げてスケルトンの前に立ちはだかるマウだが、実は無意味な行動だった。

彼の役割はスケルトンの注意を一瞬でも逸らすことになり、それ以上の働きは求められていなかつた。

將軍が立案した作戦の要になるのは、やはりエメスであり、計画の全貌をマウは知らない。

エメスの正体を見抜ける筈の彼を、ビニまで欺けるか。
問題はそこだ。

にわかに怪しきなつてきた雲行きを、エメスは険しい表情で眺める。
彼女の弱点は「水」だ。

雨が降り始める前に決着を付けたかつた。

「…おい、魔術師。邪魔だ。お前、見学してろ

マウは無視した。

彼女は自分に不利益しか齎さない。
命令を聞く義理はなかつた。

でも邪魔者扱いされて不安になつたから、ちひりと肩越しに将軍の顔色を窺つた。

彼女は地面に片膝を付いたまま、師の動向を見逃すまいと集中していた。

マウの視線に気付き、「ん?」と首を傾げる。

マウは、勝ち誇った顔でエメスを一瞥して、鼻を鳴らした。

学生時代はクラスメイトたちに慕うにされていたから、マウの主張にも熱が入る。

「将軍は、そんなことないって言つてゐるぞ」

「いいよつに解釈すんな! 雨が降つたら、あたしは力が出ないんだ。どけ!」

「……」

マウは、縋るような目を将軍に向ける。

新天地での生活に全く不安を覚えないほど鈍感な人間ではないのだ。

何かの役に立ちたかった。

誰かの助けになれる人間になりたいと、マウはずつと願つてゐる。

努力は報われると信じたい。

将軍が、こくりと頷き、端的に告げた。

「退場」

「え？ なに？ 聞こえなかつた、もう一度」

見苦しい抵抗を続けるマウを、将軍は見ていた。

気まずそうに視線を逸らされて、駄々をこねるほど、マウは自分に自信を持てない。

向奥の観客たちに田線を転じると、妹姫が駄目押しをする手半でひづみ手

招きしていた。

「……」

とぼとぼと戦列を離れたマウを、スライムが出迎えて歩いた。

一層みじめになつた。

マウはスライムを撫でてやつてから、妹姫の隣に座つた。

すると妹姫が、呆然と呟いた。

「触った」

「えー？」

過敏な反応を示したマウに、姉姫が「ああ……」と納得の声を上げた。

「ヒヤビヤ、普通に女の子の頭を撫でたりするよね……」

「そんなことないよー。」

マウは否定した。

だが、事実だった。

説得力に欠けていたことを自覚していたから、本当に必要なのは弁明の機会だった。

「…その言い方だと、誤解を招くでしょ？ 女の子だからって訳じやないから」

マウは必死だった。

「子供はね、大切にしてあげないと。大人がちゃんと手を握つててあげないと…」

瞳を覗き込んでくるマウを、妹姫はざつくりと切り捨てた。

「そんな話してない。なんでそつちに持つて行こうとするの

何故かと問われれば、疚しいことがあるからだった。

「でも、おれ触つてないよね？」

彼は、どうしてもそこをほつきさせたかったようだった。

妹姫は…

「……」

彼の勘違いを正す義務は、自分には無いのだと気付いてしまった。

すっと目を細めた姉姫の雰囲気が変わった。

そこに拭い難い女王の面影を見て、マウは心なし身を引く。

「あの……」

姉姫は、今年で七つになる。

まだ幼い姫君の将来に期待しているから、マウは彼女と接するとき、本音を語ってしまうことが多い。

狭い「ミコニティ」の中で育ち、自分を曲げずに生きてきたから、マウの「怒り」は方向性にぶれがなく、質量とともに申し分がない。

人間の絶望を糧とする王族から見ると、それはとてもとても美味しいそつなのだ。

だからマウは、迂闊に信頼めいたことを口にすると、姉姫から無言で見詰められる。

「……」

そこに姉姫も無言で加わってみると、マウは家畜たちの気持ちが分かるような気がした。

スライムの横に座ると心が和むのは、きっと血肉保存の本能が満たされるからだった。

この魔靈の長老種は、触れたものを瞬時に融解してしまう、世にも恐ろしい特性をしているが、マウにはあまり関係がなかつた。

スライムは多者との接触を恐れるが、心の奥底では触れ合いを求めているから、うっかり溶かしてしまっても影を置めばそれで済む魔術師なら、側にいても緊張せずにいられる。

地べたに座り込んだ一人は、肩を寄せ合つて将軍の奮闘を見守るのだ。

将軍には、秘策があつた。

今日この日のために、ずっと練習してきたのだ。

ずっと、ずっと考えてきた。

人間の…自分の「本質」とは何であらうかと。

魔靈の権能は発展させることができる。

だが、それは自分の特性を、本質を理解していることが大前提だ。

例えば、エメスは完成した権能を持つ稀有な存在だ。

そんな彼女でも、「渴き」という属性から離れた権能を振りかざすこととは叶わない。

人間である将軍には、「属性」という概念が、おそらく無い。

黒騎士たちの権能が一向に発展しないのは、属性を持たない本体に影響されている所為でもある。

では、どうするか。

マウといつ「人間」と出合ったことで、将軍はその答えを得た気がした。

人間の本質を決めるのは、自分自身だ。

第六十一話、決着

そして。

「どうしてこうなった…」

皿席にて、マウがうめいた。

ベッドに座り、片腕を包帯で肩から吊っていた。
軽度の捻挫らしい。

ようによつて利き腕だつたため、スライムが手すから食事の世話を
してくれてい。

個人的には姉姫にお願いしたいところだつたが、将軍の許可が降り
なかつた。

将軍に頼まなかつたのは、夕飯のメニューが熱々のシチューで、わ
ざわざ火傷の危険を冒すこともあるまいと考えたからである。

責任を感じているらしい将軍は、小刻みに震える手でスプーンを差
し出しているスライムと、雛鳥のようについたばんでいるマウを見比
べてはそわそわしている。

拳動が不審な彼女に、姉姫がズバリと言ひ放つ。

「謝つたら？」

「う…」

痛いところを突かれて、将軍が氣まずに身じろぎした。

隣に座っている姉姫が、急き立てるように将軍の脇腹を肘で突ついた。

「謝っちゃえ、謝っちゃえ」

「うへへ……」

幼馴染みにまで囁し立てられた将軍は、唇を尖らせて悶めしげにマウを見る。

ここまで彼女が渋るのは、マウが怪我をしたのは彼が手抜きをした所為でもあると思つてゐるからだ。

影踏みと云う魔力を簡単に言い表すなら、「あとだしじゃんけん」に近い。

たとえ怪我をしたとしても、影を畳んでしまえば「なかつた」とに出来るからだ。

ところが実は、マウの影踏みには、本人も自覚している致命的な弱点があった。

それは、他者を庇った場合には連続して影を踏めないと云ふ点である。

情に脆く、感情に正直なマウは、主張がせつせつとしていることもあり影踏みに迷いがない。

迷いがないから、出たとこ勝負で退路を失うのだ。

相手がチョキを出して、グーを出せば勝てるに分かっていても、後ろで見ているちょっと間抜けな女の子が救われるなら、パーを出して自分の負けでいい。

それがマウの生き方だ。

だが、そんなことをわざわざここで打ち明ける必要はないし、何かと格好付けたい年頃だったから、マウは憮然として言う。

「…悪かつたな。魔力を連発して疲れてたんだよ。大体…」

と言つて、ちらりと姫姉妹に視線を遣る。

視線とは別に、將軍に向けて言つ。溜息混じりに、

「…君、剣を使えないって。騎士なのに…」

そのことを意図的に隠していた姉姫が、「にこいつ」と笑つて誤魔化した。

同罪の妹姫も姉に習つて、ふんわりと意味なく微笑んだ。

…ここで許してしまはから駄目なのだと、マウはこれまでの半生を振り返つて自戒した。

心の中でアブリカが応援してくれていた。

だが、速やかに鎮火された怒りを再燃するためには、何かしらの火種が必要だった。

「……」

何だか期待の眼差しを寄せられて、将軍がぎょっとした。

少年の魔眼が前触れなく発現していたからだ。

とつさに片目を押さえたマウが、部屋の出入口に向けると、ちゅうじドアが閉まったところだった。

去り際にスケルトンが微かに笑っていた気がした。

久方振りの敗戦に思つところがあつたのだろうか。

… そう、結果から言つと、マウたちは勝利を収めた。

具体的な経緯は、こうだ。

まず跪いた將軍が、複数の黒騎士を顕現した。かに見えた。

が、実はそれはエメスが作り出した砂の影像だった。

スケルトンは騙された振りをした。

彼は、黒騎士の本体である少女が応戦せざるを得ない極限状態を作り上げようとしていたからだ。

マウの魔力に囚われた一瞬の隙に、將軍とエメスは入れ替わったに違ひない。

だが、そうではなかつた。

将軍が真に欲したのは、「入れ替わることも出来たという状況」だった。

斬り伏せた「黒騎士」が砂と化して崩れ落ちた瞬間、スケルトンは驚いた振りをした。

将軍に名を呼ばれて、待つてましたとばかりにエメスが飛び出した。

迫り来る「将軍」と、足元を取り巻く砂、そして様々な要素から、スケルトンは震に嵌められたと察した。

先行して殺到した「黒騎士」が内面から爆ぜて更なる異形と化した。

複数の端末を並行して操るという面に関してさえ、分隊規模では、完成された機能を持つエメスは将軍の上を行く。

このとき、スケルトンは初めて「本気」を出した。

動きの緩急で敵を惑わせるのがスケルトンの本領であると、マウは考えていた。

だが、そうではなかつた。

極限まで無駄を省き、最低限の手数で最大の効率を叩き出すのが、スケルトンの本来のスタイルだった。

瞬く間に殲滅された砂人形に、それを為した老騎士に、魔神の本性を顕にしたエメスが哄笑を上げた。

愚かな…とスケルトンは囁いた。

どの魔靈にも共通して言えることだが、魔靈が全靈を振るえるのは本来の姿を成したときだけだ。

だから、魔靈を本当の意味で打破しようとしたら、彼らの全靈が凝り固まつた「本性」を打ち倒すしかない。

咆哮を放つたエメスが、巨腕を大地に叩き付けた。

砕け散り舞い上がつた石畳が、瞬時に砂の槍と化してスケルトンに襲い掛かった。

初撃を回避したスケルトンが、それらを剣で迎撃しつつ、エメスの腕を駆け上がる。

足を砂に囚われる前に、彼は大きく跳躍し、エメスの肩口から脇腹にかけてを剣でなぞつた。

それは、おそらく特別な一撃だった。

剣というものは、極めれば極めるほど枝葉が削ぎ落とされてシンプルになる…それが剣聖と称される老剣士の持論だった。

骨格も筋肉も、血流もない筈のエメスだが、スケルトンには他の何かが見えていた。

剣でなぞられた傷は決して深いものではない。にも拘らず、エメスの身体は両断された。

彼女の巨体が、大量の土砂を巻き散らして崩壊する。

スケルトンの貫禄勝ちといったところだったが、代償は大きかった。着地の衝撃で踵骨を破損し、立ち上がるのも難しくなってしまった。

すぐ後ろに愛弟子が立っていた。

そうなるよう、調整して跳んだのだ。

黒騎士を召喚するという選択肢も残されている筈だった。

しかし将軍は、相手が師であるところとも作用してか、最後の最後で選択を誤った。

勢いよく抜剣し、

…これにはスケルトンもびびった。

将軍の手から、黒塗りの剣がすっぽ抜けた。

砂塵に覆われる中、なおも鈍く光った、くるくる回る剣を、姉姫と妹姫が切なそうに見詰めていた。

焦つたのはマウだ。

剣とは、つまり鉄塊である。

指先で刃をなぞれば、それだけで出血するのだ。

そこに重量が加われば、骨も無事では済まない。

とつさに影を踏み、師弟に割り込んだマウが、飛び上がって剣の柄を掴み取った。

そこまでは良かった。

が、首尾よくキャッチした将軍の剣は、異様に軽かった。

どうこうことなの…と弦いたマウは、空中で重心を崩して着地に失敗した。

愛弟子のあまりの不甲斐なさに呆然としていたスケルトンは、辛うじて再構成したエメスの巨大な手で驚掴みにされた。

それが、事の顛末である。

文字通り勝利を掴み取ったエメスは、喜び勇んで宣伝に出掛けた。無理な体勢で着地して悶絶しているマウのことなど眼中にないようだつた。

マウの部屋に集つた一同の注目を浴びて、将軍はもじもじしている。

「…今日は、ちょっと調子が悪かったんだ」

いじけたように人差し指を突つき合わせる彼女に、マウは「仕方ないなあ…」とぼやく。

「出たー」と余計な茶々を入れる姉姫を軽く睨んで、怪我をしていない方の手を将軍に差し出した。

「？」と首を傾げる将軍に、マウは微妙に田線を逸らして告げた。

「剣、貸して。魔剣、欲しいんだろ？ 約束はどうる？」

第六十三話、魔剣誕生

何もない部屋だな、と妹姫は思った。

マウの具合が気になつて何となく着いてきたものの、ひと段落してみると、「魔術師の部屋」というものに俄然として興味がわいてきた。

しかし絵本によく登場する、人間一人煮込めるくらいの大きな鍋とか、奇天烈な魔導書とかは見当たらない。

少し残念だ。

唯一興味を惹かれるのが、天井から吊り下がつている止まり木だつた。

あとは最低限の家具があるくらいで、きちんと掃除しているらしい点は評価できると思つた。

ベッドの上に座つてきょろきょろと身をよじつているものだから、そのたびに長い髪が布団の上で跳ねて衣擦れの音を立てている。

お尻の下敷きにならないよう、マウがちよいちよいと魔力で軽く浮遊させていた。

止まり木を指差した妹姫が、博識な姉に尋ねる。

「姉様、あれは何ですか？」

魔術師の少年が城で暮らすよくなつて以来、何故か姉と一緒に居

る機会が多くなった。

椅子に腰掛け成り行きを見守っていた姉姫が、妹の指差した先を目線で追つて首を傾げた。

「間取りの中にあるから、おそらく前の住人が使っていたんだろう。以前、わたしも尋ねてみたが、先生も詳しくは知らないようだ。相当初期の魔靈なんだろう」

「魔獸かしら?」

姉と同様に首を傾げる姉姫に、姉姫は「どうかな?」と懷疑的な意見を述べる。

「伯爵が生まれて、次にベフィモスが生まれた。一見、無理がない流れのように思えるけど、わたしには少し唐突に思える」

ベフィモスというのはレヴィアタンの直兄に当たる魔靈で、魔獸と魔靈、両方の特徴を備え持っている。
雷と風を操る、強力な魔靈だ。

今は、女王に付き添つて城にいない。

姉姫の理解が追い付くのを待つて、姉姫が続ける。

「たぶん母様は、魔獸を量産する傍ら、実験的に魔靈型を生み出していたんじゃないかな」

その魔靈?魔獸?が、かつて羽を休めていたり止まり木に、今はマウの使い魔が我が物顔で居座つている。

物憂げな表情で止まり木を見詰める姉に、妹姫は心の中で嘆息した。

(眞面目にしてれば、立派なのに)

びつじて普段はあんなのかしら、と妹姫が姉の将来を案じている最中、マウと将軍は無言の応酬を続けていた。

「……」

「……」

「…いや、わたりと寄越せよ」

痺れを切らせたマウが、片手を差し出したままの体勢で言った。

将軍は、マウ所望の剣を剣帯から鞘ごと引き抜いたはいいものの、先ほどから落ち着きなく身体を揺りすばかりで一向に手渡そうとしない。

「…でも、お前は姫様たちにやたらと酔れ馴れしいし……」

「あ?」

マウは、いい加減イライラしてきた。

彼女が何を躊躇っているのか、さっぱり理解できないし、魔力を連発した所為で疲れているのは事実だからだ。

とはいって、女の子に苛立ちをぶつけるのは「優しい人」の定義から著しく外れている気がした。

マウは、努めて冷静さを保ち、將軍の手から彼女の愛剣をぶんびつた。

「面倒くせえな……いいから、とつとと寄越すんだよー。」

イングニア派とは思えない俊敏さで手元の武器を浚わた將軍が、何やら熱っぽい視線を向けてくるが、もはや知ったことではなかつた。

將軍の剣は、やはり軽い。

見たところ、金属製には違いないようだが、純粹な鉄製とも思えない。

(…アルミか？ ちょっと違つかもしれないな)

試しに鞘から引き抜き、刀身をまじまじと見詰める。

じつして改めて見ると……マウは思った…

(ここに剣だよ、これ)

武器の良し悪しなど、マウには分からない。だが…

將軍は、そもそも知らないか、うつかり忘れているかのどちらかだ
ら。

將軍の剣には、幾層もの「運ぶものたち」が取り巻いていた。

剣こじめられた魔靈たちの真摯な「願い」に惹かれて取り憑いたの
だろ。

魔術師であるマウには、そうした…目に見えない筈の怪しげな生き物が見える。

魔術師は魔力を制御するために自分を騙す必要があるから、己が五感の力スタマイズに熱心だ。

「魔眼」は、その究極形の一つで、先人たちが長い年月を掛けて磨き上げた、魔力の基礎となる秘術だ。

魅入られたように刀身を眺めて、マウがそっと呟いた。

「決まりだな…」

少し興奮してきた。

将軍は剣を新調したがっていたが、これを手放すなんてとんでもない話だ。

マウは、抜き身の剣を肩で器用に固定すると、捻挫した方の手の包帯をするつと解く。

鈍い痛みを発し続ける手に視線を落とし、じつと凝視すると、やがて手のひらに糸ほどの裂傷が走った。

ぷくりと浮かんだ血球に、いつの間にか顔を寄せていた将軍が「あっ」と小さな驚声を上げた。

マウは、いつになく厳しい口調でたしなめた。

「騒ぐな。この程度、魔術師なら誰でも出来る」

魔力ですらない。単なる自己暗示だ。

痛覚を遮断しようとして、…やめた。
この痛みには意味がある気がした。

無傷の手で再び剣の柄を握る。

握りを調節して、出血した箇所に剣先を押し当てる。

肅々とした雰囲気に呑まれて、将軍は「何をしているのか」とは問えない。

「…い、痛くない？」

「そりゃあ痛いよ」

剣先を伝った血液が、す、と刀身に滴る。

…だが、きっと必要なことだった。

マウの魔力は、彼自身に対しても最大の効果を發揮する特性を備えている。

だからマウの血液は、彼自身が望むなら、魔力を付与するに当たつてこの上ない純度を帶びている筈だった。

アプリカに手伝って貰えれば手間を省けるだらうかと、ちらりと思つたが、すぐに考え直した。

愛しの使い魔は、將軍に對して少しばかり手厳しい。
最初の頃はそうでもなかつたのだが、ここ数日ですっかりへそを曲げてしまつたようである。

何が悪かつたのか…

ああ、僕の所為かとマウは思い至つた。

アプリカはマウの使い魔で、使い魔は術者の心を映し出す鏡だ。

(そうだよな。そう…)

マウは、考えを改めた。

自分一人でやろうとしたのは間違ひだった。

止まり木で翅を休めているアプリカを見上げる。

「アプリカ」

彼の使い魔は、積極的には反対しなかつた。

ただ、あまり氣乗りしない様子で主人を見詰めた。

「アプリカ」

マウは、繰り返し使い魔の名を呼んだ。

「おいで。僕にはお前の助けが必要だ。これまで、ずっとそうだった。これからも」

そつして、じつと見詰め合ひ。

アプリカは何を思つのか。マウには分からぬ。

使い魔は、術者の分身だ。

彼らの意識は、魔術師が「えた仮初のものでしかない。
理屈ではそうなる。

それでも大切にしたいと願う「心」はさうあるんだと、マウは思
つてゐる。

ややあつて、アプリカは如何にも仕方ないと呟つよつて、翅を広げ
て舞い上がつた。

ぱたぱたと宙空を横切り、将軍の肩にとまる。

「え、そつちー!?

使い魔は、術者の分身なのである。

将軍の華奢な肩を足場に踏ん張つたアプリカが、バイオリンと弓を
構えた。

「…何かごめんなさいね

とりあえず謝つたマウが、将軍の剣を掲げ持つ。

くすぐつたそつて身をよじつた将軍が、びっくりして言つた。

「わたしの剣が魔剣に！？」

「遅いよ気付くのー？ そういう流れだつたでしょー。」

とにかく、かくして、將軍の剣は新たに生まれ変わったのである。

効果のほどは、また後田。

第六十四話、雪女の恋

全治一回と診断された手首の捻挫が、三回の朝になつても鈍痛を訴えるのは、さうといへばついていなかつた。

寝台の上でのそとと上半身を起したマウス、半身を漫したままベッドから降ると、足取りも艶に部屋を出て、洗顔と歯磨きを済ませて戻つてくる。

のうのうと服を着替え、ベッドで腰を沈めて一息伸び間もなく

「じゅしじこ～」

と将軍が半泣きで部屋に転がり込んで來た。

「……」

マウスは、両手で顔を覆つた。

何か悲しこころがあつたとき、彼はそつやつて現実から逃避するのだ。

「…マウです。どうしたの

前に居たところでは彼自身の意思に反してコーティコーティと呼ばれていたので、朝一番には自己紹介する癖があつた。

「あれ、起きてる…」

せつかくの寝起き下ヶキリが初手で失敗に終わり、将軍は残念そう

だつた。

しかし嘘泣きではなかつたらしい。

彼女は涙を啜りながらマウにじり寄ると、無抵抗な彼の腕を手に取り、袖で涙を拭つた。

舟を漕ぎながら「うんうん……」と適当に相槌を打つマウと、将軍が涙ながらに訴えた。

「め、メディアがいじめるんだ」

マウは、速やかに布団に入りたかった。将軍の後を追つてやつて来た冰雪の魔靈が、室内の温度を急激に下げ始めたからだ。

『小僧、その女を寄越せ。力チカチに凍らせて死海に沈めてやる』

肌も髪も、着物に至るまで雪のよつて白い童女が、赤眼を怒りに染めていた。

厄介事に巻き込まれたことは明白だつた。

しかしここで逃げても結局は同じことだと分かつてから、マウは頃垂れて未練を惜しんだ。

「何だよもう……朝から穢やかじやないなあ。…メディア?」

事情を聞こうと水を差し向けると、裸足の童女がぺたぺたと歩み寄つてきて、マウに泣き縋つている将軍へと無言で手を伸ばそうとする。

「メディア」

今度は少し語氣を強めて、マウが言った。

魔術師の言葉だから、魔力とは無縁ではいられない。

見えない力が働いて、メディアの小さな手がぴたりと止った。

激情に燃える視線で射抜かれて、マウは少し鬱になる。

『…小僧。わたしに逆らつのか?』

メディアは、マウを「小僧」と呼ぶ。

大半の魔靈が、マウとは比較にならないほど長く生きているのだ。

それでも、人間は老いから逃れることができないから、不老長寿の魔靈と比べて精神年齢が低いということにはならない。

マウは、たしなめるよひと言つた。

「逆らつも何も。君、上司に向する気なのさ」

將軍は、魔靈たちの指揮権を持つ、この世で唯一の人間だ。メディアの一存でどうこうしていい存在ではない。

侮蔑の目で見られた。

『尽く尽く…小僧…貴様は女に甘いな』

「待つて？ おれ、そういうイメージなの？ 違うからね？ 彼女はあなたの上司で、あなたは彼女の部下でしょ？ おれ、ちゃんとそう言つたよね？」

一気に喋つて目眩がした。

すっと顔を上げた将軍が、ぼそりと言つ。

「…もしもわたしが男だったら味方してくれない癖に」

「そりゃそうだろ！ 野郎が泣いてるの見て、ビリして親身になれるよー？」

マウは認めた。

氷雪の魔靈メディアは、戦つことも帝国の行く末にも関心がない。そんな彼女だから、エメスよりも古い魔靈であるにも拘らず、メティアは彼女自身の権能を鎮める術を知らない。

メディアの周囲では、凝固した空気中の水分が塵と結び付き、自然と雪が降り始めていた。

将軍の長い睫毛に舞い降りた粉雪が、瞬きするたびにはうらうらと散つている。

彼女の頭に積もった雪を片手で払い落としてやりながら、マウは思い付いて言つた。

「男女を平等に尊重する」とと、同じ扱いするのは違つだろ。それじゃあ單なる乱暴者だ…

「そりやつて誤魔化すんだ」

《見苦しい言い訳を…》

間髪入れずに女の子たちにツッコまれた。

お前ら喧嘩してたんじゃなかつたのかよ…とマウは胸中で吐き捨てる。

「気付けばおれが悪役だよ。本当に、どうなってるんだよ、おれの人生…」

止まり木の上で喧騒を見守っていたアプリカが、いつものパターンだと…何事も諦めが肝心だと慰めてくれた。

それもそうだなど納得して、改めて事情を問い合わせる。

姉姫ですら六時間は眠させてくれるのに、夜間警備の仕事を押し付けてくれた将軍が三時間の睡眠時間を強要するといつなら、それ相応の理由がある筈だと信じたかったのだ。

聞けば、事の発端は三日前にマウが将軍に与えた魔剣であるという。

それほど大それた魔力を附加した訳でもないのだが、魔剣を手にした将軍は何だか自分でも驚くほど嬉しくなって、女王不在で引きこもっている魔靈たちを訪ねては見せびらかしていたらしい。

もちろんメディアにもだ。そこまでは良かつた。

自室で天井から氷柱を生やしては固めた雪玉を投げ付けて折る作業を延々と繰り返していたメディアは、珍しく将軍の魔剣に関心を示した。

将軍の剣に付与された魔力は、振れば薄紅の残光が軌跡を描くという、まるで実用性に欠けるものだった。

マウが、将軍の剣に宿る精霊たちに働きかけて、自分の魔力を定期的に補充することを条件に、心の力を糧に発光してくれるよう交渉したのだ。

交渉は滞りなく締結された。

精霊たちは、魔術師に対して好意的だ。

精霊の捕食者である「妖精」を古き盟約で従え、また新たに生み出しもする魔術師は、憎まれてもおかしくない筈だった。

しかし精霊に死という概念はないから、魔力という、カテゴリーは違えど「心の力」操る魔術師は、精霊たちからすれば「同属」とまでは行かなくとも「同僚」程度には思われているらしい。

その辺りの説明を、マウは魔剣の保持者である将軍に一切しているい。

面倒だつたからだ。

ただ、魔力を補充する必要があるから、光が弱くなつてきいたら自分のところに来いとは伝えてある。

頻繁に魔力を与えすぎると、精靈たちは本来の職務を忘れて墮落してしまつ。

それを避けるための処置だ。

普段、自分をあまり快く思つていらないらしいメディアも、将軍の魔剣には興味津々の様子だった。

しめしめと思つた將軍は、じいじんとばかりに魔劍誕生の経緯を披露したのだという。

いわく…

あの魔術師は女の子に甘いから、おねだりすれば頼みを聞いてくれる。赤子の手をひねるようなものである…

「おー」

得意氣に武勇伝（？）を語る將軍は、マウの呼び掛けを無視して続けた。

メディアの好感度を獲得し、すっかり気分を良くした將軍は、やがて本日の早朝、魔劍自慢ツアーアーの第一周目に突入した。

「…何でそういうこととするの？」

無意味だらうジッ「むマウを、將軍はまた無視した。

魔靈訪問を再開した將軍。

そこで、事件は起つたのである。

一人目の標的は、もちろんスライムだ。

魔靈の長老であり、また自分を強く支持してくれている最古参の重鎮であるから、將軍は何事があると大抵の場合はスライムに優先権があると考える。

今回もそうだった。

一回田とは趣向を変えて、黒騎士との殺陣を披露する將軍に、スライムは（雰囲氣的に）田を細めて褒めちぎつてくれた。

そこで、奇遇にもスライムの部屋を訪ねてきたメディアと鉢合せた。

手文字で將軍を応援しているスライムを見て、何故だらつ……今もって將軍には理解できない……

メディアは、血も凍るような、冷たい微笑を浮かべた。

…聞くに耐えない。

マウは、再び両手で顔を覆った。

朝から呑き起しそれで、自分は被害者だと思い上がりっていた。

そりではなかつた。

この一件での最大の被害者は、疑う余地なく、あの哀れなスライムだった。

マウは、修羅場に追いやられたスライムの末路を偲びつつ、辛うじ

て声を絞り出した。

「…それは怒るだろ。自分の好きな相手が、他の女の子を褒めちぎつてたら、それは怒るだろ…嫉妬もするだろ」

「…えー…?」

ひと呼吸置いてから、将軍はびっくりして目を見開いた。
素早く振り返り、メディアを見る。

「メディア…あなた、スライムのこと好きなのー!?

メディアは、将軍を無視してマウに詰め寄った。
氣炎を上げて、

『…変な言い方をするな! それだと、まるでわたし…あれに恋をしているようではないか。わたしは魔靈だぞ、貴様ら人間と同じ物差しで計るな!』

彼女に自覚はないようだった。

あるいは自覚しようとしているのか。

いよいよ面倒くさい事態になってきて、マウは普段着であるカツターシャツの袖をまくらうとし、直前で止めた。

行き場をなくした手を頭に持つていき、付いてもいない寝癖を直す
ような素振りをして、言ひつ。

「君たちは、怒りと憎しみの具現だろ。だから愛情とは無縁だつて
? 馬鹿言つちゃいけない

何か言い掛けのメディアを遮つて、マウは畳み掛ける。

「メディア。何かを憎もつとするなら、その比較にならぬものは何だ?
？ 愛しいものがないなら、そもそも憎しみは生まれない」

怒りと憎しみの具現だからこそ、愛情とは無縁ではいられないのだ。

スライムが限りなく不死に近い存在だから、メディアは安心して自分
の気持ちに向かおうとはしていない。

だが、スライムことひづめだるみつかじ、マウは思つのだ。

メディアは、熱に弱い。

そして人間は、この先、そしてそう遠くない未来で、魔靈たちに対
抗して火器を開発するかもしれない。

そのとき、自分が寿命を迎えていない保障など何一つとしてない。

マウは真剣だった。

それなのにメディアは、（雰囲氣的に）顔を真っ赤にして、言つ
だ。

『あれを苛めていいのは、わたしだけだ。わたしだけが、やつの弱
点を突ける。それが愉快でならない。それだけだ、勘違いするな』

マウは、少し自信がなくなってきた。

スライムの幸せを願うなら。

第六十五話、心の声

「ねえ、メディア。ねえねえ、ねえつたら」

きらきらとした瞳で詰め寄つてくる将軍に、メディアは心底からうざつたそうな視線で応じるのであつた。

未発達な機能だから、感情に引きずられて、室内がガンガン冷却されしていく。

「……」

己の寝室に降り積もつていく雪を眺めて悲しさと虚しさを感じているマウと違つて、将軍はホットなニースに興奮を隠し切れない様子だつた。

自分は先ほどから「寒さ」を訴える生理的な機能と「寒い」と感じる気持ちを自己暗示で切り離そうとしているのに、彼女は宝鎧に護られてぬくぬくとしている。

理不屈だと思つた。

将軍がマントの下に着込んでいる黒皮の鎧は、「最強」と称される魔靈から授かつた、この世に一つもない靈鎧だ。

柔軟性に富み、軽く、剛い。

防具としても一級品であるのに加え、装着者の体温を調節し、体力の消耗を軽減してくれるという夢のようなアイテムだつた。

将軍は、しつこくメディアに食いつがる。

「ねえ、本当なの？ スライムのこと好きなんだ。わたし、応援するからー。」

興奮のあまり、口調が変わっていた。

『……』

メディアは、無言でマウに視線を投げた。

極寒の眼差しだった。

これを何とかしろといふことだ。

マウにとつても誤算だったのは、メディアがスライムに対して抱いている気持ち（本人は否定しているが）を、将軍が知らなかつたといふことだ。

魔靈の『声』を聞き取れるのは魔術師だけだ。

しかし、スライム以外には懷かない、それでいて嫌がらせのようなことを繰り返して気を惹こうとしている（ようしか見えない）メディアの想には一目瞭然ではないのか。そうでもないのだろうか。

帝国に来て日が浅いマウには、領内での常識に疎い面がある。
断言は出来なかつた。

姉姫あたりなら、とうに承知していそうなものだが……

と、そこまで考えて、マウは思い付いた。

「やうだ、姉姫に相談しよ」

持つべきものは友達である。

すかさずメティアが反論した。

《あのうつけに相談してどうなる》

それが、城内での姉姫に対する一般的な評価である。

友達のことを悪く言られて、マウがむつとした。

けれど、この場には魔靈の声が聞こえない將軍もいて、おまけに何やら期待の面持ちでマウの通訳を待ちわびているから、下手なことは言えない。

言葉を選ぶべきだった。

「…彼女は物知りだからな」

些細な食い違いを、メティアは気にも留めない。

《よしんばそれを認めたとしても、何を尋ねるといつのだ。貴様、わたしの話を聞いていたか?》

彼女は、スライムのことを単なる楽しい玩具だと主張しているから、姉姫に助言を貢うメリットはないと言ふ。

そして思い付いたように、元通り付け加えた。

《…小僧、貴様には貸しがあったな。わたしの名前を回復しろ、今

すぐに『だ』

一方的な要求だったが、マウは頷いた。しかし、「名譽」とは？ 彼は言った。

「あのとき、僕は君に協力すると言つたな。君はその条件を呑んだ。本当にそれでいいのか？」

歓迎会での一幕だ。

マウには、自分が「魔法」を使ったという自覚がない。そもそも、「魔法」という概念を知らない。

魔術師たちの社会では魔力が全てだから、自分たちの利益になる魔術師は育てても、脅威になる存在を育てようとはしない。

それでも、一度は「魔法」に触れたマウだから、はつきりと言えることがあった。

「心を操れる魔力は存在する」

メディアが息を飲んだ。

マウは、無表情だった。

「君が本当に望むなら、君の気持ちを否定してあげる

はつたりだ。

感覚的に分かる。再現できるかどうかすら怪しいが、仮に再現できただとしても、以前と同様の効果が働くことになるだろう。

あれ以上はない。

他者の心を操ることは唾棄すべき所業か？ そんなことはない。
マウの本音だ。

世界は、どうしようもなく病んでいる。
ままならない」とばかりだ。

理性は否定する。そんな遣り方で得たものに、どれだけの価値があるのかと。
もしも他の魔術師が似たようなことをしたなら、真っ向から批判するだろ？

お前は間違っていると声高に叫ぶだろ？

それなりに、自分が使つぶんこは構わないらしい。

自分という人間の深淵に横たわるものと直面した気分だった。
数多くの魔術師を倒してきた。

どれだけ蔑まれようとも、誇り高く生きてきたつもりだった。

道路の果てが、ここだ。

…将軍の鎧姿は、失うてあまつに惜しい。

並行して思考を開拓していた、将軍の普段着に関する考察が、結論を導いていた。

「違うだろ？」

唐突に叫んだマウに、メディアがびくつとした。

もう何を話していたかすら覚えていなかつたから、勢いで誤魔化すしかなかつた。

「正しいとか間違つてるとか、そうじやないだろ。願うだけじゃ駄目なんだよ。期待して、失敗したら恨むのか？ 違うだろ。生きてるんだよ。生きてるなら、今だろ……」

当たり障りのないことを口にするマウだが、そんな彼自身の「今」が一番不安定だった。

けれど、中身のない言葉でも、ときとして人を動かすことはあるのだ。？

『わ、わたしは……』

メディアが揺れていた。

マウは焦つた。ハリボテの信念に心を動かされても困る。

(…)

とつぞに心の中で使い魔に救援要請を送る。

止まり木の上で我関せずとばかりにバイオリンの調律をしていたアブリカは、マウと目が合つと、白々しくも首を傾げて、すう…と朝靄に溶け込むが如くフェードアウトしていった。

…これは試練だと、マウは思った。

(僕は試されてる)

自分の気持ちを身詰め直して沈黙するメディアと、方向性も定かでない決意を固めるマウ。

混沌とし始めた場で、将軍の甲高い嬌声が響いた。

「あ、姫様！ うん、おはよ。あのね、今……」

「……」

将軍や姫姉妹がアクセサリーのようにして持ち歩いている懐中時計には、サイレンという歌音の魔靈が封じ込められている。

見た目は等身の低い小人であり、周囲の……おもに所持者の「声」を吸収して自らの形とすることができた。

また、分身と情報を共有できるという特性を利用して、さよつど今、将軍がやらかしてくれたように、遠く離れた所持者同士で連絡を取ることも可能だ。

フラスコの中で小さな将軍がぐるりと回って、白いドレスを着た銀髪緑眼の少女に変じる。

「ああ、そう。マウ、せつちやつたね……。聞いてるかな？」「ひ、マウ。やこマウ。お口が軽いんだよ、まつたくもう

デフォルメ版の姉姫が、短い手足を精いっぱい動かして、マウを叱責していた。

マウは、何だかひどく満たされた気持ちになつた。

第六十六話、反目

情報の漏洩に立腹のメティアは、何故か張本人の將軍ではなくマウに当り散らすのであった。

《……》

彼女の細腕でぺちぺちと往復ビンタされたマウは、何ら痛痒を感じていなかつたため、氣の済むままにされた。

身体の震えは一向に止まらなかつたが、感情を切り離すことに成功した彼にとつて、もはや寒さは他人事でしかなかつた。

「ははは、こいつめ……」

メティアは、妹姫よりも背の低い小さな女の子の姿をしている。

彼女たち魔靈を生み出すのは帝国の女王であり、女王は人間で言つところの絶世の美女であるから、彼女の力で生み出された魔靈は、大抵が見目美しい女性の姿をしている。

「わ、わたしも混ぜろー。」

姉姫との通話を終えた將軍が、自ら進んでメティアの平手を受けて恍惚としていた。

「……」

その様子を見て、マウは心なし身を引く。

前々から、ちょっと変な女の子だとは思っていたが…

マウは、少し離れたところで用心深く一人を見守る。

その時だ、止まり木で翅を休めていたアブリカが、ぱっと飛び上がった。

マウの使い魔への愛情は深い。

滑空するアブリカを目で追つと、開きつ放しになっていた扉の先、廊下に小さな人影が立っていた。

人間には有り得ない、純粹な銀の色彩を持つ髪が、さらりと揺れる。魔靈たちを統べる王族の第一王女、小さい方とかよく言われる妹姫だった。

魔術師でもない彼女が前触れもなく現れたということは、つまりマウが影を踏んで連れてきたということだ。

ならば当然、マウは妹姫の隣に立つてことになる。

外出する時、アブリカの定位置はマウの肩の上だから、滑るよつて舞い降りてきた使い魔がマウの肩にとまつた。

マウの魔力は一通りアブリカの監視下にあり、またアブリカが行使する魔力はしばしばマウの理解を超えるため、じつした時間軸上の矛盾が起こるのはとして珍しいことではない。

魔力を使えない者からしてみると影踏みは瞬間移動としか思えない

から、空間跳躍を体感した姉妹は「おお……！」と緑色の大きな瞳を輝かせたのだが…

「……」

マウの部屋でじゅうれ合っている帝国軍元帥と氷雪の魔靈を視界に捉えて、急に無言になつた。

メディアのビンタを甘んじて受け入れていた将軍が、姉妹の平坦な視線に気付いてはつとした。

彼女は普段には見られない俊敏な動作で姉妹に駆け寄ると、恐れ多くも帝国の第一王女と手を繋いでいる不埒者に天誅を下そうとしあつたりと避けられて悔しそうな顔をした。

それから改めて姉妹にひしつと抱きつく。

「姫様……！」

姉妹は無抵抗だった。

傍らのマウを見上げて、

「わたし、授業中だつたんだけど……何なの？」「これ

「いやあ……」

マウは眉根を寄せて困ったように微笑んだ。

「……姉妹は何て？」

事情を知らない姉姫がここに居るということは、姉姫から情報のリークがあつたということだ。

おそらく先ほど将軍がそうしたよ、サイレンを介しての通話があつたのだろう。

「行けば分かるって。自分は今、手が離せないから代わりにお願いつて言われた」

「やうなの？ 何してるんだろ」

友人の余暇の過ごし方にマウは興味を抱いた。

しかし、その妹は断言した。

「どうせ下りないことよ。あの人、ちょっと田を離すと自分ルールでおかしなことし始めるから」

「やうなんだ」

意外な、という風に田を丸くするマウに、妹姫はふと思つた。

(…ああ、姉様はマウの前だと猫を被つてゐるのね)

マウは知らないのだ。

…姉は、決して優しくなどない。

マウが毛嫌いする女王の性質を色濃く受け継いでいるのは、力に秀でる妹姫ではなく、むしろ非力な姉姫なのだ。

とはいえ、姉とマウの交友に自分が口出しをしても仕方ない。

妹姫の興味は、すぐに別のことへ移った。

すりすりと頬を寄せてくる将軍を無視したまま、

「メディア、あなたいつの間にこれと仲良しになつたの？」

権能の関係上、筆談を不得手とするメディアは、意思の疎通が難しい魔靈だ。

だが、今は便利なのが横にいる。

メディアも心得たもので、第一王女の質問を無視してマウに詰め寄つた。

『おい小僧。何故、小さいのがここに居る？ 中へうつのはじついた』

思わずマウは吹き出してしまった。

姉姉妹は女王を雛形としているため、三人が並ぶと成長の過程を見ているような感じになる。

だから不遜な魔靈は、彼女たちをサイズで区別して簡潔に呼ぶことがままある。

反射的に妹姫を見て、笑いを噛み殺しきれずに「ふつふつ」と奇妙な吐息を漏らしたマウに、当の本人である妹姫が形の良い眉を跳ね

上げる。

「…なに？ 通訳なさい」

マウは魔術師だから、言葉を持たない魔靈と意思の疎通が出来る。

そうと知っている筈の魔靈は、だのに実際に通訳するとマウがハッつ当たりされそういうことを平氣で言つ。

当然、マウは自分の言葉で上手く誤魔化さねばならない。

「いや、姉姫に相談したいことがあつたんだよ。プライベートなことだから…でも姉姫はお願いされて来たんだよね」

さて、姉姫は何を考えて妹を寄越したのか。それが問題だ。

「マウはしゃがみ込んで、姉姫と視線の高さを合わせた。

「姉姫は、好きな子つているのかな？」

「…？」

唐突な質問に、姉姫は首を傾げようとして失敗した。
将軍にがつちりとホールドされていた。

「好きといつか…母様のことは尊敬してるけど」

試すような口振りで言つ。

マウは、姉姫の母である女王を忌み嫌つている。

母が留守にしている今だから、マウの方から歩み寄つて欲しいと期待していた。

その期待には応えられないと知っていたから、マウは純真な子供には真似できない卑怯さで気付かないふりをした。

「そっかあ。まだ七歳だもんな」

よしよしと妹姫の頭を撫でる。

子供扱いされていると感じて、妹姫は『機嫌斜めだ。

「やうやつてすぐ触る。本当に見境なしなのね

ちょっととした反撃のつもりだったのだが、マウは『見て狼狽した。

「触る」という単語に敏感な今日この頃なのである。

彼は素早く田線を逸らして、『まほそと独り』いた。

「まあいな…まあい流れだ…」

案の定、三人に責められた。

第六十七話、暗躍

「マウが女の方たちに言葉責めされている頃、姉姫は自らの使命を懸命に果たそうとしていた。

「がおー」

「…舐めてるんですか？」

就寝中、トカゲの着ぐるみに襲撃されるという事態に遭つても、エメスの対応は冷静だつた。

王族に忠誠を誓つている彼女だから、最低限の礼儀を守つて敬語だ。

エメスの寝室は、彼女のくつろぎ空間であるから、床一面にきめ細やかな砂が敷き詰められている。

黒騎士に夜なべして作つてもらつた着ぐるみで歩くと、体重のぶん足が砂に沈むため、背びれのついた尻尾の先が蛇行して浅い軌跡を描いていた。

エメスに憐れみの目で見られて、今はトカゲの姉姫はこほんと軽く咳払いした。

「まあ座れ

「色々と手遅れですけど…はあ…」

躊躇いがちに頷いて、エメスは砂の上で胡座を搔いた。

「いや、下着が見えてる」

「いや、殿下に言われても……」

普段の姉姫は、丈の短いドレスを好んで着用するため、けつこうな頻度で下着が見えるのだ。

マウに言わせてみれば「いや、そんなことはない」と真剣に否定するだろうが、それは姉姫なりに彼の前では男性の視線を意識して振る舞っているからだ。

居住まいを正してきちんと正座したエメスに、姉姫は鷹揚に腕を組んで小刻みに頷いた。

エメスは、ふと疑問に思つて尋ねた。

「暑くないスか？」

「暑い」

姉姫は即答した。

将軍には外気温をほとんど無視できる魔法みたいな鎧があるが、姉姫はそうもいかない。

いついかなる時も、帝国の王族は武装しない。

武装した人間たちを、優雅なドレス姿で見下すのが好きだからだ。

だが、今の姉姫は立派な着ぐるみで、しかも彼女は帝位の正統な跡継ぎと目されているから、正直エメスはこの国の先行きが不安になる。

「えつとね…」

「つあえず氣の利いたことでも言つべきかと口を開くも、姉姫に『まあ待て』と機先を制される。

「お前の言つたことは分かる」

差し出した片腕の先端には、猛禽類のそれを思わせる見事な鉤爪が具わっていたものの、きつちりと内部にまで布が詰まっているらしく、暖かみのある曲線を描いていた。

「あらかじめ黒騎士に注文しておいたのだが……どうもわたしのイメージが上手く伝わっていなかつたらしい。どうしてこうなった…」

途方に暮れた姉姫が、如何にも無念とこいつつに天を仰ぐ。

「だが、千載一遇のチャンスであることは確かだった。

歩行速度から逆算して、今頃マウは妹姫と合流している筈だ。

スケルトンの証言を鑑みるに、魔術師がよく使う「影踏み」とやらは瞬間移動ではない。

姉姫は魔術師ではないから魔靈の《声》を聞くことは叶わないが、言伝を依頼することはできる。

利害が一致したなら、マウは複数名の影を同時に踏める。魔術師としても稀有な能力だ。

マウ本人からしてあまり意識していないようだが、それは条件さえ整えば、彼の魔力を第三者が利用することも可能であるということだ。

影踏みは瞬間移動ではない。

だから今なら、神出鬼没の少年魔術師が姉姫の前に現れることがない。

姉姫は溜息を吐いた。

最強の魔靈に命を狙われるかもしないと知つても、彼は自分たちの傍に居てくれるのだろうか？

「母は、「彼女」を上手く説得できるだろうか。
おそらく難しいと、姉姫は見ている。

「…エメス、あなた…」

口調を正した姉姫に、エメスはぎょっとした。

幼馴染みの人間の少女と同じ姿をした魔靈に、姉姫は言つ。

「あなた、ドラクルに勝てる？」

無理よね…と頃垂れる第一王女に、エメスは身を乗り出して犬歯を

剥き出した。

「負けませんよー。あんなやつにー。」

「そう? …そつかしい。本当に?」

「もちろんー。」

勢いで言ってしまったエメスは、少し後悔した。
姉姫が、にやりと微笑んだからだ。

「よひしー。ならば教育だ」

掛かつて来なさいと怪鳥の構えをとる姉姫に、エメスは途方に暮れた。
少し遅れて、ああ、これドーラ公のコスプレなのかと腑に落ちた。

(頭悪いなあ…)

失礼だけど、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5724m/>

魔法日和

2011年1月26日23時42分発行